

美濃加茂市民ミュージアム

紀 要

第15集

2016

美濃加茂市民ミュージアム紀要 第15集

目 次

佐野一彦資料目録（著作原稿の部）

渡辺 祐子	_____	1
可児 光生		

渡辺和郎の地方文芸活動について

桜田 幸世	_____	1
-------	-------	---

佐野一彦資料目録(著作原稿の部)

渡 辺 祐 子
可 児 光 生



佐野一彦(1903～1997)は、1945年4月に神戸から加茂郡伊深村(現在の美濃加茂市伊深町)に疎開し、1997年に94歳で亡くなるまで伊深で暮らし、広い分野で著述活動をした。資料は

ほとんどそのまま自宅に残されており、そのうち約7,000枚の写真資料は、既に美濃加茂市に寄贈されてリスト化されている。その一部は、美濃加茂市民ミュージアム「ていねいな暮らしのあったころ」展(2009年12月)で紹介している。

写真以外の資料群は次のとおりである。

- (1)日記
- (2)著作原稿
- (3)書簡類
- (4)音声テープ、スライド写真

これらの資料の調査は2012(平成24)年6月から、美濃加茂市伊深町の佐野宅において、次女綾目氏の全面的協力のもと始まった。このうち、(1)の日記については、疎開後の73冊の「伊深日記」(伊深村に疎開する以前、及び伊深日記後を含めると合計310冊が現存)を目録化し、一部は、美濃加茂市民ミュージアム『佐野一彦の「伊深日記」』展(2013年12月)で紹介した。(2)と(3)については、日記の仮整理後、順次取りかかり、今回(2)の著作原稿481点について目録化が終了したので報告するものである。なお、(2)(3)(4)については、2014年(平成26年)10月22日付で当館に寄贈された。

著作原稿の内容は、大きく分けて①思想史、古典文学など大学講義録を中心とした学術に関するもの②「伊深の民俗と歴史」や「伊深小学校百年史」編纂など地域に関するもの③佐野家や個人に関するもの④各雑誌・新聞の寄稿を含めた随想・詩歌である。佐野の研究領域は極めて多岐にわたっているが、今回整理を行った資料からその全貌の一部が窺い知れる。

2012年度から断続的に調査を進めてきたが、今年度、詳細な整理作業をおこなった。

作業は、渡辺祐子(当館学芸員)と可児光生(当館館長)が中心になって進め、池戸桃子、入江隆亮、岡田彩花(いずれも当館学芸係臨時職員、岐阜大学教育学部在籍)が入力作業などに関わった。

(わたなべゆうこ 美濃加茂市民ミュージアム学芸係)
(かに みつお 美濃加茂市民ミュージアム 館長)

佐野一彦 年譜

西暦	和暦	年齢	で き ご と
1903	明治 36	0	12月19日、東京、麹町区一番町（現・東京都千代田区）に生まれる。 父は、佐野善作（東京商科大学（現・一橋大学）初代学長）。母は、きみ。
1910	43	7	大久保の高千穂小学校に入学。
1916	大正 5	13	神田の明治中学に通う。科目のうち、歴史と植物とを好む。
1917	6	14	日比谷の府立第一中学校（現・日比谷高校）に転校する。科目のうち、国語、歴史、博物を好む。
1919	8	16	母逝去。哲学、宗教、古典文化に関心を持つようになる。
1920	9	17	第一中学校4年修了、東京商科大学予科へ入学。
1923	12	20	大学に進み、哲学を専攻する。ドイツ文化に関心を持つとともに、日本の古書を多く読む。
1926	15	23	学士試験に合格、卒業。6月、ドイツに留学、ベルリン大学に学ぶ。文化史に傾倒し美術史を専攻する。
1929	昭和 4	26	大学内にあった日本文化研究会「やまと」に参加、のちに妻となるえんねと出会う。
1931	6	28	ベルリン大学哲学科美術史学科卒業（12月）。哲学博士の称号を授与される。
1932	7	30	帰国、神戸商業大学助教授に就任（3月）し、哲学概論と社会学を担当する。
1934	9	31	えんねと結婚。兵庫県御影町に住む。
1935	10	32	長女春枝生まれる。
1937	12	34	次女綾目生まれる。随筆集『おのづから』を出版。
1938	13	35	この頃、妻えんねと日本文学の作品のドイツ語訳に従事。
1939	14	36	柳田國男の「民間伝承の会」に参加する。ベルリンの出版社のもとでドイツ語訳の「日本物語集」成る（出版に至らず）。
1942	17	39	神戸商業大学教授に就任、思想史と歴史哲学を担当する。三女照世生まれる。神戸の市民講座にて「日本歴史の精神」を講ず。
1943	18	40	勲四等瑞宝章を授与される。三女照世逝去。この頃、京都などで、日本の文化、歴史思想の講演をする。
1944	19	41	『こころとみち』を出版する。
1945	20	42	3月末、病気を患う。岐阜県加茂郡伊深村（現・美濃加茂市伊深町）に家族とともに疎開し、のち定住する。
1946	21	43	大学へ再び勤める。上代思想史を講じ、なかばにして追放、講義をやめる。
1948	23	45	柳田國男に「美濃伊深村の民俗」の原稿を送る（7月2日）。8月14日に柳田から論評の返事あり。以後、交流が深まる。 柳田はのち、1958（昭和33）年に神戸新聞「故郷七十年」のシリーズに引用する（『柳田國男集別巻第三』に所収）。
1949	24	46	『ゲテ前後』を出版する。
1951	26	48	追放解除。「美濃伊深村の民俗」を執筆し、初稿本が完成する。 『古体和歌山居六百首』を出版する。伊深村の青年たちを中心となり「ななくさ会」が発足する。
1952	27	49	父逝去。神戸商船大学講師に就任する。「伊深日記」は10月で終わり、「はつしも」に名が変わる。
1955	30	52	「美濃伊深村の民俗」を改めて書き始める（謄写版。神社仏寺篇、年中行事篇、草木と子ども篇のみ刊行）。
1956	31	53	この頃、伊深村の青年団、婦人会などに、日本の習俗、信仰、文化の講演をする。
1958	33	55	「美濃国の民俗概説」（日本民俗学大系）を執筆、発表。
1959	34	56	「美濃民俗雑報」（濃飛民俗）を執筆、発表。
1962	37	59	神戸山手女子短期大学講師に就任。
1964	39	61	『佐野一彦先生還暦記念論文集「永遠の回帰」』を出版する。
1966	41	63	愛知県立芸術大学教授に就任（昭和48年3月まで）。
1973	48	70	『伊深小学校百年史』の編集にたずさわる、刊行。
1974	49	71	『美濃加茂市史』の編集にたずさわり、民俗編、通史編（古代）を担当する。 民俗編は、1978（昭和53）年、通史編は、1980（昭和55）年に刊行。
1976	51	73	勲三等旭日中綬章を受章する。『佐野善作伝』を出版する。
1977	52	74	美濃加茂市文化財保護審議委員を務める（昭和56年まで）。
1993	平成 5	90	『かつひこ句集』を出版。
1997	9	94	1月10日、逝去。

この年表は「佐野一彦先生還暦記念論文集 永遠の回帰」および、佐野綾目氏からの聞き取りを参考にして作成した。

【凡 例】

1. 資料の並びは、分類（【分類表・分類番号】参照）順とし、次に作成年月日順とした。作成年月日の記載のないものは、同じ文書で巻数が付してあるものの場合は巻数順で並べたり、内容の同じまとまりで並べたりして、それ以外は、その後に並べた。ただし中には、作成年月日があっても、巻数順。名称や内容のまとまりで並べたものもある。たとえば分類のうち、分類 210（2. 原稿著作 [地域] 1. 伊深、0. 総記）は、作成年月日ではなく、巻数順や名称・内容のまとまりを優先してに並べた。分類 130（1. 著作原稿 [学術・教養] 3. 文学・古典）及び分類 430（4. 著作原稿 [その他] 私的なものも含む 3. 和歌・詩歌）に、各々巻数が多いため、巻数順や名称・内容のまとまりで並べ、かつその中で作成年月日順に並べた。
2. 「文書名」は、表紙に記されたものを採用している。
3. 「内題」は、見開きに書かれている文書名である。表紙と重複する名称が多いが、そのまま書き出した。
4. 「区分」は、「手稿」と「印刷」に分けた。「手稿」は、いわゆる手書き原稿の意で、「印刷」は、手刷り、刊行物を問わず多数刷り写したものの意である。手稿の場合、草稿か成稿かは未確認である。ただ原稿によっては明記されているものもある。
5. 「形態」は「冊」「綴」「部」「袋」等で区分した。そのうち「綴」とは、糸でかがって和綴じにしたものと、原稿を折り合わせたところまでで、紙で覆ってある状態のものと、おおまかに二通りある。
6. 「作成年（和暦及び西暦）」は、手稿の場合、記載があるものは日付とともに書き出し、印刷した雑誌、新聞の場合は、発行年月日、または文末にある年月日（おそらく作成日）を記載した。製本時の年月日のみ記載のものは、製本年「以前」と表記するか「頃」等と表記した。和綴じの原稿は、作成と製本の時期にひらきがあることが多々ある。
7. 「大きさ」は、資料の大きさを縦×横（単位：cm）で表記した。
8. 「注記」欄の「 」は、資料本文からの引用・抜粋である。特に意図的に抜き出したものでなく、序やあとがきに記載されている部分をメモ程度に記した。
9. 「備考」欄は、資料の補足説明などを示した。
10. 「受入番号」は、受入時に付した整理番号である。
11. 歴史的仮名遣いや旧字体は、記述のままを原則とするが、一部現代仮名遣い、新字体に書き直したのものもある。

【分類表・分類番号】

※ 著作原稿には、手控え、メモ、抄録、他書籍からの写し等も含まれる。

1. 著作原稿 [学術・教養] 大学講義・講座等

1. 思想・文化 → 分類 110
2. 歴史・民俗 → 分類 120
3. 文学・古典 → 分類 130
9. 全般・その他 → 分類 190

2. 著作原稿 [地域]

1. 伊深

0. 総記 → 分類 210
1. 歴史・民俗 → 分類 211
2. 小学校等 → 分類 212
9. その他 → 分類 219

2. 美濃加茂市

1. 美濃加茂市史 全体 → 分類 221
2. 美濃加茂市史 民俗 → 分類 222

3. 美濃加茂市史 歴史 → 分類 223

9. 市史以外 → 分類 229

3. 岐阜県・その他

1. 全般 → 分類 231

3. 著作原稿 [家族]

1. 自伝 → 分類 310
2. 親族 → 分類 320

4. 著作原稿 [その他] 私的なものを含む

1. 随想 → 分類 410
2. 小説 → 分類 420
3. 和歌・詩歌 → 分類 430
9. その他 → 分類 490

8. 他の資料 → 分類 800

佐野一彦 資料目録（著作原稿の部）

分類 1、著作原稿 [学術・教養] 大学講義・講座等 1、思想・文化

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
1	宣長古学辞典	宣長古学辞典	手稿	1	冊	昭和3年 から	1928年 から	20.9 × 16.4	86	表紙裏「昭和十六年六月三日製本大阪八幡筋のみちや千代紙」蔵書印 内題「昭和のみ代みとせのなつ 柏林の都にて 書きはじめる草稿 巻の一」「はしがきまことはあとがき せうわとゝせまりみとせなつ」「かさねてはしがき ここにせうわのととせまりいつとせのなつさらにかきたす」メモ1枚	—	110	383
2	日本文化の特質の問題	—	手稿	1	部	昭和13年 8月4日	1938年	260×17.7	35	「誠明公論 第一巻第五号所載」 文末「(昭和十三年八月四日)」	—	110	248
3	西洋と東洋	—	印刷	各1	冊	昭和13年 初秋	1938年	22.5×15.2	抜刷 18	抜刷1、雑誌1 ・抜刷「思想十月號別刷」。文末「十三年初秋」「思想」岩波書店(S13年10月1日発行、22.2×14.8、282頁)と一緒にまとめてある。	—	110	466
4	きりしゃふいろそふいや 覚書 その四	きりしゃふいろ そふいあ 於ほえがき四	手稿	1	冊	昭和13年 ～ 昭和14年	1938年 ～ 1939年	20.4 × 16.1	156	巻頭「神戸大学に哲学史を講じたる昭和十三年 十四年ころものせる…まきまきは 御影にて焼き失せ この四のまきのみ ここにのこれり」 序「一九三九のとし やよひ」	—	110	371
5	賀茂翁家集 おぼえがき	賀茂翁家集 おぼえがき 蔵書印	手稿	1	冊	昭和12年 1月18日 ～ 昭和15年 7月6日	1937年	20.4 × 16.1	116	巻頭「せうわとゝせま里ふたとせのとしたちかへりける むつき とあまり やうかのひ」 「古典全集の賀茂真淵集にをさめたるものによる 参考賀茂真淵全集第四(明治三十七年 国学院)」「賀茂翁家集」文末「せうわのととせまりいつとせといふとしのなつ」、「にいまなび」 文末「注釈は昭和ノ十五年七月二モノシ、ソノ六日二カキヲフ	—	110	357
6	アダム・ミュルレルの 分業論たくらみとこひ — 十八世紀ドイツ思 想史のうち —	—	印刷	各1	部	分業論： 昭和15年 4月8日 たくらみと こひ： 昭和30年 3月(作成年)	1940年 1955年	各 22.2 × 15.1	→	分業論：28頁 国民経済雑誌第六十八巻第五号抜刷 文末「十五年四月八日」たくらみとこひ：36頁 神戸商船大学紀要・文科論集・第三号(昭和三十年・一九五五・三月) 抜刷 表紙に蔵書印	—	110	448
7	ドイツ思想史講義 十八世紀	ドイツ思想史講義	手稿	1	綴	(内題) 昭和16年 夏	1941年	23.5 × 17.8	208	蔵書印	—	110	142
8	新たに文化をおこす といふこと その他草稿	—	手稿及び 印刷	8	点	昭和16年 11月18日 ～ 昭和20年 4月11日	1941年 ～ 1945年	原稿 各 26.4 × 18.2	→	「新たに文化をおこすといふこと 関西学院新聞十六年十二月(文末)昭和十六年十一月十八日」10頁「史観のみだれ(文末)十八年七月十三日」20頁「みやびの文化(文末)九月十六日夜」12頁「代りもの(文末)七月二日」11頁(新聞切抜き4枚) 大学新聞切抜き「改めて踏む道 國史に立つ世界史の矛盾解明 二十年四月十一日」、新聞切抜き「代わりもの」「信じると学ぶ」、神戸新聞四月十九日朝刊1枚	—	110	247
9	ドイツ思想史講義	ドイツ思想史講義 (一七五〇年より 一八一〇年まで)	手稿	1	綴	(内題) 昭和17年 冬	1942年	23.1 × 18.2	269	「はしがきこは昭和十七年の冬より十八年の春にかけて神戸の大学においてなしたる「思想史」の講義の台本なり」	後に名古屋の黎明書房より「ゲエテ前後」と題し刊行したものの元原稿とある。	110	143
10	神な可ら能道	—	手稿	1	冊	昭和16年 11月18日 ～ 昭和18年 8月はじめ	1941年 ～ 1943年	23.4 × 16.5	106	目次あり。「はしがき ふるき原稿ののこれるをとりあつめてこのひとまきをあむ、…昭和二十三年といふ年のはる」 「國體の本義 兵庫県商業報国会本部勤労報国隊指揮者鍊成講座 昭和十八年六月二十九日講演(文末)六月二十八日、二十九日稿」「神ながらの道 神戸市教育課「神祇講座」昭和十八年八月九日朝講義(文末)昭和十八年八月ははじめ稿」「新たに文化をおこすといふこと 関西学院新聞、昭和十六年十二月号所載(文末)昭和一六、一一、一八」「史観のみだれ 神戸商大新聞 昭和十八年夏、書評欄所載(文末)昭和一八、七、一三」「代りの物 神戸新聞 昭和年七月所載(文末)昭和□、七、二」「みやびの文化 神戸新聞 昭和年九月所載(文末)昭和□、九、一六、夜」ドイツ語が印字された白紙メモ1枚	—	110	162
11	文化の傳統	文化の傳統	手稿および 印刷	1	綴	昭和18年 9月21日 ～ 19年 7月20日	1943年 ～ 1944年	26.2 × 18.4	114	巻頭「ここに昭和十八年と十九年にわたつての随想および論文のおもなるものを集めて一冊とする。」目次あり。「芭蕉の俳諧」(文末)「(昭和十八年九月二十一日)はころも「学藝」昭和十八年十二月発行 第三十一號所載」「和歌の傳統」(文末)「(昭和十八年十二月五日)國風(新短歌雑誌)昭和十九年二月号所載」、「歴史の傳統は昭和十九年正月八日に書きはじめて十四日に成り、国民経済雑誌の二月号に掲載された。(文末)昭和十九年正月十五日」「中世歌学における歴史思想…昭和十九年の暮れに執筆のものである。(文末)昭和十九年十一月中頃稿、十二月二十二日●筆」「日本文化の歴史的使命は、昭和十九年二月五日に稿をおこしその月の八日に成る。理想社の「理想」の三月号に掲載された。「歴史の道」は「現代」求めに應じ、同じ年の七月十七日に筆をおこし、その二十日に成る。」	—	110	160
12	歴史思想史講義要目 附 著作年表 中	歴史思想史講義 要目 附 著作年表 中	手稿	1	綴	昭和18年 10月以前、 19年 なつ以前	1943年 以前 1944年 以前	25.4 × 18.5	106	はしがき「昭和二十六年のなつ」 本文頭「歴史思想史講義要目 昭和十八年十月、十一月 ふたつきにわたりて神戸の大学にてなしし講義の要目なり。いまその日記よりかきうつす。」「みやびの傳統と尊皇攘夷講義要目 十九年のなつに八月のなぬかより九月のふつかにいたる…神戸の大学にてなしし講義の要目 いまその日記より書きうつす。」「著作年表中ノ巻 つゆくさの日記よりぬきがきしてつくりぬすなはち昭和の十二年の正月より廿年のなつにいたる」	—	110	270
13	婦人公論 「日本人の心と教養」	—	印刷	1	綴	昭和18年 11月号	1943年	21.0 × 14.8	12	2～8頁「日本人の心と教養」寄稿	封筒「コピー古橋さんより平成十七年にもらう」	110	271

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
14	中世歌學における 歴史思想「みやびの 傳統」のうち	—	印刷	1	部	昭和19年 11月中頃	1944年	26.1 × 18.2	16	文末「昭和十九年十一月中頃稿、十二月二十二日補筆」「再 再校」活字原稿を用紙に張り付けている。	—	110	282
15	日本文化の特質	—	手稿	1	綴	昭和20年 2月	1945年	21.6 × 15.2	282	表紙「一 国学の文化類型学(一四一-一七八) 二 日本 文化の時間的性質(一七九-二四三) 三 世界史の問題(二 六四-三一四) 三の文末「昭和二十年二月稿 二十一年二月補筆」	—	110	235
16	稿本 上代思想史講義	上代思想史講義	手稿	1	綴	昭和21年 春以前	1946年 以前	27.2 × 20.0	224	巻頭「こは 昭和のはたとせまりひととせといふとしの はるよりなつにわたりて神戸の大学においてなしたる思 想史の講義なり。昭和二十二年春」「序説 昭和二十一年 春」後半「これに関するおぼえがきの日記のをここに あるをとりあつめてつぎにをさめ、…昭和二十三年春」 のし紙1枚	—	110	161
17	国体の本義	—	手稿	1	部	(昭和22年か) 6月28日、 29日稿	1947年 か	35.6 × 34.0	18	序論「昭和二十二年秋」	—	110	239
18	平田篤胤の研究 はつあらしの巻	平田篤胤の研究 はつあらしのまき	手稿	1	冊	昭和23年 春以前	1948年 以前	23.4 × 16.5	106	「おくがきはつあらしのまきををはじめとして…なでしこ のまきまで いまはこのはつあらしひとまきのみぞのこ りける 昭和二十三年春」	—	110	340
19	各種草稿	—	手稿	1	袋	原稿 「たくらみと 想比」のみ 年月日あり: 昭和24年 12月17日	1949年	→	→	日本語、ドイツ語の原稿・覚え書き、1冊、21.2×15.0、46頁 ・國家学 その一、1部、26.4×19.6、116頁 ・Schlözerの一般國法学、1部、26.0×19.0、162頁 ・たくらみと想比、1部、20.0×26.8、216頁 文末「(昭和二十 四年十二月十七日)」 ・Pietismus、1部、26.0×18.8、26頁・クリスティアン・ヴォル フ、1部、26.6×18.8、158頁 ・シュレーツァーの國家学、1部、26.0×17.8、64頁 ・封筒入り原稿、8部、上から5頁、26頁、86頁、28頁、24頁、 40頁、44頁、58頁、25.3×19.8、えんね書習字、1枚、 33.3×24.5、序説、第六節、16.3×25.1、86頁	—	110	446
20	青年の文化的使命	青年の文化的使命	手稿	1	綴	昭和27年 7月	1952年	25.7 × 18.2	134	巻頭「昭和二十七年八月二十七日、二十八日のふつかに 渡って、一時間づゝ、加茂部の青年団の指導者講習会に において講演したものである。その講習会は、伊深の正眼 寺本堂において行はれた。…」巻末「昭和二十七年七月 作、八月二十四日講演」	—	110	185
21	神道思想史 上	神道思想史 上巻	手稿	1	綴	(巻頭)講演後 「直ちに筆をと って書きしる さうとした。」	1952年	25.3 × 18.5	174	巻頭「六月の二十一日に、岐阜の文化會「かもしか會」とい うふものの席で、その会員のひとりとして、講演の番がま はってきて、会員たちに述べようとしたものである。…と きに昭和の二十七年、七月のついたち。」	—	110	269
22	ユスツス・モエゼル	—	印刷	40	冊	昭和27年 夏	1952年	21.2 × 15.2	34	表紙「神戸経済大学創立五十周年記念文集(経済学編抜刷)」 文末「(昭和廿七年、夏)」	—	110 か	462
23	講演 あひ多可ら	講演 あひ多可ら	手稿	1	綴	昭和28年 1月	1953年	25.8 × 18.4	94	巻頭「この講演は、神戸の山手女子学園でその短期大学の 学生にしたものである。」巻末「昭和二十七年十二月十日、山 手女子学園にて講演、昭和二十八年一月、書き留む」	—	110	163
24	たくらみとこひ 一十八世紀ドイツ思 想史のうち一	—	印刷	1	冊	昭和30年 3月	1955年	21.2 × 15.2	36	神戸商船大学紀要・文科論集・第三号(昭和三十年一九 五五年三月)抜刷	—	110	465
25	日本の徳目と 人間像(一) 天照大神	日本の徳目と 人間像(一) 天照大神	手稿	1	綴	昭和39年 8月半ば	1964年	26.1 × 18.6	186	巻頭「山手女学園の講義の題目なり。…四月に書きおこし、 この年の八月のなかばにこの巻をかきへつ。昭和三十九 年立秋」目次あり。「後記昭和四十九年正月」『一中・日比谷 物語』出版の案内(封筒入)	『神戸商船大学紀 要第一類・文科論 集・第八号(昭和 三十五年一九六 〇年二月)抜刷 永遠の回帰 附 民俗学のこと』1冊 挟んである。	110	267
26	講演 三島由紀夫と 國学の精神上	三島由紀夫と國学 の精神上・三島由 紀夫と國学の精神 上 第一回講演 國體論	手稿	1	綴	昭和46年 夏以前	1971年 以前	26.2 × 18.8	140	目次あり。はしがき「ことしの春 岐阜の渡辺孝からあ る夜電話があつて、…岐阜県教育懇話会というふものの 講演会に三島さんの話しをしてくれといふ懇望で…この ときは草稿をもたずに話をしたので、ここにまづそのと きの話しを辿って原稿を書きととのへ、…第一回には、 國体、すなはちみ國がらのことを語った…第二回は、三 島由紀夫の美的精神について述べる、…昭和四十六年夏」 本文末 「昭和四十六年五月十六日講演 昭和四十六年七 月三十日 加筆」「あとがき 昭和四十六年八月三日」巻 末「注記」あり。「神棚のまつり」記事1枚あり	はしがきは、「第一 回と第二回との間 に筆を執り、… 第二回の講演をす ませたのちにさら に書き次いでここ に至った。…	110	264
27	講演 三島由紀夫と 國学の精神 下	三島由紀夫と國学 の精神下・三島由 紀夫と國学の精神 下 第二回講演 美的精神	手稿	1	綴	昭和46年 8月上旬	1971年	26.1 × 18.5	98	はしがき「第二回のは講演のまへ、六月十一日ごろから 筆を執り、およそこれに添って講演し、のち八月の下旬 に補って成ったものである。」本文末「昭和四十六年六 月二十一日講演 昭和四十六年八月十日加筆」あとがき 「昭和四十六年八月十三日」	巻末「注記」あり。	110	265
28	思想史概説講義 卷ノ一 奈良時代	思想史概説講義 卷ノ一 奈良時代	手稿	1	綴	—	—	25.4 × 18.2	112	—	—	110	107

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
29	思想史概説講義 巻ノ二 平安時代	—	手稿	1	綴	—	—	25.4 × 18.1	132	—	—	110	421
30	思想史概説講義 巻ノ三 鎌倉時代	思想史概説講義 巻ノ三 鎌倉時代 思想史概説講義 巻ノ三 鎌倉時代	手稿	1	綴	—	—	25.2 × 17.4	152	—	—	110	108
31	思想史概説講義 巻ノ四 室町時代	—	手稿	1	綴	昭和28年 立春	1953年	25.6 × 18.4	146	巻末「昭和二十八年 立春 稿なる」	—	110	109
32	思想史概説講義 巻五 桃山時代	思想史概説講義 巻ノ五 桃山時代	手稿	1	綴	—	—	25.8 × 18.6	44	—	—	110	110
33	思想概説講義 巻六 江戸時代 上	思想史概説講義 巻ノ六 江戸時代 上	手稿	1	綴	—	—	25.6 × 18.4	140	—	—	110	111
34	三十年度 講義草稿 巻一	三十年度講義草稿	手稿	1	綴	昭和31年 2月以前	1956年	25.3 × 18.2	206	はしがき「昭和三十年の四月から翌くる三十一年の二月まで、神戸の深江の商船大学でなした講義の草稿である。…三十年の講義はおそらく廿九年の講義を修正、増補したものと思はれる。…この草稿に残ってある三十年の講義の題目ハ、やはり二十九年のと等しく「社会学ならざる社会学」といふべきかも知れない。昭和三十三年秋」	—	110	144
35	三十年度 講義草稿 巻式	—	手稿	1	綴	—	—	25.4 × 17.9	184	—	—	110	145
36	三十年度 講義草稿 巻三	—	手稿	1	綴	—	—	25.3 × 17.9	204	—	—	110	146
37	みやびの文化講義	みやびの文化講義	手稿	1	綴	昭和31年 以前	1956年 以前	25.4 × 18.2	204	巻頭「昭和三十一年四月から、神戸の山手女学園で文化史特殊講義のなかで講じた。…昭和三十五年春」	ほかに「みやびの文化」と題したものであり(上下二巻)、また昭和32年の秋に「深江の紀要に載せたものもある。」	110	164
38	みやびの文化 上	みやびの文化	手稿	1	冊	—	—	25.0 × 18.0	106	用紙3枚(時間割、試験施行のお願い、計算メモ)	—	110	165
39	みやびの文化 下	みやびの文化 下	手稿	1	冊	—	—	25.0 × 18.0	110	しおり1枚。「補注」あり。	—	110	166
40	みやびの文化	—	印刷	6	冊	昭和33年 2月	1958年	21.2 × 15.2	26	神戸商船大学紀要・第一類・文科論集・第六号(昭和三十三年—一九五八年—二月) 抜刷	—	110	463
41	ドイツロマン派の 文化と文化観	ドイツロマン派の 文化と文化観	手稿	1	綴	(ドイツ思想史) 昭和33年度、 (ドイツロマン派) 昭和44年度	1958年 、1969年	26.4 × 19.0	146	巻頭「この一篇は右に掲げるとき種々の断片を散佚を恐れてまとめたものである。…昭和五十六年春」「講義要目」ドイツ十八世紀思想史講義(昭和三十三年度、神戸大学)、昭和三十三年度講義要目、昭和三十四年度講義要項、随筆集パウデウマ内容目次(作成年あり 昭和12年12月～16年7月3日)、在原業平(日本の徳目と人間像)(未完)、ドイツロマン派の文化と文化観(昭和44年度講義草稿断片) 白紙1枚	別紙「ドイツ 18世紀思想史講義(昭 33 年神戸大学)は項目のみ。同じ題の記した袋があり、メモ類が入っている」	110	154
42	永遠の回帰 附：民俗学のこと	—	印刷	40	冊	昭和35年 2月	1960年	21.2 × 15.2	26	表紙「神戸商船大学紀要第一類・文科論集・第八号(昭和三十五年—一九六〇年—二月) 抜刷」	—	110	461
43	遁世談	遁世談	手稿	1	綴	昭和36年 初秋	1961年	26.1 × 18.0	222	はしがき「中つ世の発心集、撰集抄、閑居の友などを座右において、まず平安の朝のはじめの玄資僧都の遁世の渴仰のあとをたずねた。…昭和ノ三十六年、夏八月の朔日にこの稿をおこして初秋に及ぶ。…昭和三十六年というふ年の八月の十三日 この序をしるす」追記「おなじ年の旧七月十五日に追記す」目次あり。	メモ片あり。	110	330
44	續 遁世談	續 遁世談	手稿	2	綴	昭和36年 9月10日 以前	1961年 以前	26.2 × 18.3	164	はしがき「昭和三十六年というふ年の秋九月十日」附記「同じ昭和の三十六年の暮れ「遁世談、玄資僧都と空也上人」といふ論文をものにして深江の大学の紀要に寄稿したり。」「附録 僧別目録」はがき(大熊信行より)1枚あり。「拾遺遁世談」(25.6×18.5、8頁、1綴)あり。	—	110	331
45	遁世論	—	印刷	8	冊	昭和37年 3月	1962年	21.2 × 15.2	40	表紙「神戸商船大学紀要第一類、文科論集・第一〇号(昭和三十七年—一九六二—三月) 抜刷」	—	110	468

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
46	日本における 人間関係の諸相上巻	日本における 人間関係の諸相 上巻	手稿	1	綴	昭和37年 以前	1962年 以前	26.0 × 18.1	108	序「昭和三十七年の春から一年間、深江においてなした講義の草稿である。…昭和三十一年九月十二日」	—	110	97
47	日本における 人間関係の諸相 中巻ノ上	日本における 人間関係の諸相 中巻ノ上	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.2	98	目次「九、神婚伝説は先祖の物語りなること。齋き祭ることの世つぎ。 十 先祖の祭り。…」	—	110	98
48	日本における 人間関係の諸相 中巻ノ下	日本における 人間関係の諸相 中巻ノ下	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.2	148	—	—	110	99
49	日本における 人間関係の諸相 下巻ノ上	日本における 人間関係の諸相 下巻ノ上	手稿	1	綴	昭和37年 10月の末 から	1962年 から	26.0 × 18.1	126	序「改めて再び一般的な人間関係の、國固有の様相を語りたいと思ふ。…秋の稲を刈りをへて、十月の末から冬にかけて、かつかつ書きつづける。…昭和三十一年秋十月	目次あり。	110	100
50	日本における 人間関係の諸相 下巻ノ下	日本における 人間関係の諸相 下巻ノ下	手稿	1	綴	昭和38年 1月21日	1963年	26.0 × 18.3	136	文末「昭和三十八年一月二十一日 脱稿」あとがき「…下巻は、上も下も、日本の言語表現の特質から説きおこして日本における人間関係の特徴あるふしづを、日本の生活と文化にわたって明らかにしようを試みたものである。昭和三十一年正月」	—	110	101
51	改訂増補 十八世紀 ドイツ思想史講義	改訂増補 十八世紀 ドイツ思想史講義	手稿	1	綴	昭和30年 代	1955～ 64年	26.0 × 18.2	154	巻頭「昭和の三十年代のものと思はれるが、その製作年月は判然としない。…いま、未完のままその原稿をここに綴じて保存する。…昭和五十七年夏八月」	—	110	147
52	人類史と永遠の回帰	—	手稿	1	綴	昭和31年 頃	1956年 頃	26.0 × 17.9	152	序「これは昭和三十一年度の講義の草稿である。… 昭和三十三年秋」跋に未完とあり。目次あり（巻末に別紙で貼り付けてある）	—	110	132
53	他界思想考	他界思想考 地獄極楽の話し	手稿	1	綴	昭和34年 秋	1959年	26.2 × 18.6	184	巻頭「これはもと「地獄極楽の話し」とあって、通俗の講演の草稿であるものを、かつかつ書き足していったので、今改めて「他界思想考」と題する。…この「他界思想考」は昭和三十四年の秋に稿をついで成ったものであるが、これを基にして、その年の暮れに「永遠の回帰」といふ論文を書いた。昭和三十五年五月」目次あり。「地獄極楽の話し・上・はしがき」この八月になゝくさでかういふ題で講演をした。」後半に補注あり。	—	110	168
54	旧約聖書の歴史思想	舊約聖書の 歴史思想	手稿	1	綴	昭和35年 夏	1960年	26.2 × 18.4	88	目次あり。後記「昭和三十五年の夏、創世記の天地創造より樂園喪失まで成り、そののち書きつづけることなくて止みぬ。昭和三十八年二月初午」	—	110	148
55	文化傳承論 上	文化傳承論	手稿	1	綴	昭和37年 春頃	1962年	25.8 × 18.2	160	はしがき「昭和三十七年春から秋のはじめにかけて、深江の商船大で講義した。…昭和三十一年立秋」目次上巻「天若御子(文芸のモチーフと昔話と神話)二 ほととぎす(風流韻事と信仰生活) 附田植系」ほか	—	110	171
56	文化傳承論 下	文化傳承論 下	手稿	1	綴	昭和37年 8月3日	1962年	26.0 × 17.0	110	巻末「昭和三十七年八月三日稿」	上巻に下巻の 目次がある。	110	172
57	日本文化と外國文化 (未完)	日本文化と 外國文化 (未結)	手稿	1	綴	昭和40年 9月頃	1965年	26.4 × 18.1	144	序「昭和四十年の秋、九月のなかばに、正眼寺の短期大学において五日間にわたってなした特別講義である。…昭和ノ四十年の秋の彼岸」	—	110	140
58	歴史と道徳 上	歴史と道徳 上	手稿	1	綴	昭和40年 4月から	1965年	26.2 × 18.6	132	序「昭和ノ四十年度に、神戸の商船大学においてなしたものであり、その草稿は、その年の春四月からおひおひ書きつづけた…」目次あり。	—	110	129
59	歴史と道徳 中	歴史と道徳 中	手稿	1	綴	昭和40年 暮	1965年	26.2 × 18.2	148	序「昭和ノ四十年の暮に至りて書き終へ、且つ講じ了へた。…」目次あり。	—	110	130
60	歴史と道徳 下	歴史と道徳 下ノ巻	手稿	1	綴	昭和41年 正月・2月	1966年	26.1 × 18.1	142	序「…未完のままに終っている。…この下巻は、昭和四十一年の正月と二月とに成ったものである。」目次あり。	—	110	131
61	日本文化の諸問題 巻一 日本文化の諸問題 巻二 日本文化の諸問題 巻三 日本文化の諸問題 巻四 附總目次 日本文化の諸問題 巻五	日本文化の諸問題 巻一 日本文化の諸問題 巻二 日本文化の諸問題 巻三 日本文化の諸問題 巻四附總目次 日本文化の諸問題附 巻五	手稿	5	綴	昭和42年	1967年	→	→	一卷巻頭「昭和の四十二年の春より愛知県立藝術大学においてなしたる講義の草稿な里 ことに夏休みの八月より九月に可けてこの大部分を書き終へぬ」・表紙「日本文化の諸問題 巻一」1 綴、昭和 42 年、1967、26.3×18.1、140 頁、ドイツ語記事切抜きあり・表紙「日本文化の諸問題 巻二」、1 綴、巻頭「九月の五日に及びて、書きつづり終へつ 昭和四十二年秋」、1967、26.3×18.3、178 頁、新聞記事の切り抜きあり・表紙「日本文化の諸問題 巻三」、1 綴、巻頭「昭和四十二年の九月はじめに成った巻の二につづけて書きつづり、昭和四十四年正月」、1967 頃、26.4×18.2、136 頁・表紙「日本文化の諸問題 巻四」附總目次、1 綴、巻頭「昭和四十二年度講義原稿 昭和四十四年正月」、1967 頃、26.3×18.3、114 頁・表紙「昭和四十二年度講義原稿 日本文化の諸問題 巻五」、1 綴、巻頭「昭和四十四年正月」、1967 頃、26.2×18.1、116 頁 後がきあり	—	110	427
62	文化類型学講義 巻一	文化類型学講義 巻ノ一	手稿	1	綴	昭和45年 7月25日～ 8月4日	1970年	26.2 × 18.2	122	昭和 45 年度愛知県立芸術大学講義原稿。巻頭「この原稿はことしの春からの講義のあとをまとめながら、夏休みの7 月末から書きはじめ、やがて秋からの講義のあらましに及ぶものである。昭和四十五年夏」あとがき「七月廿五日から八月の四日まで、ほとんど毎日かゝさず筆をとって書いた。」追記「昭和四十九年三月」	—	110	155

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
63	文化類型学講義 巻二	文化類型学講義 巻ノ二	手稿	1	綴	昭和45年 8月末	1970年	26.2 × 18.2	110	目次「十 つづき エウロッパのうちなる類型とそとなる類型」ほかあとがき「やうやく月末にともかくもここまで書き進めた。八月の二十九日に、このあとがきを誌す。」追記「昭和四十九年三月」	—	110	156
64	文化類型学講義 巻三	文化類型学講義 巻ノ三	手稿	1	綴	昭和45年 9月10日	1970年	26.2 × 18.2	132	目次あり。あとがき「九月の十日に書き終へた。」追記「昭和四十九年三月」	—	110	157
65	文化類型学講義 巻四	文化類型学講義 巻四	手稿	1	綴	昭和45年 秋～暮れ	1970年	26.2 × 18.1	106	目次あり。あとがき「昭和四十五年の秋から暮れにかけて、講義の進みゆきにつれて書きつづけた。」追記「昭和四十九年三月」	—	110	158
66	文化類型学講義 巻五	文化類型学講義 巻五	手稿	1	綴	昭和46年 1月中旬～ 2月	1971年	26.2 × 18.4	106	巻頭「昭和四十六年の正月の中旬から二月にわたって書いたが…昭和四十九年三月」目次有り「附録 昭和四十七年度山手女子短期大学（神戸）講義要目…昭和五十七年夏」	—	110	159
67	江戸時代の文化 巻一	江戸時代の文化 巻ノ一 江戸時代の文化 巻一	手稿	1	綴	昭和46年 9月12日	1971年	26.4 × 18.4	180	巻頭「昭和四十六年八月末から書きはじめた。この第一巻に綴じ合はせた第九節までは、九月の十二日に成り、第二巻の第十六節までは十月の六日に書き終へた。」「愛知県立芸術大学において」の講義録。新聞切り抜き 1 枚。「京ぼりや」の用紙に描いた童子の絵が貼り付けてある。	—	110	173
68	江戸時代の文化 巻二	江戸時代の文化 巻ノ二 江戸時代の文化 巻二	手稿	1	綴	昭和46年 10月6日	1971年	26.4 × 18.6	138	—	—	110	174
69	江戸時代の文化 巻三	江戸時代の文化 巻三	手稿	1	綴	昭和46年 11月23日	1971年	26.2 × 18.4	120	巻頭「十一月の五日より書きつづき、二十三日に至る。…昭和四十六年初冬」新聞切り抜き 2 枚 メモ 1 枚	—	110	175
70	江戸時代の文化 巻四 附 日本演劇史考	江戸時代の文化 巻ノ四 江戸時代の文化 巻四	手稿	1	綴	昭和46年 ～ 昭和49年	1971年	26.2 × 18.4	112	巻頭「昭和四十六年度の長久手の芸術大学になしたる講義であるが、原稿は未完のまま終わっている。」「日本演劇史考」は昭和四十九年に書きはじめて続き続きに書き足していったものであるが、…昭和五十七年秋」 「日本演劇史考はしがき 昭和四十九年初夏」	—	110	176
71	續 江戸時代の文化 巻壹	續 江戸時代の文化 續 江戸時代の文化 巻ノ壹	手稿	1	綴	昭和47年 8月上旬	1972年 以前	26.0 × 18.6	134	巻頭「この講義は、愛知県立芸術大学において、昭和ノ四十七年の前期に四月から九月にかけて、なしたものである。…夏休みの八月の下旬、第十一章までを書き終へて、これを第一巻として綴じ合せる。昭和ノ四十七年八月三日」目次「序言 一 日本文化史における江戸時代の意味。ルネサンス。二 フマニタス。契沖を祖とする「古へ学び」。…」	—	110	102
72	續 江戸時代の文化 巻ノ貳	續 江戸時代の文化 巻ノ二 附 本居宣長の 学問（断片）	手稿	1	綴	「本居宣長」 昭和40年 以前	1965年 以前	26.0 × 18.2	132	目次「十二 古典と祭り祭られる世嗣ぎ。 十三 芭蕉における古へと今。古典の俳諧化。俳諧。「風雅」。…」、「本居宣長の学問」序「昭和の四十年、岐阜でなしたる講演…原稿の断片がここに残ってある。昭和五十年秋」学者の年表あり。	—	110	103
73	續々 江戸時代の文化 巻一	續々 江戸時代の文化 巻一	手稿	1	綴	昭和47年 9月から	1972年	25.8 × 18.2	124	巻頭「愛知県立芸術大学の昭和四十七年度の後期に講ずるものであって、この草稿は、その年の秋、9月に入ってから書きはじめた。昭和四十七年秋」巻末「十月二十五日に書き終へ、昭和四十七年秋十月末」	—	110	177
74	續々 江戸時代の文化 巻貳	續々 江戸時代の文化 巻二 續々 江戸時代の文化 巻二	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.4	102	—	—	110	178
75	續々 江戸時代の文化 巻参	續々 江戸時代の文化 巻三 續々 江戸時代の文化 巻三	手稿	1	綴	昭和47年 11月～ 12月末	1972年	26.0 × 18.4	132	巻頭「昭和四十七年、長久手の芸術大学の文化史の講義の草稿なり。その年の十一月より十二月の末にわたりて書き次ぎぬ。」	—	110	179
76	續々 江戸時代の文化 巻四	續々 江戸時代の文化 巻四	手稿	1	綴	昭和48年 正月	1973年	26.3 × 18.6	98	巻末「昭和四十八年正月に成りぬ。」年表のメモ 3 枚	—	110	180
77	續々 江戸時代の文化 巻五	續々 江戸時代の文化 巻五	手稿	1	綴	昭和48年 2月	1973年	26.1 × 18.3	90	巻頭に参考文献あり。巻末「この稿未完のままに終わる昭和四十八年二月なり」	—	110	181
78	草稿 日本人の自然観 上	日本人の自然観 上	手稿	1	綴	昭和49年 7月4日～ 19日	1974年	26.2 × 18.3	120	巻頭「ことし九月の末から十月のはじめにかけて京都で行はるべき国際学会においてなすべき講演の草稿である。…七月の四日に書きはじめ、七月の十九日にひとまず書き了へた。昭和四十九年七月十九日」	ドイツ語での講演の日本語草稿。	110	198
79	草稿 日本人の自然観 下	日本人の自然観 下	手稿	1	綴	昭和49年 7月24日	1974年	26.2 × 18.4	112	補逸「本文を摺筆ののちにも書き次ぎ、七月二十四日にも及んだ。」	—	110	199
80	京都 昭和四十九年 九月二十五日- 十月 五日 国際文化学会	—	手稿及び印刷	3	部	昭和49年 9月頃	1974年	→	→	ドイツ語講演原稿「29.september 1974」、学会日程ほか 3 種類あり 36.2×25.8 2 枚 36.4×26.0 2 枚 29.7×21.2 2 枚	—	110	208

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
81	歴史的に見た日本人の ところ	—	印刷	1	綴	昭和50年 9月29日 以前	1975年 以前	26.1 × 18.2	16	ガリ版印刷 あとがき「去る九月二九日 美濃加茂市上古井公民館において行なわれた第三回「郷土歴史を考える学級…(五〇、一〇、九)」の講演筆録。	—	110	215
82	講演 日本の伝統 附 創作目録	講演 附 創作目録	手稿及び印刷	1	綴	「創作目録」: 43 年秋、 「日本の伝統」: 昭和 50 年 9 月 29 日 (講演日)以前、 「文化と教育」: 昭和51年 11月頃	1975年 ～ 76年	26.1 × 18.0	162	巻頭「すべて美濃加茂市においてなした講演の台本である。…この外にもかずかずあるが、それらの原稿は残っていない。…「創作目録」は昭和四十三年の筆に成るもの…昭和五十七年夏」「目録 日本の伝統(五十年九月)大正時代の文化と教育(五十一年十一月) 附録 創作目録(四十三年秋) 創作目録「解題 昭和ノ十三年の春、歌誌「まるめら」に載せた「バイデウマ」をもって始める。」後半に「附けたり 脚本目録」「講演目録、戦後講演目録」あり。脚本は S22.1～S25 年に創作のもの、講演は S27.7～S42 のもの。	—	110	196
83	在原業平	—	手稿	1	綴	—	—	26.5 × 18.4	92	—	—	110	249
84	講演原稿記録	—	印刷	1	綴	—	—	25.5 × 17.8	12	本文「日本人の考え方、日本人の心というものを歴史的に見た、」	表紙題名なし。	110	278
85	神道の話	—	手稿	1	部	—	—	25.4 × 18.2	19	—	—	110	240
86	講義原稿類	—	手稿	1	袋	—	—	→	→	封筒に「ドイツ十八世紀思想史講義(未完)」とあるが、「右の原稿は中に入っていない」とある。原稿はドイツ語。訳を書いた原稿もある。11 部、上から 14 頁、13 頁、6 頁、4 頁、5 頁、11 頁、2 頁、3 頁、6 頁、2 頁、6 頁、26.2×18.3	—	110	438
87	(ドイツ語原稿) ロマンティック ノヴァーリス シュレーゲル ロマン派の社会思想 など	—	手稿	1	袋	—	—	→	→	・封筒入り(三星堂上が切れているもの) 原稿 3 部、26.0×19.0 上 から 10 頁、4 頁、6 頁、・「Friedrich Schlegel」封筒入り 原稿 11 部、26.4×18.5 上から 16 頁、8 頁、12 頁、30 頁、17 頁、18 頁、14 頁、4 頁、2 頁、4 頁、20 頁、・「ロマン派の社会思想」封筒入り 原稿 1 部、18.5×25.3、108 頁・(封 筒 入 り) 原 稿、1 部、25.6×17.9、8 頁、Herder に関するメモ 26.2×18.1、6 頁、原稿、1 部、29.6×20.9、22 頁・(封筒入り) ノヴァーリス、原 稿 1 部、26.2×18.3、3 枚、冊 子①、1 部、26.2×18.6、9 頁 冊子②、1 部、26.2×19.0、12 頁、原稿、5 部、各 26.2×19.6 上から 11 頁、13 頁、10 頁、10 頁、2 頁、	—	110	445
88	国家と個人 シーボルトの国家 活動限界論	—	手稿	1	部	—	—	17.9 × 25.2	115	—	—	110	447
89	Wilhelm von Humboldt	—	手稿	1	部	—	—	25.8 × 18.4	184	ドイツ語日本語原稿、原稿用紙 90 枚・横書き	—	110	442

分類 1、著作原稿[学術・教養]大学講義・講座等 2、歴史・民俗

90	ポツダム集 正	ポツダム集	手稿	1	冊	昭和3年～ 4年秋	1928年～ 1929年	20.9 × 16.2	166	蔵書印あり「ポツダム集のいはれ わがべりんのころよろずのでびかへを かきしるしたるものなり、…せうわととせまり ふたとせ あき」目次「やまとたてものに かゝらふことばのでびき バジリカだての 寺院建築のはしら つけたりケルンのサンタチェチリア ゲルマニア[のかみがみ] やほやおしこひのひかのこ やまとの ところな」「やまとたてものにかからふことばのでびき 昭和のみよ みとせ ベルリンのかりやにて」「やほやおしこひのひかのこ せうわよとせのあき」メモ 1 枚	—	120	374
91	續々 ポツダム集	續々ポツダム集	手稿	1	冊	昭和13年 夏から	1938年 から	20.3 × 16.0	84	巻頭「続ポツダム集 あるべきなれど御影にてやけうせていまにのこらず 昭和五六年といふとしのはつなつ」「はしがき 続ポツダム集につまきて ここに 続々ポツダム集をかきはむ。せうわととせまりみとせなつ」目次「柳田國男先生著作目録 やまとのころな つづき こどものあそび(おもちゃ)」「やま里のころなその三 ポツダム集と続ポツダム集とのつづきなり。昭和十四年はる」	—	120	375
92	増補 ポツダム集	増補ポツダム集	手稿	1	冊	昭和13年 秋半ば 以前	1938年	20.3 × 16.0	92	目次「むらざとのさまざま(つづき) やまとのころな(そのよつつ)」むらざとのさまざま「続ポツダム集の「むらざとのさまざま」のつづきなり。昭和十三年あきなかば」	—	120	376
93	御影集 一	御影集 一	手稿	1	冊	昭和14年 春以前	1939年 以前	20.1 × 16.0	64	はしがきに「ポツダム集増補」のつづきとある。「せうわととせまり よとせのはる」「ふたたびはしがき 昭和二十年夏 美濃國伊深の里正眼寺にて」目次あり・越中風俗人形のしおり・原稿用紙の切れ端・領収書・ドイツ語の雑誌の切り抜き	—	120	377
94	日本歴史の使命	—	手稿	1	綴	昭和18年 3月半ば	1943年	25.3 × 18.1	83	文末「(昭和十八年三月なかば)」	—	120	245

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
95	伊勢神道五部書注釋	伊勢神道五部書 注釋	手稿	1	綴	昭和20年代前半頃	1945年 ～ 1950年頃	25.7 × 18.0	124	巻頭「物して久しくうち捨ておきたればいつの頃成りたりとも今は知らず、ただこの伊深の里に移り住みてほどなきころのものとは見えたり。…昭和ノ三十九といふ年の秋立つ頃」目次あり。	—	120	262
96	十八世紀の歴史観	—	印刷	21	冊	昭和32年 2月	1957年	21.2 × 15.2	24	神戸商船大学紀要第一類・文科論集・第五号(昭和三十二年・一九五七年・二月) 抜刷	—	120	464
97	講演 五月の話志	五月の話し	手稿	1	綴	昭和32年 5月	1957年	25.6 × 18.0	112	巻頭「なゝくさ会の公開講演に、村の人たちにした話しを、あとで書きしるしたものである。…昭和三十二年五月末」 巻末「昭和三十二年五月十三日、伊深村のト雲寺にて、なゝくさ会に講演」	—	120	186
98	神さまと佛さまの話志	—	手稿	2	部	(封筒) 「昭和33年 正月」頃	1958年頃	各 26.4 × 18.5	→	ほぼ同題名の二稿あり。「神さまと佛さまの話志上」(後欠) 26 頁 「神さまと佛さまのお話し 日本人の信仰生活」 146 頁メモ 1 枚あり。	—	120	187
99	人間の話し	人間の話し	手稿	1	綴	表紙 「昭和35年 3月」	1960年	26.0 × 18.4	36	表紙「(ななくさ会)」とあり。	—	120	189
100	講演 女の話し 人間の話し	—	手稿	1	綴	昭和35年 4月末、 昭和35年 五月初め	1960年	26.2 × 18.5	164	目次「女の話し(昭和三十五年四月末) 人間の話し(昭和三十五年五月初め)」 「女の話し」巻頭「昭和の三十五年の四月廿八日、伊深の上切の婦人会の部落学級で話をした、その話のまゝを辿って、その翌くる日から三十日の夜にかけて書き綴ったものである。」 「人間の話し」巻頭「昭和の三十五年五月のついたちになゝくさ会でした講演を、のちに少し増補しながら書き綴ったものである。」	—	120	188
101	歴史の疑ひ	歴史の疑ひ	手稿	1	綴	「昭和35年 小正月」の頃	1960年	26.0 × 18.4	20	はしがき「今、わたくしの抱いてゐる疑ひを披歴して、或るべくさまざまな思想にふれて思ひをのべたいと思ふ。昭和三十五年小正月の朝」	—	120	170
102	講演 聖徳太子の話し	聖徳太子の話し	手稿	1	綴	昭和38年 2月頃	1963年	26.0 × 18.0	100	巻頭「伊深の下本郷の婦人会の部落学級で昭和の三十八年、二月の廿六日にした講演を、のちに、成るべくそのときの話しのまゝ書き留めたものである。…昭和三十八年二月末」	—	120	190
103	西洋と東洋 巻一	西洋と東洋 巻一	手稿	1	綴	昭和38年 6月頃	1963年頃	25.8 × 18.2	118	「この「西洋と東洋」は、巻をわかつて四巻あり。べつに「續篇断片」の一卷あり。」「昭和三十八年の深江における講義である。昭和三十八年六月」ドイツ語のメモ 1 枚。	—	120	122
104	西洋と東洋 巻二	西洋と東洋 巻二	手稿	1	綴	—	—	25.8 × 18.2	196	内題「昭和三十八年講義」 メモ 1 枚 はがき 1 通 白紙 1 枚	—	120	123
105	西洋と東洋 巻三	西洋と東洋 巻ノ三	手稿	1	綴	—	—	26.6 × 18.4	166	内題「昭和三十八年講義」 メモ 1 枚	—	120	124
106	西洋と東洋 巻四	西洋と東洋 巻ノ四	手稿	1	綴	昭和39年 2月節分	1964年	26.2 × 18.2	150	内題「昭和三十八年講義」本文末「(昭和三十九年二月節分稿)」巻末に「西洋と東洋 總目次」あり。後記「講義の進みとともに書きつづけたこの輪を昭和三十九年二月十九日」「附記 昭和四十一年正月」「再び附記する… 昭和四十九年正月」	新聞切り抜き 6枚 メモ3枚	120	125
107	西洋と東洋 續篇断片	西洋と東洋 續篇断片	手稿	1	綴	昭和39年頃	1964年頃	26.3 × 18.2	162	序「昭和三十九年講義の草稿である。昭和四十一年正月」上巻は、未完・後欠、下巻は第二十章から第二十八章まで。あとがき、附記あり。	—	120	126
108	馬の話 馬娘婚姻 河童駒引	馬の話	手稿	1	綴	昭和41年 2月頃	1966年	25.6 × 18.0	114	巻頭「上ノ巻は、上切の婦人会に頼まれて、この年の二月十八日に講じき。下ノ巻は、その二十日、下本郷の婦人会に講師にゆきて語りき。昭和四十一年二月二十二日」目次あり。	別表紙「馬の話 昭和41上切下本郷 婦人会 虎の話 昭和49伊深婦人会」 姉妹編となるべき」とあり。	120	194
109	米と麥	米と麥	手稿	1	綴	昭和41年 4月半ば	1966年	26.0 × 19.0	132	巻頭「未完のまま終わっている。今はそのまま綴じ合はせる。昭和五十四年春」「昭和四十一年の春の彼岸の入り、三月十八日の夜、ななくさ会で行った通俗の講演の台本として、書き始めたが、…講演までには書き果たすことができなかった。…久しく筆を進める暇がなく、ついに四月のなかばにいたった。」	巻末に「山路の 菊 序」と題した 原稿あり。文末に「昭和二十 六年 立秋」	120	191
110	西洋世界 巻一 西洋世界の成立と ギリシャ文化	西洋世界 巻一 西洋世界の成立 とギリシャ文化	手稿	1	綴	昭和41年頃	1966年頃	26.3 × 18.2	132	巻頭「昭和ノ四十一年の五月から四十二年の二月に渡る文化史の講義の草稿である。…愛知県立芸術大学の創設初年度において、その美術学部および音楽学部の学生になしたものである。 昭和四十一年秋」	目次あり。	120	149
111	西洋世界 巻二 ギリシャ文化と その形成作用	西洋世界 巻二 ギリシャ文化と その形成作用	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.2	118	目次「十 ギリシャ文化の特質 その四 ポリス 十一 ギリシャ文化の特質 その五 イデア…」	—	120	150
112	西洋世界 巻三 傳統としての キリスト教と 古典としての ギリシャ文化	西洋世界 巻三 傳統としての キリスト教と 古典としての ギリシャ文化	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.4	114	目次「十八 傳統としてのキリスト教と啓蒙思想 十九 人類の社會形成史」ほか はがき1通 金石文書籍案内しおり1枚 和紙1枚	—	110 120	151

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
113	西洋世界 巻四 西洋中心の 世界史観	西洋世界 巻四 西洋中心の 世界史観	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.4	128	目次「二十九 西洋中心の世界史観の例 その一農耕文化の起原 三十 西洋中心の世界史観の例 その二鉄の文化の系統…」ほか	—	120	104
114	西洋世界 巻五 西洋世界の自然と 自然観	西洋世界 巻五 西洋世界の自然 と自然観	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.4	104	目次「三十八 西洋世界の自然観とその風土 三十九 キリスト教の自然観…」ほか	—	120	105
115	西洋世界 巻六 ゲルマン文化と 近代の問題	西洋世界 巻六 ゲルマン文化と 近代の問題 西 洋世界 巻六	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.2	78	序「この巻ノ六をもって終わる。」目次「四十四 ゲルマン文化の特質 ゴシックとバロック…」	—	120	106
116	熊野三山の話 上	熊野三山の話 上	手稿	1	綴	(表紙) 昭和42年	1967年	26.3 × 18.4	102	目次あり。序説文末「(ななくさ会)の講演のためまとめてみた「熊野三山の話」である。…熊野詣での、わが記録であった。」	京都 直指庵の しおりあり。	120	192
117	熊野三山乃話 下	熊野三山の話 下	手稿	1	綴	昭和42年 8月4日	1967年	26.4 × 18.4	96	巻末「伊深村の「ななくさ会」の七月の例会で、ひと夜話をしたのが事のはじめであった。…書きついで、つひに八月のはじめになった。昭和四十二年八月四日」	—	120	193
118	世界史の構想	世界史の構想	手稿	1	綴	昭和43年 ～ 昭和44年	1968年 ～ 1969年	26.4 × 18.3	130	巻頭「昭和の四十三年春から翌くる四十四年のはじめに涉って、愛知県立芸術大学における「文化史」の講義で口述した。…昭和四十四年二月一日」目次あり	—	120	433
119	Schlegel	—	手稿	1	袋	昭和44年 以前	1969年 以前	→	→	封筒「昭和四十四年講義」4 部、上から 22 頁、60 頁、10 頁、117 頁、26.2×18.0 メモ 1 枚	—	120	437
120	虎の話	虎のはなし	手稿	1	綴	昭和49年 2月24日	1974年	26.2 × 18.2	86	巻頭「昭和の四十九年の春二月三日の節分の日に、伊深の関也の婦人会でする心組みで腹案をつくったが、その講演にはスライドの幻灯を見せてほしいとの希望があったので、虎の話はほんの少しばかりをして、年中行事を寫した幻灯を見せた。…そののちひまひまに書きつゝり、二月の二十四日に脱稿した。これは先年の「馬の話」の姉妹編になるべき…昭和四十九年二月末」補注あり メモ 1 枚	—	120	195
121	Kant・Schiller・ほか	—	手稿	1	袋	—	—	→	→	封筒「ドイツ語メモ・日本文・ドイツ文・イタリア紀行」メモ 2 枚あり (Kant)13 頁、(Schiller)11 頁、(ドイツ語訳原稿) 44 頁、(Italie)4 頁 各 26.4×18.0	—	120	435
122	九月二十九日 上古井公民館にて 講演	—	印刷	3	点	—	—	→	→	「清水の湧き出るところ」25.0×36.2 1 枚 5 部 複写「美濃民俗第 117 号 昭和 52.2.15」25.7×18.2 10 頁 4 部 寄稿「産育民俗」「歴史的に見た日本人のころ」26.1×18.2 16 頁 1 綴 (九月二十九日)	「歴史的に見た 日本人のころ」 文末「(五〇、一〇、 九)」と講演録作成 年月日あり	120	237
123	文鏡祕府論 三教指歸	—	手稿	1	綴	—	—	25.2 × 18.1	30	弘法大師全集の写し	—	120	321
124	明治初年以来小學 教育制度史覚書 附 小学校唱歌 教育年表	明治初年以来 小學校教育制度史 ・明治初年以来 小學校教育制度 史覚書	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.6	92	「参考文献 藤原喜代明治大正昭和 교육思想學說人物史 三卷 井上久雄 學制論考 玉川出版部 日本教育百年史…」 文頭「いま、伊深小学校にかゝるべき事どもを抜きがきす。」	—	120	55
125	ドイツ思想史	Friedrich Schillerの 歴史哲学草稿171 (清書400字詰 81枚)	手稿	1	部	—	—	27.4 × 22.4	174	日本語原稿	—	120	444
126	民俗学と歴史観	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.4	14	—	—	120	169

分類 1、著作原稿〔学術・教養〕大学講義・講座等 3、文学・古典 ※各々巻数が多いため、巻数順や名称・内容のまとまりを優先して並べ、かつその中で作成年学日順に並べた

127	ぎりしゃ古とば 能まなび 一	ぎりしゃことばの まなび その ひとつ	手稿	1	冊	昭和12年 夏	1937年	19.9 × 16.0	118	内題「せうわとあまりふたとせ なつ」表紙裏「昭和十六年春製本 浅草仲見世川崎屋千代紙」巻頭「はしがき(およびおくがきをかねて)(せうわとあまりふたとせはつきなかばしるしをはる)」目次あり	—	130	368
128	ぎりしゃ古とば 能まなび 二	ぎりしゃことばの まなび その ふたつ	手稿	1	冊	—	—	19.7 × 16.0	74	目次あり。蔵書印	—	130	369
129	ぎりしゃ古とば 能まなび 三	ぎりしゃことばの まなび その みつつ	手稿	1	冊	—	—	19.9 × 16.0	104	目次あり。蔵書印	—	130	370
130	言葉の學び 一	—	手稿	1	綴	昭和14年	1939年	26.0 × 18.0	174	初頁「昭和 15 年秋製本 大阪もみぢや千代紙」巻頭「「ロゴスの文化」といふかきものは昭和のととせまり みとせといふ としの しもつきの なかばよりかきははじめ、そのあくるとしのきさらぎの はじめにひとまつかきをへたり。…かうべの 大学における 社会学の講義の台本なり。…言葉について (ことに数語法について) といふものを、ととせまりよとせといふとしのむつきのすゑにきぬ。…せうわ とあまりいつとせ といふ としの なつの はじめ」	—	130	268

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
131	日本物語集 序説	—	手稿	1	綴 (戦前 終戦間際)	—	—	26.0 × 18.2	86	巻頭「ドイツ出版社から日本の物語集の翻譯をたのまれて時代ごとに二篇づつを択びその翻譯を妻とともにしたとき、その序説にとて書いたものである。…しかし遂に出版には至らずして止んだ。…今はこの未完のままの序説を未完のままに手を加へずここに保存する。昭和五十四年夏」末頁「未完」	—	130	214
132	國文撰集 卷一	國文撰集 卷一	手稿	1	冊	昭和22年 2月頃	1947年 頃	21.0 × 14.8	84	「はしがき 古今雑俗をとばす近きは明治大正のみ代のものにも及べり 昭和二十二年二月」	—	130	317
133	國文撰集 卷二	國文撰集 卷二	手稿	1	冊	—	—	20.4 × 14.6	76	—	—	130	318
134	國文撰集 卷三	國文撰集 卷三	手稿	1	冊	—	—	20.4 × 14.6	76	—	—	130	319
135	萬葉集 道草	萬葉集道草	手稿	1	綴	昭和24年 5月18日～ 58年	1949年～ 1983年	26.2 × 18.7	122	目次「万葉集道草（昭和五十八年） 岩観音（昭和五十九年正月） あちさゐ（昭和58年秋） 木曾川と長良川（昭和五十八年秋） 文化史の講義（昭和四十五年五月） 花ふだ（昭和二十四年六月十一日）、藤の花（昭和二十四年五月十八日）」	「文化史の講義」 は、はしがきのみ	130	258
136	ゲテ前後関係の ドイツ語のメモ	—	手稿	2	枚	昭和24年 頃	1949年 頃	26.1 × 18.2	2	表紙「ゲテ前後昭和24年印刷の中にあった書類」	—	190	474
137	譯詩集 ときは木	譯詩集 ときは木	手稿	1	綴	昭和25年 秋	1950年	25.0 × 18.0	128	はしがき「をりにふれてうつしたエウロッパの詩歌をあつめてあんだものである。昭和の二十五年といふとのしあき」	—	130	133
138	奈から能者し 上	奈から能者し 上	手稿	1	綴	昭和26年	1951年	25.3 × 17.9	110	いろいろの撰集を講じるとき、書きとどめおいたものを集めたもの。巻頭「昭和の二十六年という年の冬のはじめ□□」	受入番号378 「長柄のはし巻一」と内容が若干似ている。	130	422
139	ふるさと 四月号 (三周年号)	—	印刷	1	綴	昭和27年 4月29日 以前	1952年 以前	24.4 × 16.7	12	表紙「昭和二十七年四月二十九日発行第四卷第二号通巻第二四号」寄稿「特別詠草 春十首」	岐阜県羽島の 小誌、ふるさと 歌道會 編輯兼 発行人 大橋武	130	86
140	ふるさと 五月号	—	印刷	1	綴	昭和27年 5月25日 以前	1952年 以前	24.4 × 16.7	12	表紙「昭和二十七年五月二十五日発行第四卷第三号通巻第二五号」寄稿「特別詠草 夏十首」	岐阜県羽島の 小誌、ふるさと 歌道會 編輯兼 発行人 大橋武	130	85
141	日本文学の話し	日本文学能話し	手稿	1	綴	昭和28年 春	1953年	25.7 × 18.2	158	巻頭「これは昭和の二十八年というとしの春から、伊深村の青年学級でした講義の台本である。未完であるが、残っているので綴じて存しておく。昭和三十五年春」	—	130	229
142	謠曲詞章講義	—	手稿	1	綴	昭和28年 6月26日	1953年	25.6 × 18.5	120	序あり。文末「(昭和二十八年六月二十六日 稿)」	—	130	218
143	その二 井筒	—	手稿	1	綴	昭和28年 7月11日	1953年	25.9 × 18.3	82	巻末「(昭和二十八年七月十一日稿)」謠の注釈	はがき1 メモ紙1	130	408
144	蟬丸	蟬丸・蟬丸	手稿	1	綴	昭和28年 9月8日	1953年	25.3 × 18.0	82	本文末「(昭和廿八年九月八日)」追加、「補注」あり。謠の注釈	紙一枚あり	130	411
145	その四 清経	清経・清経	手稿	1	綴	昭和28年 10月	1953年	25.4 × 18.0	88	本文末「(昭和廿八年十月)」謠の注釈	封書2通 はがき1枚	130	405
146	その五 葵ノ上	葵上・葵の上	手稿	1	綴	昭和28年 12月末	1953年	25.3 × 18.5	74	文末「(昭和廿八年十二月末)」補遺あり。謠の注釈	—	130	414
147	その六 三輪	三輪・三輪	手稿	1	綴	昭和29年 1月	1954年	25.3 × 18.1	76	文中「(昭和三十六年秋)」の訂正文あり。巻末「昭和廿九年一月」謠の注釈	—	130	412
148	その七 小塩	小塩・を志ほ	手稿	1	綴	昭和29年 2月 はじめ	1954年	25.2 × 18.4	88	巻末「(昭和二十九年二月はじめ)」謠の注釈	—	130	420
149	その八 東北	その八 東北	手稿	1	綴	昭和29年 3月	1954年	25.2 × 18.3	74	巻末「(昭和二十九年三月)」謠の注釈	封書1通	130	406
150	その九 熊野	—	手稿	1	部	昭和29年 3月	1954年	27.1 × 18.9	74	巻末「(昭和二十九年三月)」謠の注釈	—	130	407
151	その十 杜若	その十 杜若	手稿及び印刷	2	綴	昭和29年	1954年	26.8 × 18.7	90	文末「(昭和二十九三月末)」	杜若 1綴 23.7×17.4 34頁(活字印刷)	130	403

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
152	その十一 賀茂	—	手稿	1	綴	昭和29年 6月23日	1954年	26.0 × 18.5	74	巻末「(昭和廿九年六月二十三日稿)」謡の注釈	—	130	423
153	その十二 鶺鴒	—	手稿	1	綴	昭和29年 7月11日	1954年	25.8 × 18.5	48	巻末「(昭和廿九年七月十一日稿)」謡の注釈	—	130	417
154	野ノ宮	—	手稿	1	綴	昭和29年 9月上旬	1954年	25.4 × 18.2	40	巻末「(昭和廿九年九月上旬)」謡の注釈	—	130	418
155	江口	—	手稿	1	綴	昭和29年 9月末	1954年	25.6 × 18.4	56	巻末「(昭和二十九年九月末稿)」謡の注釈	—	130	410
156	定家	—	手稿	1	綴	昭和29年 11月11日	1954年	25.5 × 18.5	52	巻末「(昭和二十九年十一月十一日)」謡の注釈	—	130	413
157	松風	—	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.4	30	謡の注釈	—	130	409
158	鉢の木	—	手稿	1	綴	—	—	25.3 × 18.4	38	謡の注釈	—	130	419
159	源氏供養	—	手稿	1	綴	—	—	25.2 × 18.5	56	謡の注釈	—	130	415
160	和泉式部日記注釈 たまくらのそで 一	和泉式部日記 評釋 上・和泉 式部日記 注釋 たまくらのそで	手稿	1	綴	昭和29年	1954年	25.9 × 16.9	144	巻頭「昭和の二十九年といふとし、伊深にてひとに講じけるときの原稿なり。本文は玉井幸助の和泉式部日記新注昭和廿五年によれり。」	—	130	341
161	和泉式部日記注釈 たまくらのそで 二	和泉式部日記 注釋 たまくら のそで 二	手稿	1	綴	昭和29年	1954年	25.8 × 18.0	158	—	作成年は、四巻 巻末の記述をも とにしている。	130	342
160	和泉式部日記注釈 たまくらのそで 三	和泉式部日記 注釈 たまくら の袖 三	手稿	1	綴	昭和29年	1954年	25.7 × 18.3	150	—	作成年は、四巻 巻末の記述をも とにしている。	130	343
161	和泉式部日記 手枕の袖 四	和泉式部日記 注釈 多ま久良 のそ手	手稿	1	綴	昭和29年 5月16日～ 10月20	1954年	25.6 × 18.3	122	巻末「昭和ノ廿九年、人に講じつゝ、五月ノ十六日より書きはじめて、十月ノ二十日に書き了りぬ。」	—	130	344
162	建礼門院右京大夫集 評釈 上	建禮門院右京 大夫集評釋上	手稿	1	綴	昭和29年 春以前	1954年	25.2 × 18.2	98	序「このとしの春まだきに、伊深にて人に講じけることありき。その折書きとどめたる、これはその講本なり。…今、製本して二冊上中二冊 なし、散佚をふせぐ 昭和二十九年夏」白紙 1 枚、模様入りの紙 2 枚	—	130	127
163	建禮門院右京大夫集 評釈 中	建禮門院右京 大夫集評釈中・ 建禮門院右京 大夫集評釋 中	手稿	1	綴	昭和29年 以前	1954年	25.2 × 18.4	110	巻末「以上、昭和二十九年二月講じ了んぬ」	—	130	128
164	可きと免久 左 式	可きと免草 式	手稿	1	冊	昭和29年 頃	1954年 頃	21.2 × 14.9	118	巻頭「昭和二十九年ごろのものなるべし」地名辞典、仏教大辞典からの抜書きメモ入り	—	130	354
165	新古今の述懐の歌	—	手稿	1	部	封筒 「昭和 20 年 代中頃か」	1945年 頃	17.6 × 24.7	27	—	—	130	244
166	弱法師	—	手稿	1	綴	昭和30年 2月16日	1955年	25.7 × 18.5	48	文末「(昭和三十年二月十六日)」謡の注釈「附けたり 天王寺の石の鳥居の事」	—	130	416
167	夕顔の巻 講義 東雲の道 その一	夕顔の巻 東雲の道	手稿	1	綴	—	—	25.7 × 18.2	164	—	—	130	119
168	夕顔の巻 講義 東雲の道 その二	—	手稿	1	綴	—	—	25.4 × 18.2	134	チラシ 1 枚「市民の劇場 松竹 大歌舞伎 岐阜市民会館大ホール」	—	130	120
169	源氏物語 夕顔の巻 その三	夕顔の巻 その三	手稿	1	綴	昭和30年 5月21日	1955年	25.6 × 18.0	128	あとがき「昭和二十九年というふとしの明治節の頃よりひきつづきてなしたる講義のため、かつかつ書きつづりたる注釈なり。昭和の三十年なる五月二十一日に書き了へぬ。昭和三十年五月廿一日」	もみじ、野菊の 楽譜の複写あり	130	121
170	源氏物語 若紫 ゆかり能草 上	—	手稿	1	綴	昭和30年 12月	1955年	25.8 × 18.0	180	「昭和三十年といふ年の夏より冬にかけて、伊深のわが家にて人に講じける折に書き集めたる注釈なり、その講義ハその年の十二月の十日に終わりぬ。」	—	130	115

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
171	源氏物語 若紫 ゆかり能くさ 中	源氏物語 若紫ゆかりの草 中	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.2	142	—	—	130	116
172	若紫 下	—	手稿	1	綴	—	—	26.1 × 18.0	122	—	—	130	117
173	若紫 索引	—	手稿	1	綴	—	—	25.8 × 18.2	12	—	—	130	118
174	日本の古典	日本の古典	手稿	1	綴	昭和31年 7月	1956年	26.0 × 18.2	156	巻頭「昭和ノ三十一年の七月に書いた。…昭和三十四年」 「神戸の山手女子学園」と「深江の神戸商船大学」で講じた。目次あり。	—	130	167
175	可きと免久`左 一ノ上	かきと免ぐ左 巻 壹ノ上	手稿	1	冊	昭和31年 頃	1956年 頃	21.2 × 15.0	90	巻頭「昭和の三十一年ごろのものなり」	—	130	352
176	源氏物語講義 卷式	源氏物語講義 卷式	手稿	1	綴	昭和31年	1956年	26.4 × 18.2	136	「帚木ノ巻講義（未完） 末摘花（續源氏物語のすぢだて、未完）昭和三十一年 紅葉の賀講義（未完） 昭和三十一年」	—	130	113
177	源氏物語能すぢ立て 上巻ノ一	源氏物語能すぢ 立て（上巻ノ一）	手稿	1	綴	昭和32年	1957年	25.8 × 18.0	148	文末「この巻よりほかの巻ハなし。昭和三十二年に成りたるものと覺し」メモ1枚（夏はきぬの歌詞） 空封筒1	—	130	114
178	宇津保物語考 一	宇津保物語考 巻々のすぢたて	手稿	1	綴	昭和32年 夏	1957年	25.7 × 17.9	172	巻頭「宇津保物語考は、一〜五までは昭和三十三年の夏休みにものしたり。「みやびの文化」を書くに及びて、この五つ巻を綴ぢあはす。」目次「俊蔭ノ巻 藤原の君ノ巻 忠こそノ巻 嵯峨ノ院ノ巻」	—	130	324
179	宇津保物語考 二	—	手稿	1	綴	昭和32年 夏	1957年	26.0 × 18.2	130	目次「梅の花笠ノ巻 吹上ノ上ノ巻 祭の使ノ巻 吹上ノ下ノ巻」	作成年は、一卷 巻頭に記述あり。	130	325
180	宇津保物語考 三	宇津保物語考 三	手稿	1	綴	昭和32年 夏	1957年	26.0 × 18.2	92	目次「菊の宴ノ巻」	作成年は、一卷 巻頭に記述あり。	130	326
181	宇津保物語考 四	宇津保物語考 四	手稿	1	綴	昭和32年 夏	1957年	26.2 × 18.2	126	目次「あて宮ノ巻 初秋ノ巻 田鶴の村鳥ノ巻」	作成年は、一卷 巻頭に記述あり。	130	327
182	宇津保物語考 五	宇津保物語考 五 巻々のすぢ立て	手稿	1	綴	昭和32年 夏	1957年	26.2 × 18.2	110	目次「蔵開きノ上ノ巻 蔵開きノ中ノ巻」	作成年は、一卷 巻頭に記述あり。	130	328
183	世つき物語 考 續篇	—	手稿	1	綴	昭和33年 7月11日	1958年	26.2 × 18.6	18	巻末「以上、昭三三、七、一一、記」	—	130	335
184	源氏物語講義 卷壹	源氏物語講義 卷壹	手稿	1	綴	昭和33年	1958年	26.1 × 18.2	98	巻頭「桐壺ノ巻の講義（未完） 昭和三十三年の作にして未完のままな里…原稿の散佚せむをことをおそれてここに綴ぢ合はすなり 昭和五十六年 春」「桐壺ノ巻講義」序「昭和三十三年の五月から三十四年に渡って、はじめて講義をした。これはその講義の進むにつれて書いたものである。」「源氏物語の注釈の事」の目次記載あり、各々昭和三十年五月〜昭和三十三年の年月記載あり。	—	130	112
185	GOETHE詩抄	—	印刷	7	部	昭和34年 12月19日	1959年	26.4 × 18.2	54	印刷原稿、7部巻頭「19.Dezenber 1963」	—	130	404
186	天稚御子の事	天稚御子の事 宇津保物語考 拾遺	手稿	1	綴	昭和35年 5月7日 以前	1960年 以前	25.9 × 18.2	56	巻頭「昭和の三十四年から三十五年にかけて神戸の山手女子学園で宇津保ノ物語の俊蔭ノ巻を講じたとき、さきものにした宇津保物語考の拾遺として書いた草稿である。…天の稚御子のことを注釈…これによって、三十四年の暮れに深江の商船大学の紀要のための永遠の帰郷といふ論文を書いた。昭和三十五年五月七日」	—	130	329
187	神戸での講演	—	手稿	2	袋	昭和35年〜 36年	1960年〜 1961年	→	→	神戸での講演原稿、ドイツ語。封筒「1960-611kobe」 ・封筒1、26.4×18.6、112頁 ・封筒2、5部、上から24枚、6枚、18枚、20枚、19枚、26.4×19.0	—	130	443
188	かき登免久`左 一ノ下	かきとめぐ左 巻 壹ノ下	手稿	1	冊	昭和36年 頃	1961年 頃	21.0 × 15.0	134	目録「雑談集抄出中ツ天皇万葉、続日本記、大安寺資材帖 皇后摂政、皇太后 書記、古事記」「昭和の三十六年ごろのものなり」新聞の切り抜き（5点）あり ドイツ語の記事切り抜き（2点）あり 1933 きさらぎついたちの一句あり	—	130	353
189	みくにがらの古典 上	みくにがらの古典 上	手稿	1	綴	昭和37年 2月以前	1962年	25.7 × 18.4	122	巻頭「先つ年ものした「日本の古典」において、第五の古典として挙げたみくにがらの古典をあらためて詳しく説いたものである。…これは三十六年の暮れからことし三十七年の春にかけて書きつゝけた。昭和三十三年二月」目次あり。	神戸山手女子 学園講義	130	261

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
190	みくにがらの古典 下	みくにがらの 古典 下	手稿	1	綴	昭和37年 2月20日	1962年	25.7 × 18.4	106	巻末「(昭和三十七年二月二十日稿了)」 三浦知直からの手紙 (39.4.5 消印) あり。	—	130	260
191	みくにがらの古典 續篇古代皇后考 神功皇后傳 中臣 鎌子ノ事	みくにがらの古典 續篇	手稿	1	綴	昭和37年 3月2日	1962年	25.7 × 18.2	200	巻頭「昭和三十七年春」 目次あり 文末「(昭和三十七年三月二日稿成ル)」	—	130	266
192	昔話の類型 上	昔話の類型 上	手稿	1	綴	昭和37年 秋～ 38年春先	1962年 ～ 1963年	25.9 × 18.2	110	巻頭「この「昔話の類型」上中下三巻の草稿は、ほとんど加筆することなくして、昭和三十九年十二月刊行の「永遠の回帰」に収録したり」「昭和三十七年の秋から翌くる三十八年の春さきにかけて、神戸の山手女学園で講じた…原稿は講義を進めながらおひおひ書いた。昭和三十八年」はがき1枚	—	130	182
193	昔話の類型 中	昔話の類型 中	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.0	80	—	—	130	183
194	昔話の類型 下	昔話の類型 下	手稿	1	綴	昭和38年 秋	1963年	25.7 × 18.2	60	巻末「後記 (補遺は) のちのいとまにゆづり今はこのまま巻をとちる。昭和三十八年秋」	—	130	184
195	可きと免久 [※] 左 参	書きと免久 [※] 左 参	手稿	1	冊	昭和41年 頃	1966年 頃	21.0 × 14.9	170	内題「昭和四十六年秋」巻頭「長久手の芸術大学の教師なりしころかきはじめしものな里」正倉院文書筆の抜書き印刷入り	愛知県立芸術大学 就任は昭和41 (1966) 年	130	355
196	青い花 注釋 上	青い花 注釋 巻ノ上	手稿	1	綴	昭和44年 7月末～ 8月	1969年	26.2 × 18.2	150	巻頭「このロマン派の講義は、かつて神戸大学で行ったことがあるが、このたびはやや趣きをかへて、愛知県の芸術大学で美術学部と音楽学部と共通の講義として、昭和の四十四年に行ふものである。…この注釈も夏休みのあひだ、七月の末から八月にかけて書きつづけた。昭和四十四年秋」目次あり。	—	130	152
197	青い花 注釋 下 附 信と愛解説	青い花 注釋 巻ノ下 附「信と愛」 解説	手稿	1	綴	昭和44年 ～ 45年春	1969年 ～ 1970年	26.2 × 18.2	174	巻頭「この「青い花」の注釈は上ノ巻として綴じたものの続きであるが、第九章までで未結のままである。」 「「信の愛」の解説は、昭和四十四年度の愛知県立芸術大学において「文化史」の講義で…四十四年の暮れから四十五年の春にかけて物したものの…昭和四十五年一月」ドイツ語メモ2枚	—	130	153
198	萬葉集 卷壹	万葉集 卷一・ 萬葉集 卷壹	手稿	1	綴	昭和57年～ 昭和59年	1982年～ 1984年	26.4 × 18.5	108	巻頭「昭和の五七年に書いたものを五十八年に書き改めたものである。次ぎ次ぎに書きつづけて昭和の五十九年の春に至り六冊に及んだ。昭和五十九年春」メモ1枚	—	130	251
199	萬葉集 卷弐 卷参	—	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.7	154	—	—	130	252
200	萬葉集 卷四 及至卷七	萬葉集 卷四より卷七 にいたる。	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.4	116	—	—	130	253
201	萬葉集 卷八 及至卷十二	万葉集 卷四、 卷八、卷九、卷拾、 卷十一、卷十二・ 萬葉集 卷八乃至 卷拾貳	手稿	1	綴	—	—	26.4 × 18.7	130	—	—	130	254
202	萬葉集 卷十三 及至卷十六	萬葉集 卷十三、 卷十四、卷拾五、 卷十六・萬葉集 卷拾参及至卷拾六	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.5	106	—	—	130	255
203	萬葉集 卷十七 至卷廿	万葉集 卷十七、 卷十八、卷十九、 卷二十・萬葉集卷 十七乃至卷拾貳	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.4	84	—	—	130	256
204	万葉集 註	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 36.2	60	—	—	130	257
205	萬葉集 言葉の学び	万葉集 言葉の 学び・万葉集 言葉学び 甲乙 二類識別表・言 葉と詩歌萬葉 集序説	手稿及び 印刷	1	綴	昭和58年 夏七月以前	1983年	26.3 × 18.7	118	巻頭「昭和五十八年に美濃加茂市の中央公民館でひらかれた文化講座のうち、万葉集の講座で講義した時の原稿である。…昭和五十八年夏七月」	—	130	259
206	国語問題と 「まるめら」	—	印刷	1	部	昭和59年	1984年	21.1 × 14.8	6	複写『大熊信行研究』第6号 1984.9.20「連載 回想の大隈信行 6」に寄稿 文末「(一九八一・一〇・二四・美濃加茂市)」	—	130	451

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
207	万葉集関係	—	手稿及び印刷	7	点	—	—	→	→	・「言葉と詩歌 萬葉集序説」、26.2×18.4、14 頁、1 綴、巻頭「美濃加茂市民大学講座…第一回講義の内容をまとめたもの」・「萬葉集」 巻一卷式本文、26.4×18.4、4 頁(表紙のみ本文なし)、1 綴・「万葉集」 巻八ー巻二十、26.4×18.4、58 頁、1 綴・「萬葉集」、26.4×18.4、52 頁、1 綴・無題 1、26.4×18.3、20 頁、1 綴、「みる みゆ」・無題 2、26.6×18.4、58 頁、1 綴、銘文など・無題 3、26.2×18.4、58 頁、1 綴、「柿本朝臣人麻呂」	—	130	320
208	ゲーテ抒情詩 注釈一	—	手稿	1	冊	—	—	23.8 × 20.0	150	目次あり ドイツ語メモ 9 枚あり	—	130	366
209	ゲーテ抒情詩 注釈二	—	手稿	1	冊	—	—	24.4 × 19.0	84	目次あり メモ 2 枚あり	—	130	367
210	原稿類 (ゲーテ関係)	—	手稿及び印刷	7	点	—	—	→	→	ドイツ語の原稿。・封筒 1 ゲーテ関係、3 部、上から 20 頁、14 頁、32 頁、26.2×18.2・封筒 2 ゲーテ関係、5 部、上から 32 頁、18 頁、14 頁、60 頁、10 頁、26.2×18.0・封筒 3 ゲーテ関係、1 部、25 頁、26.2×18.4・ゲーテに関するメモ、4 部、上から 6 頁、24 頁、14 頁、12 頁、26.5×18.1・goethe's gedichte、1 部、40 頁、26.2×18.4・封筒 4、1 部、58 頁、26.3×18.7・封筒 5、1 部、92 頁、26.2×18.6 共済組合の文書 2 ドイツ語活字メモ 5 枚	—	130	439
211	ゲーテ略伝 (関係資料)	—	手稿及び印刷	6	点	—	—	→	→	「ゲーテ略傳」66 頁、その他ドイツ語原稿上から 32 頁、8 頁、24 頁、5 頁、26.2×19.0	『ゲーテ傳(二)』、14.9×10.5、396 頁、ハイネマン：著(岩波文庫)を含む。	130	440
212	原稿類(ゲーテ関係) ほか	—	手稿	1	袋	—	—	→	→	「続ゲーテ前後 清書・下書」 「凡例、目次、はしがき」1 綴、25.6×18.0、58 頁 「序説、第一節、第二節、第三節」1 綴、25.6×18.0、106 頁 「序説、第四節、第五節」1 綴、25.6×18.0、114 頁 「序説、第六節」1 綴、25.6×18.0、26 頁 「序説、第七節」1 綴、25.6×18.0、70 頁 「序説、第八節」1 綴、25.6×18.0、94 頁 ・原稿、1 部、18.1×25.6、12 頁・「續ゲーテ前後 清書原稿 目次 序説 はしがき」1 部 25.0×18.0 頁 ・コストゥス・メヨーザに関する帳面 3 点 ・メモ帳 1、1 冊、20.9×14.8、64 頁 ドイツ語原稿 ・メモ帳 2、1 冊、21.2×15.0、96 頁 ドイツ語原稿 ・國漢帳、1 冊、20.4×14.4、40 頁 ドイツ語原稿 ・ユストゥス・メヨーザー、1 部、25.0×18.9、44 頁 ・ユストゥス・メヨーザーの下書きの断片、1 部、25.6×17.9、70 頁	—	130	441
213	琴歌譜 一卷	琴歌譜	手稿	1	冊	—	—	21.0 × 15.2	60	—	—	130	373
214	長柄のはし 巻一	ながら能はし 巻一	手稿	1	冊	—	—	20.4 × 14.6	40	目次あり	受入番号422 「長柄のはし 巻一」と内容が 若干似ている	130	378
215	奈賀良能波志 巻式	奈賀良能波志 巻式	手稿	1	冊	—	—	20.4 × 14.6	40	目次あり	—	130	379
216	歌合抄	—	手稿	1	綴	—	—	25.3 × 18.1	62	「新校群書類従」からの写し。後半「歌合判詞集」	—	130	322
217	寫本 新撰 萬葉集	菅原道真 新撰 萬葉集	手稿	1	綴	—	—	25.3 × 18.3	70	「新校群書類従」からの写し。	—	130	323
218	更級日記考	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.2	26	「新校群書類従」からの写し。	—	130	333
219	世継物語考	よ津きも乃 可多里考	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.5	90	目次あり。「新校群書類従」からの写し及び注釈。	—	130	334
220	無名草子 (覚書)	—	手稿	1	綴	—	—	25.4 × 18.2	22	—	—	130	336
221	平康頼 寶物集	—	手稿	1	綴	—	—	26.8 × 18.2	44	巻頭「群書類聚、統参拾式ノ下(巻九百五十二)」	—	130	337
222	古来風体抄	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.6	72	巻頭「藤原俊成の「古来風體抄」岩波文庫「中世歌論集」	—	130	338

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
223	義経記 考	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.6	20	目次あり。「一名、判官物語、牛若物語 日本古典全集本、(寛文版本を原本とす)」	—	130	339
224	国文学史講義 巻ノ一 (未完)	—	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.1	104	—	—	130	197
225	万葉集 (富加文学講座 講義台本)	—	手稿及び印刷	1	綴	—	—	26.2 × 18.4	64	—	—	130	210
226	百人一首解	—	手稿	1	綴	—	—	26.1 × 18.3	26	—	—	130	211

分類 1、著作原稿〔学術・教養〕大学講義・講座等 9、全般・その他

227	ラジオ放送 街に拾ふ	—	手稿	1	部	(昭和19年) 7月12日	1944年	33.0 × 21.0	35	文頭「昭和十九年七月十三日ひるすぎラヂオ放送 (大阪)」 文末「七月十二日稿」	用紙裏は「鉢か つき姫 (四幕)」 の台本原稿	190	233
228	OAG講演原稿	—	手稿	1	綴	昭和36年	1961年	27.0 × 18.4	87	封筒「昭和三十六年三月」ドイツ語	—	190	436
229	著作講演目録 巻一	—	手稿	1	冊	昭和30年代 後半	1960年 ～ 1964年	20.8 × 14.9	64	表紙「自昭和二十七年暮至昭和三十五年暮」なくなさ 会の記録ほか	—	190	382
230	抜刷、会報誌、ほか	—	手稿 及び 印刷	1	箱	—	—	26×19ほどの菓子缶箱に、入っている。 ・光宗寺誌、1冊、17.0×10.6、18頁 昭和三十三年三月三十日発行 ・正眼 創刊号、1冊、21.2×15.0、74頁 寄稿「はなむけ」昭和三十三年六月廿五日発行・濃飛民俗 第4号、 1冊、21.7×15.3、22頁 寄稿「美濃民俗雑報(その三)」昭和三十四年十月三十一日発行 ・風姿 6、1冊、18.5×12.9、22頁 さのはるえ寄稿「空町のころ」昭和三十一年九月十日発行 ・凌霄、1冊、21.2×14.7、6頁 昭和十六年十月五日発行 寄稿「塩なめ地蔵」文末「(昭和十六年七月三日)」 ・和歌の傳統、1冊、21.2×15.1、6頁 「國風」に寄稿 昭和十九年二月十日発行 文末「十八年十二月五日」 ・十八世紀の歴史観、2冊、21.3×15.1、12頁 神戸商船大学紀要第一類・文科論集・第五号(昭和三十 二年-一九五七年-二月) 抜刷 ・Schlözer の国家学、1冊、21.4×15.1、22頁 神戸商船大学紀要・文科論集・第四号(昭和三十一年-一 九五六年-三月) 抜刷 ・たくらみとこひ-十八世紀ドイツ思想史のうち、1冊、21.1×15.1 36頁 神戸商船大学紀要・文科論集・ 第三号(昭和三十〇年-一九五五年-三月) 抜刷 ・ユスツス・モエゼル、1冊、21.2×15.1、34頁 文末「昭和廿七年夏 神戸経済大学創立五十周年記念 論文集(経済学編)抜刷」 ・言葉と人の間から 教語法のこと、1冊、21.0×15.0、28頁 文末「昭和十六年三月七日」国民経済雑 誌第七十巻第四號抜刷(昭和十六年四月一日発行) 雑誌号数は手書き ・モメントについて、1冊、22.6×15.2、26頁 「昭和九年暮」神戸商業大学創立三十周年記念論文集 抜刷 ・クレタ文化の特質、2冊(うち1冊製本)、各22.2×15.1、32頁 文末「一九三三、秋」国民経済雑誌五 十六巻第一号抜刷 ・マギアとアニミズムス、1冊、22.5×15.2、26頁 文末「昭和九年秋・十年」国民経済雑誌五十八巻第 五号抜刷 ・アダム・ミュルレルの分業論、1冊、22.2×15.1、28頁 「十五年四月八日」国民経済雑誌六十八巻第 五号抜刷 ・西洋と東洋、1冊、22.5×15.2、18頁 文末「昭和十三年初秋」思想十月號別刷(昭和十三年) ・ギリシアの自然哲學に於ける「うつりゆき」(六世紀)、1冊、22.5×15.2、22頁 文末「(昭和一〇、一〇、二六)」 国民経済雑誌六十巻第一号抜刷 ・春秋、各1冊、20.2×15.4、第40號(昭和二十七年四月一日発行) 寄稿「二の替り(昭和廿六年十一月作)」: 27頁(昭和二十六年一月一日発行) 寄稿「よぎし」:29頁(昭和二十六年三月一日発行) 寄稿「ふゆがけ」: 28頁、第30號(昭和二十六年五月一日発行) 寄稿「父の思い出」:32頁、第33號(昭和二十六年九月一 日発行) 寄稿「寒菊(廿六年六月作)」:36頁、第52號(昭和二十七年十二月一日発行) 寄稿「往名紀行(二 十六年四月廿日作)」:39頁(昭和二十七年三月一日発行) 寄稿「古体和歌(山居五十首)」:24頁(52號は絵 のスケッチ1枚あり) 第31號(昭和二十六年七月一日発行) 寄稿「花ふだ(昭和二十四年夏作)」:40頁 ・NIPPON 日本、1冊、24.4×16.9、68頁 juli 1940 ・Die Anordnung der Figuren in der Tafelmalerei Deutschlands von 1350 bis 1450、1冊、22.6×14.8、60 頁 1931 ・はころも 學藝、1冊、25.6×18.2、12頁 昭和十八年十二月十日発行 寄稿「芭蕉の俳諧」文末(九月 二十一日) ・VORSTELLUNGEN VON EINER ANDEREN WELT IM JAPANISCHEN DENKEN UND FÜHLEN、1冊、 25.7×18.2、24頁 ・Über den Historischen Geist des Motoori Norinaga、1冊、24.8×18.2、28頁 1940 ・MONUMENTA NIPPONICA、1冊、25.6×18.1、28ページ 1941 ・納めたものの説明メモ、2枚(25.6×6.0、26.0×36.2)				190	470
231	愛知県立芸術大学 ミュンヘン国立 音楽大学夫妻 歓迎会資料	—	手稿	1	袋	—	—	→	→	【自筆のもの】 ・知事挨拶文案、25.8×18.6、8頁、2綴 ・招待状下書き、25.8×36.8、1枚 ・メモ、25.9×18.3、1枚 ・ドイツ文の活字印刷 11枚 ・学長挨拶、26.0×35.8、2頁、1部 【そのほかのもの】 ・招待状、 25.6×36.4、1通、昭和47年 5月1日、愛知県知事桑原幹根 ・ミュンヘンからの手紙、 29.6×21.1、1枚 ・期日メモ、25.4×18.6、1部 ・経費、25.8×18.4、1枚 ・日程表、26.3×35.2、1部、 昭和47年4月26日 ・晩さん会席順、18.2×25.8、1枚 ・音楽プログラム、 25.8×36.2、2頁、1部 ・5月5日大学□食 25.7×18.3、1枚	190	272	

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
232	VORSTELLUNGEN VON EINER ANDEREN WELT IM JAPANISCHEN DENKEN UND FUHLEN	—	印刷	50	冊	—	—	25.8 × 18.2	24	抜刷	—	190	460
233	手帳	—	手稿	1	冊	—	—	16.5 × 14.5	186	様々なメモ	—	190	449
234	永遠の回帰 送りたる人々	—	手稿	1	冊	—	—	21.0 × 15.0	86	送付名簿	—	190	372
235	(放送原稿)	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.4	24	巻頭「ただ今から、西ドイツのドイツ海外放送公社の提供による「国際写真見本市」の実況放送を致します。」	—	190	212

分類 2、著作原稿〔地域〕 1、伊深 0、総記 ※作成年月日ではなく、巻数順や名称・内容のまとまりを優先し並べた。

236	美濃伊深村の民俗 正編	美濃伊深村の民俗 正篇	手稿	1	冊	昭和23年 7月2日 以前	1948年 以前	25.8 × 18.4	144	序「この山里に移り住みて、すでに四とせ…昭和二十三年夏七月二日」(あとがき)「一本を柳田國男先生におくりまゐらせぬ。…昭和二十四年夏」	—	210	95
237	伊深村の民俗 外篇	伊深村の民俗 外篇	手稿	1	綴	昭和23年 ～ 昭和27年 春以前	1948年 ～ 1952年 以前	25.4 × 18.4	94	目次あり 巻頭「ちかくのむらむらのことを みききして かきあつめたる…昭和二十七年春」章によっては年月日あり 昭和23年～27年。	「伊深村の民俗 外篇ノ貳」を 昭和49年に綴 じたとあり。	210	40
238	伊深村の民俗 外篇ノ貳 附美濃 国民俗覚書補逸	伊深村の民俗 外篇ノ貳附 美濃国民俗覚書 補逸	手稿及び 印刷	1	綴	巻頭から 「昭和49年 晩春」以前	1974年 以前	26.0 × 18.6	118	巻頭「昭和四十九年晩春」目次「平井家年中行事控その二 美濃国民俗覚書 補逸」ほか	「瑞浪市の風俗調 査年中行事の部」 「大田町などの民 俗その他を記し たるあり。」の印 刷を一緒に綴じ ている。	210	41
239	美濃伊深村の歴史と 民俗 第一冊 神社と佛寺	美濃伊深村の民俗 と歴史第一冊 神社と佛寺	印刷	1	綴	昭和31年 夏以前	1956年 以前	25.8 × 19.0	104	目次あり「昭和三十一年 秋 謄写刊行 四拾部 非賣品」序「昭和三十一年、夏」謄写版	—	210	34
240	美濃伊深村の神社 と佛寺	—	印刷	1	部	昭和31年 夏以前	1956年 以前	26.0 × 18.8	86	「美濃伊深村の歴史と民俗 第一冊 神社と佛寺」謄写刊行本と同内容 序「昭和三十一年、夏」謄写版	受入番号34と同 内容	210	36
241	神社と佛寺	美濃伊深村の民俗 と歴史第一冊 神社と佛寺	印刷	1	綴	昭和31年 夏以前	1956年 以前	26.0 × 18.4	56	目次「村社および村社に準ずべき無各社 一、賀茂神社 五 二、星宮神社 八 三、諏訪神社 一二…寺院一、正眼寺 三四 二、龍安寺 四七…」「昭和三十一年秋 謄写刊行 四拾部 非賣品」謄写版	受入番号34と同 内容 後欠	210	87
242	伊深村の年中行事 附 神社と祭祀	伊深村の年中行事 附 神社と祭祀	手稿	1	綴	昭和31年 以前	1956年 以前	25.8 × 18.4	156	後記「昭和三十一年春に謄写版にて刊行の「美濃伊深村の歴史と民俗第二冊年中行事篇」の草稿なるべし。また附録したる「神社と祭祀」はその第一冊の「神社と佛寺」の執筆よりも(その刊行は昭和三十一年秋)はるか以前のことと覚しく、…昭和四十九年四月二十一日」	—	210	39
243	美濃伊深村の歴史と 民俗 第二冊 年中行事	—	印刷	1	綴	昭和31年 春以前	1956年 春以前	26.0 × 18.4	66	巻頭「歳時習俗語彙」、「総合日本民俗語彙」の年中行事の項、柳田國男の「年中行事覚書」などに基準をもとめて、…もとは極めて簡単な 1 冊の稿本であったものが、今は項目ごとに一篇をなす大部のものとなった。…昭和三十一年春」謄写版	簡単な1冊とは 「柳田國男先生 に献じた「美濃 伊深村の民俗」	210	35
244	年中行事篇	—	印刷	1	綴	昭和31年 春以前	1956年 以前	26.1 × 18.8	30	序「前に柳田國男先生に献じた「美濃伊深村の民俗」の著しい不備を補ひ正さうとして企てた、これはその改訂の稿本である。…昭和三十一年春」謄写版	受入番号35と同 内容だが、欠失部 あり。	210	88
245	書き入れ本 年中行事	巻頭「美濃伊深村 の歴史と民俗 年中行事篇」	印刷	1	部	昭和31年 春以前	1956年 春以前	26.2 × 18.6	56	「美濃伊深村の歴史と民俗 第二冊 年中行事」謄写刊行本と同内容 謄写版	受入番号35と同 内容	210	37
246	美濃伊深村の歴史と 民俗 第三冊 草木と子ども	—	印刷	1	冊	昭和31年 10月	1956年	25.9 × 18.4	74	序「旧著「美濃伊深村の民俗」のうち、「草木と子ども」と「子らの遊び」の二章を改訂増補して成ったものである。」文末「昭和三十一年十月」謄写版 最後の頁「昭和三十一年十一月刊行 四拾部のうち 非売品」	—	210	96
247	書き入れ本 草木と子ども	巻頭「美濃伊深村 の歴史と民俗の うち 草木と子 ども」	印刷	1	部	昭和31年 10月	1956年	27.2 × 20.0	64	巻頭「野山の草木に親しむ子どもらの生き暮らし…童遊び、童うた、などから、子らの口合い、ざれ言、唄へごと、など」文末「昭和三十一年十月」巻末「昭和三十一年十一月刊行 四拾部のうち非賣品 謄写版	「美濃伊深村の歴 史と民俗第三冊 草木と子ども」 謄写刊行本と同 内容	210	38
248	美濃伊深の民俗 續篇 巻ノ一	美濃伊深村の民俗 (續補) 續編 巻ノ壹	手稿	1	綴	—	—	25.4 × 18.0	92	巻頭「こは、正篇の足らざるを補ひてつぎつぎに書き集めたるなり。」	—	210	1

番号	文 書 名	内 題 等	区分	頁数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(㎢) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
249	美濃伊深の民俗 続篇 卷ノ二	美濃伊深村の民俗 続編卷ノ貳 美濃伊深村の民俗 続編卷之貳	手稿	1	綴	昭和28年 秋以前	1953年 以前	25.2 × 18.0	118	巻頭「村の青年学級の昭和二十七年度の講義には、おのれ郷土史を担当したりたれば、この巻の志料は巻、参とあはせて、その素材となり、いま、目次を附してこれを製本す。昭和廿八年秋」。目次「伊深義民の碑 高倉神社」ほか	—	210	2
250	美濃伊深村の民俗 続篇 卷ノ三	美濃伊深村の民俗 続編卷ノ三	手稿	1	綴	—	—	25.8 × 18.2	128	目次「ト雲寺の過去帳とその檀家」、禅徳寺のことほか 冊数を数えたメモあり 1 枚	—	210	3
251	美濃伊深村の民俗 続編 卷ノ四	美濃伊深村の民俗 続編卷ノ四	手稿	1	綴	—	—	25.2 × 18.0	94	目次「年中行事拾遺」ほか	—	210	4
252	続篇 伊深村の民俗 と歴史 その五	美濃伊深村の民俗 続編その五	手稿	1	綴	—	—	25.6 × 18.4	106	巻頭「多く寺々の事を記せり」目次あり	—	210	5
253	美濃伊深村の民俗と 歴史 続篇卷ノ六	続篇 美濃伊深村 の民俗卷ノ六	手稿	1	綴	昭和33年 秋以前	1958年 以前	25.6 × 18.2	160	巻頭「旧伊深村役場蔵の古文書類による調査を集めたり。昭和三十一年九月の頃、役場の蔵書類を見に通ひたりき。昭和三十三年秋」目次あり メモ 10 枚	—	210	6
254	美濃伊深村の民俗 続篇 卷七	美濃伊深村の民俗 続編 卷七	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.4	80	目次「葬式拾遺、ことわざ拾遺」ほか 後記あり	—	210	7
255	他見無用 美濃伊 深村の民俗と歴史 その八 物語の部	伊深村の民俗と 歴史 その八 物語の部	手稿	1	綴	昭和35年 春	1960年	26.0 × 18.2	110	巻頭「人の世語りに語り伝へる事を書きしるした。その折り折り日記にとめてあったのを、今拾ひ集めて編んだ。昭和三十五年春」目次あり	—	210	8
256	美濃伊深村の民俗 続篇 卷九	美濃伊深村の民俗 と歴史続編 卷九	手稿	1	綴	昭和37年 ～38年	1962年 ～1963年	26.6 × 18.4	90	巻頭「昭和の三十七年より三十八年にかけてするす。…(今までの巻の補足および) 異伝・異説をかゝげたるあり。昭和三十八年秋」後記あり	—	210	9
257	美濃伊深村の民俗と 歴史 続篇卷拾	伊深村の民俗と 歴史続編 卷拾	手稿	1	綴	昭和38年 ～40年	1963年 ～1965年	26.6 × 18.4	122	巻頭「この巻三十八年より四十年にわたりてするす。…昭和四十一年正月」目次あり 後記「みづからの見聞ほか…」	—	210	10
258	美濃伊深村の歴史と 民俗 続篇卷ノ十一	伊深の民俗 続篇 卷十一・美濃伊 深村の歴史と民俗 続編 卷拾壹	手稿	1	綴	昭和41年 春以降	1966年	25.8 × 18.2	120	巻頭「おもに昭和三十九年より四十年に渡って書き留めた材料を編輯して成ってある。昭和四十一年春」目次「村仕事」ほか 出版社書籍案内しおり 1 枚	—	210	11
259	美濃伊深村の民俗と 歴史 続篇卷拾貳	美濃伊深村の歴史 と民俗続編 十二 伊深小学校百年 史資料	手稿	1	綴	昭和47年 8月頃	1972年	26.0 × 18.4	122	巻頭「伊深小学校百年史の編纂に当りて、集めたる資料を主として収めたり。…昭和四十七年八月」目次あり	聞き書きは月日を附す。	210	12
260	美濃伊深村の民俗と 歴史 続篇卷拾参	美濃伊深村の歴史 と民俗卷ノ十三・ 美濃伊深村の歴史 と民俗 続編 卷十三	手稿	1	綴	昭和47年 頃	1972年	26.0 × 18.4	102	巻頭「巻ノ十一につゞくものであり、昭和ノ四十三年より以降の見聞を集めて…昭和四十七年」「追記 昭和四十九年春」目次「伊深小学校の校歌」ほかメモ 1 枚	—	210	13
261	美濃伊深村の民俗と 歴史 続篇卷拾四	伊深の民俗と歴史 十四・美濃伊深村 の民俗と歴史続編 卷十四	手稿	1	綴	昭和47年 9月以前	1972年	26.0 × 18.4	80	巻頭「巻ノ十二につゞけておもに伊深小学校の百年史編纂の資料となるべきものを集めたり。昭和四十七年九月末」目次ありメモ 1 枚 しおり 1 枚	—	210	14
262	美濃伊深村の民俗と 歴史 続篇卷拾五 伊深小学校百年史 資料	美濃伊深の民俗と 歴史続編十五・美 濃伊深村の民俗と 歴史 続編 卷拾十五 伊深小学校百年史 資料	手稿	1	綴	昭和47年 秋	1972年	26.2 × 18.6	108	巻頭「巻ノ拾二および拾四につゞきて、なほ伊深小学校百年史の編纂のための資料を集む。聞き書きハ、その聞き書きの月日を附記す。昭和四十七年秋」メモ 3 枚 しおり 6	—	210	15
263	美濃伊深村の民俗と 歴史 続編卷十六 伊深小学校百年誌 資料	美濃伊深村の民俗 と歴史続編 卷十六・美濃伊 深村の民俗と歴史 続編 卷十六 伊深小学校百年誌 資料	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.8	114	目次「昭和十年前後より終戦後にわたれる小学校…ききがき」ほか 「卒業生の皆様へ」の印刷文書、メモ 1 枚	聞き書きは月日を附す。	210	16
264	美濃伊深村の民俗と 歴史 続編卷拾七 伊深小学校百年史 資料	美濃伊深の民俗と 歴史 続編 卷十七・美濃伊 深村の民俗と歴史 続編 卷十七 伊深小学校百年史 資料	手稿	1	綴	(聞き書きの 記録から) 昭和48年 2月以降	1973年 以降	26.2 × 18.4	116	目次「関也の人々よりの聞きがき 二月十七日」ほか「記念事業趣意書(案)」「記念事業推進組織機構(案)」「卒業生の皆様へ」の文書あり 伊深の歌譜面 1 枚	—	210	17
265	美濃伊深村の民俗と 歴史 編篇卷拾八 伊深小学校百年史 資料	美濃伊深村の民俗 と歴史続編 卷十八	手稿	1	綴	(聞き書きの 記録から) 昭和48年 3月以降	1973年 以降	26.0 × 18.4	114	目次「大洞の明治生まれの人々の聞きがき 四十八年四月九日」ほか	—	210	18

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
266	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇卷十九	美濃伊深の民俗と歴史 続編 十九	手稿	1	綴	昭和49年	1974年	26.2 × 18.4	110	巻頭「この年の春、美濃加茂市において市史編纂の企てあり… 昭和四十九年夏」附記「昭和四十九年 師走」目次あり 「附録 別所の藤田福太郎の日記抄録」の文末に「(以上四十九年九月十日記)」	—	210	19
267	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇卷貳拾	美濃伊深の民俗と歴史続編 卷貳拾 附伊深小学校百年史史料補逸	手稿	1	綴	昭和49年以前	1974年以前	26.2 × 18.4	110	巻頭「我が筐底にありし諸種の覚え書き、謄写刷りなどの紙片の、その内容伊深に関するもの 昭和四十九年」目次あり	—	210	20
268	美濃伊深村の民俗と歴史 續編卷貳拾壹 小田嶋家文書	美濃伊深村の民俗と歴史續編 卷二十一 小田嶋家文書	手稿	1	綴	昭和49年 秋	1974年	26.1 × 18.3	146	巻頭「正眼寺了心院文書と小田嶋家文書とよりの摘要を収む。…昭和四十九年秋」目次あり	—	210	21
269	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇二十二 小田嶋家文書	美濃伊深村の民俗と歴史續篇二十二 小田嶋家文書 美濃伊深村の民俗と歴史 續篇 卷二十二 小田嶋家文書	手稿	1	綴	—	—	26.1 × 18.6	92	巻頭「卷ノ二十一に収めたる小田嶋家文書の続きなり」目次あり	—	210	22
270	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇卷二十三	美濃伊深村の民俗と歴史續篇 二十三	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.3	126	巻頭「卷十九に続くものなり。古き二十年代の記録のいまだ書きとめてありしを改めて採取したるもの多し。」(目次)「麦打ちの道具」ほか メモ 1 枚	—	210	23
271	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇卷ノ二十四	美濃伊深の民俗と歴史 卷二十四 美濃伊深村の民俗と歴史 續篇卷ノ二十四	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.3	110	目次「ななくさ會」ほか	—	210	24
272	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇卷貳拾五	美濃伊深村の民俗と歴史續篇 二十五	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.4	92	目次「中世の揖深ノ庄 伊深の條理制」ほか	—	210	25
273	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇貳拾六	伊深村の民俗と歴史 續篇卷二十六	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.8	94	目次「上切小場高帳 別所組」(役場蔵)ほか	—	210	26
274	美濃伊深村の民俗と歴史 續篇貳拾七	美濃伊深村の民俗と歴史續篇 二十七	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.4	106	目次「ト雲寺の古き過去帖 明和三年」ほか メモ 1 枚	—	210	27
275	美濃伊深村の民俗と歴史 卷二十八	伊深村の民俗と歴史二十八・美濃伊深村の民俗と歴史 卷二十八	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.6	98	目次「美濃國加茂郡誌」ぬきがき」ほか	—	210	28
276	伊深村の民俗と歴史 二十九	伊深村の民俗と歴史二十九・伊深村の民俗と歴史 卷二十九	手稿	1	綴	昭和56年以前	1981年以前	26.2 × 18.6	110	巻頭「昭和五拾四年頃かきはじめて…古き日記より抄出したるもあり、つきづきに書きとめたるもあり、順序不同のまゝなり 昭和五十六年」目次あり	—	210	29
278	美濃伊深村の民俗と歴史 卷参拾	伊深村民俗と歴史三十・伊深村の民俗と歴史 卷三十	手稿及び印刷	1	綴	昭和57年 春	1982年	26.4 × 18.2	70	巻頭「卷の二十九のあとを受けて昭和五十七年の二月に書きはじめぬ 昭和五十七年春」目次「佐野えんね八十の賀」ほか 卷末「伊深の畧年表(稿)」	—	210	30
279	美濃伊深村の民俗と歴史 卷三十一	伊深村の民俗と歴史三十一・伊深村の民俗と歴史三十一 附 地名 伊深畧年表 美濃加茂市内の小祠小堂字一覧	手稿	1	綴	(本文から) 昭和20年以降	1945年以降	26.4 × 18.6	132	巻頭「日記などに記せる古き記録より抜き書きしたるを先づ納め、それより新たに記録とどむべきことを次ぎ次ぎに書きとどめぬ」目次あり 「美濃加茂市内の小祠小堂字一覧昭和五十四年作成」	—	210	31
280	伊深村の民俗と歴史 卷参拾貳	伊深村の民俗と歴史卷参拾貳・伊深村の民俗と歴史卷参拾貳	手稿及び印刷	1	綴	—	—	26.2 × 18.8	80	目次「佐藤駿河ノ守と紀伊ノ守」ほか 講演原稿、わらべ唄の楽譜、伊深長者番付」ほか	—	210	32
281	美濃伊深村の民俗と歴史 卷三十三	美濃伊深村の民俗と歴史卷三十三 村史に記載せる重要事項の年表	手稿	1	綴	—	—	26.4 × 18.4	96	目次「本記載の重要事項の事項の年表 本書記載の巻ごとの重要事項 下切加茂神社の棟札」	—	210	33

分類 2、著作原稿〔地域〕 1、伊深 1、歴史・民俗

282	伊深目代小田嶋家文書寫	伊深目代小田嶋家文書寫	手稿	1	綴	昭和35年 春以前	1960年	25.3 × 18.2	118	序あり。巻頭「昭和三十五年春」目次「天和文書差上ヶ申一札之事(天和二年三月十八日) 總百姓連名…幕末維新文書伊深村兩所御林反別ヶ所下帖(申四月)」ほか	おみくじあり。	211	45
-----	-------------	-------------	----	---	---	-----------	-------	-------------------	-----	---	---------	-----	----

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
283	伊深の今昔	伊深の今昔	手稿及び印刷	1	綴	昭和49年 10月 ～12月頃	1974年	26.0 × 19.0	142	目次「伊深義民の事 草稿 - 「濃飛史艸」の掲載文 - 掲載史の補逸 伊深の正月行事 草稿 - 「美濃民俗」の掲載文伊深の今昔 莊川村史の序文 正眼寺所蔵宝物目録」序「伊深義民の事」は(美濃文化財研究会の会合で昭和四十九年〇月に話した)昭和五十一年「莊川村史序文」昭和十九年十月」	「濃飛史艸 昭和49年12月28日発行」、 「美濃民俗 昭和50.1.15」発行	211	62
284	美濃民俗 第117号	—	印刷	1	冊	昭和52年	1977年	25.6 × 18.3	10	寄稿「産育の民俗」「昭和 52.2.15 美濃民俗文化の会」発行	—	211	81
285	扇の傳 濃飛民俗	正徳五年 扇の傳	手稿及び印刷	1	綴	(趣意書 (案)のみ 年月日あり 文末から) 昭和53年 12月ゴロ	1978年	26.4 × 18.2	242	目次「正徳五年扇の傳 濃飛民俗二、三、四 たなばた会の歌 私の十五歳 美文会報 上大野見聞記 美文会報 庚申講お申土居改築趣意書(案)」	「濃飛民俗」は 寄稿の号が綴じてある(目次に四とあるが四号はない)	211 231 410	61
286	伊深村史の資料 古文書及金石文 目録 附 伊深の 昔の話し	伊深村史の資料 古文書及金石文 目録 附 伊深の 昔の話し	手稿及び印刷	1	綴	昭和56年 以前	1981年 以前	26.4 × 18.4	130	目録文頭「ここに伊深村の歴史を尋めるにあたり、歴史事実の資料となるべき金石文および古文書を列記する。」昔の話し文頭「伊深の昔の話」として伊深小学校のPTAの雑誌「いぶか」にのせたるものなり。昭和五十六年」しおり2枚	—	211	56
287	美濃國伊深(揖可) 郷の歴史	美濃國伊深(揖可) 郷の歴史	手稿	1	綴	昭和58年 正月～2月	1983年	26.6 × 18.6	114	序「昭和の五十八年正月より書きはじめた。されどそのままでに二月にいたりて止む。平安初期までにて…昭和五十九年三月」	—	211	63
288	龍安寺関係諸家系図	—	手稿	1	枚	—	—	71.0 × 231.5	—	「龍安寺ノ歳スル過去帖ノ記載ノミニ依りて作りタルモノナリ。慶長年間からの系譜	—	211	283
289	美濃伊深村歳時記	—	手稿	6	枚	—	—	25.9 × 18.3	6	原稿用紙に書かれている。	—	211	82
290	伊深の絵図	—	手稿	5	枚	—	—	24.6 × 33.6	5	薬半紙に墨で描く。	—	211	83
291	伊深の小字の地図	—	手描き	8	枚	—	—	28.0 × 87.0	—	—	彩色あり	211	91
292	美濃加茂市史より 伊深の主なできごと	—	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 36.5	5	項末「資料 佐野一彦 渡辺豊 佐野の筆跡ではない	—	211	94
293	調査メモ	—	手稿	11	点	—	—	→	→	・メモ(PILOT)、11.0×6.8、48頁、1冊 ・メモ(コクヨメ-40)、12.6×8.7、116頁、1冊 ・メモ(コクヨメ-40N)、14.4×9.8、33頁、1冊 ・メモ(背表紙青)、17.9×12.4、72頁、1冊 ・メモ(リング状)、15.1×10.4、84頁、1冊 ・メモ(原稿用紙)、18.8×12.8、44頁、1冊 ・メモ(ノート)、21.0×14.7、74頁、1冊 ・メモ原稿用紙(綴じ部分破れ)、18.0×12.8、76枚 ・メモ、25.7×36.5、1枚 ・メモ、17.9×26.1、1枚・メモ、26.0×36.0、1枚	—	211 231	274

分類 2、著作原稿〔地域〕 1、伊深 2、小学校等

294	脚本集 巻一	脚本集 あけぼの	手稿	1	綴	昭和22年 1月21日～ 昭和23年 1月23日	1947年～ 1948年	25.7 × 18.3	132	各文末 豆っ子「(昭和二十二年一月末作)」、髪長彦「(昭和二十二年一月二十一日作)」、七夕の宵「(昭和二十二年七月二十日朝作)」、かぐや姫「(昭和二十二年八月作)」、鉢かつき姫(昭和二十三年正月十九日 - 二十三日作)」かぐや姫出演者一覧(挿絵あり)1枚	伊深小学校などの子どもが上演した。	212	299
295	脚本集 二	脚本集 むらさめ	手稿	1	綴	昭和23年 2月～ 24年3月	1948年～ 1949年	26.4 × 18.3	190	各文末 隅田川「(昭和二十三年二月作)」、鬼のつばき「(昭和二十三年二月十九日作)」、松山鏡「(昭和二十四年三月作)」、別綴の脚本がはさんである「隅田川」「山吹の里「(昭和二十三年五月作)、虫めづる姫君(昭和二十四年二月作)	伊深中学校の女子などが上演した。	212	300
296	脚本集	—	手稿	1	部	昭和23年～ 昭和24年 春	1948年～ 1949年	25.6 × 18.0	116	「世論調査屋」文末「昭和二十三年春作、昭和二十三年九月改訂)」、「まぼろし」文末(昭和二十四年春作)「上演表 隅田川 昭和二十三年三月六日、伊深中学校一年女子。昭和二十三年五月三十日、伊深村中学校舎落成式、中学二年生女子。昭和二十四年二月二十七日、加茂野村小学校にて加茂郡西部学藝大●、伊深村中学校二年生女子」	「隅田川」の脚本はない。ドイツ語の印字された紙片2枚あり。	212	302
297	脚本集 巻三 心の 花束 郷土研究 春 祭里	—	手稿	1	綴	昭和25年 2月末	1950年	25.3 × 17.9	156	「心の花束」文末「(昭和二十五年二月末作)」、「春祭り」文末「(昭和二十五年二月作)」文頭「すべて中学の女の子のみにて上演すべく作りたい。」	郷土研究は、年月日なし。	212	301
298	PTAだより	—	印刷	1	綴	昭和32年 1月1日 発行	1957年	25.8 × 18.3	8	寄稿「お正月」	—	212	232
299	伊深小学校百年史稿 上編	伊深小学校百年誌 稿上篇・伊深小学校百年史稿上篇 第一巻	手稿	1	綴	—	—	25.8 × 18.6	88	本文頭「上編 見桃庵時代(明治六年乃至三十五年)」	—	212	49

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注	記	備 考	分類 番号	受入 番号
300	伊深小学校百年史稿 中篇ノ上	伊深小学校百年史稿 中篇・伊深小学校 百年史稿中 篇ノ上 第二巻	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.6	78	本文頭「中篇 円照時代 その一（明治三十六年乃至昭和二十年）」		—	212	50
301	伊深小学校百年史稿 中篇中	伊深小学校百年史稿 中篇中・伊深小学校 百年史稿中 篇ノ中 第三巻	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.6	68	本文頭「六（大正十一年乃至昭和十五年）」		—	212	51
302	伊深小学校百年史稿 中篇下及 下篇	伊深小学校百年史稿 中篇下・伊深小学校 百年史 中篇ノ下及下篇 第四巻	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.6	78	本文頭「七 昭和十六年乃至昭和二十一年」巻末「本文は、これにて終結。別冊第五巻にその後記あり。」		—	212	52
303	伊深小学校百年史稿 後記	伊深小学校百年史稿 後記・伊深小学校 百年史稿後記 第五巻	手稿	1	綴	昭和48年 8月14日	1973年	26.0 × 18.4	94	巻頭「伊深小学校百年史稿は、上篇、中篇ノ上、中篇ノ中、中篇ノ下および下篇の四巻に分冊して綴ぢあはせた。ここに第五巻として伊深小学校百年史稿後記を綴ぢる。昭和四十八年七月一日、記念式典が行はれたのち、…七月の末から八月のなかばに涉って、かつかつ書きつらねた。八月十四日をもって書き終へる。昭和四十八年八月」市内地図あり。		—	212	53
304	伊深小学校百年史稿 後記 續篇	伊深小学校百年史稿 後記續篇 第六巻	手稿及び印刷	1	綴	昭和48年 暮	1973年	26.0 × 18.4	148	序「第五巻の後記の続編として、まづ百年祭当日の資料展示会の出品目録を記録し、次いで百年史の正誤表を揚げ、さらに百年史に関してそののち記録にとどむべき雑多の事項 昭和四十八年暮」目次あり		—	212	54
305	伊深小学校生徒 入学年次表	—	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.4	16	—		—	212	66
306	伊深小学校百年史 編纂資料雑	—	手稿及び印刷	1	袋	—	—	→	→	【自筆のもの】 ・集計関係(用紙)36.4×25.9、1枚 ・メモ帳 15.2×10.8、4枚・48枚・38枚・50枚・43枚 ・メモ帳 12.6×8.8、59枚・11枚・9枚	【その他】 封筒にまとめて入っている。 ・アンケート 「伊深小学校についてのお尋ね」 25.7×36.4、50枚 ・アンケート結果まとめ 47.0×67.2、1枚 ・カメラ保証書 9.1×14.2、1枚 ・台紙10.2×14.4、1枚 ・名刺 9.1×5.4、1枚		212	70
307	伊深小学校百年史 編纂資料雑	—	手稿及び印刷	1	袋	—	—	→	→	・封筒にまとめて入っている 【自筆のもの】 ・伊深の里の歌 25.8×36.4、5枚 (内4枚は複写) ・メモ原稿 25.8×36.4、9枚 26.8×18.2、1枚	【その他】 ・草野昌彦からの手紙 1 通昭和 48(1973) 年 9 月 26 日付 (封筒)20.2×9.0、 (便箋)22.9×17.8、5 枚 ・卒業生、校舎、卒業証書、写真の複写 22.2×15.6、5 枚 9.0×15.6、1 枚 10.9×14.4、1 枚 ・伊深小学校之印 大きさまちまち、 7 枚 ・PTA 名簿 (S47、48 年度) 25.4×17.8、1 枚 ・開校百年記念事業名簿 25.4×36.0、1 枚 ・伊深小学校開校百年記念式典要項 昭和 48 年 (1973)7 月 1 日 25.8×18.2、 6 頁 ・アンケート「伊深小学校について のお尋ね」 25.7×36.4、1 枚 ・伊深小学校歌広舞作品複写 26.0×36.2、1 枚 ・領収書 昭和 48 年 6 月 15 日 (1973) 18.2×13.3、2 枚 ・夏季懇談会通知 昭和 48(1973) 年 6 月 14 日 25.9×18.2、1 枚 ・伊深中學校での表彰状、 認証状 昭和 25 ～ 27 年度分 (1950 ～ 1952)(表彰状)12.0×17.3、 5 枚 13.0×18.0 8 枚、(認証状) 13.2×19.4 4 枚、 15.4×21.2 5 枚 ・メモ 18.4×26.0 2 枚		212	71
308	PTA会報 いぶか 第六号	—	印刷	1	冊	昭和56年	1981年	27.1 × 18.6	30	冊子、寄稿「伊深の昔の話（その六）」「昭和五十六年三月二十日 発行 伊深小学校 PTA 教養委員会」		—	212	80

分類 2、著作原稿〔地域〕 1、伊深 9、その他

309	伊深村 成年式講演 (昭和廿五年 正月十五日)	—	手稿	1	部	昭和25年 正月15日 頃	1950年	18.0 × 25.2	46	—		用紙の裏は別原稿「しばゐのはなし」、封筒「附 芝居の話 青年学級講義」	219	228
310	昭和二十七年 星宮 本殿修理日誌 (中切上組総代記)	—	手稿	1	綴	昭和27年 2月1日 から	1952年	26.0 × 18.2	26	二月一日からの修理に関する日誌、会計等の記録。		—	219	205

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
311	昭和廿七年四月 星宮本殿修理會計 報告 並二不足額 寄附帳	—	手稿	1	綴	昭和27年 4月	1952年	28.0 × 21.8	4	「責任者 氏子総代 佐野一彦」	—	219	206
312	昭和廿八年乃至 三十年度 総代報告	—	手稿	1	綴	昭和28年～ 30年度	1953年～ 1955年	25.7 × 18.5	16	本文中「右廿九年四月二日氏子代表ヨリ氏子□へ報告」	—	219	207
313	茶会の記録	—	手稿及び印刷	1	袋	【そのほか】の 見舞受付、 会員 受付から 昭和32年 3月	1957年	—	—	地域の人たちとの茶会の記録 封筒 にまとめてある 【自筆のもの】 ・三月十七日茶會の事 8 枚 (うち裏 紙として使ったもの 4 訂正書入れ 1 ほか 3) 25.3×36.0 ・メモ 20 枚 (うち「生け花出品心得」 ほか) 18.1×25.3 ・正眼寺茶会控へ 25.3×18.2 12 頁	【そのほか】 ・正眼寺茶會書画展覧寄目録3部 25.7×36.6 ・はがき10枚 13.9×9.1 ・封書7通 20.3×8.4 ・昭和卅二年三月水屋見舞受付 昭和卅二年三月会員受付ほか計3綴 各35.9×13.1 ・荒雄教の呈茶券 17.8×21.8 1枚 ・封筒1 19.0×14.4 ・領収書3枚 (13.0×17.0 1枚 12.5×8.8 2枚)	219	396
314	昭和五十年度 組長控 上切組	—	手稿	1	冊	昭和50年 度	1975年	25.3 × 17.9	32	ノート 会計簿等、「回覧 白浜ゆき旅行の件」の原稿あり	—	219	424
315	たのしい家 かなしい家	—	手稿	1	綴	—	—	25.7 × 18.4	40	劇の台本 巻末「上切婦人會、研究発表劇…」	—	219	481
316	(自筆の原稿)	—	手稿	1	件	—	—	25.5 × 36.3	—	表紙「伊深村史のメモか」内容4点、12 枚	—	219	79

分類 2、著作原稿〔地域〕 2、美濃加茂市 1、美濃加茂市史 全体

317	美濃加茂市郷土誌料	—	手稿及び印刷	1	袋	—	—	【自筆のもの】 ・堂洞城址見取図 25.8×36.4、2 枚 ・伊深の民俗と歴史 正誤表 26.1×12.2、1 枚 ・碧雲山龍安寺 2 綴、26.2×18.2、4 頁 (「美濃伊深村の民俗と歴史」神社と仏寺編より) ・太田町林家蔵「請合申宗門之事」(写し) 26.0×36.0、2 枚 【そのほか】 ・「岐阜史学 第六九号」抜粋 1 綴、21.3×14.8、20 頁 ・旧太田宿本陣 福田次郎右エ門 家屋敷図 36.2×26.2、3 枚、内 1 枚裏に「福田太郎八」についての印刷あり ・牧野村記 録 1 綴、26.2×18.4、24 頁 ・美濃の文覚上人碑について 1 綴、26.2×17.2、6 頁 ・ 美濃加茂市周辺における古代瓦出土地について 25.7×36.2、1 枚 ・乍恐欠込御願奉申上 候書付之覚 1 綴、25.8×18.3、12 頁・伊深町地図 26.0×36.2、2 枚 ・美濃国加茂郡 伊瀬村五人組法度 1 綴、26.2×18.0、8 頁 ・西町の開拓史を語る 1 綴、26.4×18.4、22 頁、 正 誤 表 1 枚 あり ・道 中 奉 行 廻 状 (写) 1 綴、25.8×36.3、2 枚 ・村 方 法 度 25.7×36.3、1 枚 ・美濃国加茂郡今泉村五人組御改帳 1 綴、26.2×18.3、26 頁 ・第一 回古文書読解研究会 1 綴、26.2×18.2、8 頁 ・川合の昔を語る会 1 綴、26.3×18.2、 16 頁 ・加茂郡川合村舟庄屋文書 - その 1- 1 綴、26.2×18.2、12 頁・美濃国賀茂郡蜂屋 之内 伊瀬村検地帳 1 綴、25.8×18.4、24 頁 ・蜂屋 山犬狩り 始末記 1 綴、26.2×18.1、8 頁、 写真 2 枚あり・瑞林寺文書目録 1 綴、26.2×18.2、8 頁・古社寺調書 1 綴、25.8×18.2、4 頁・ 龍安寺の鐘銘について 21.2×29.7、1 枚・龍安寺鐘の写真複写 25.8×18.0、1 枚・古文書 の訳 1 綴、26.1×36.2、3 枚 ・古文書複写 各 26.2×36.2、①1 枚②1 枚③3 枚④2 枚⑤ 4 枚⑥3 枚⑦1 枚⑧2 枚⑨1 枚ほか1 枚、2 枚、10 枚・寺社所蔵品 指定目録 26.2×36.2、1 枚 ・ 伏見宿東より伏見宿・太田宿西まで 1 綴、26.3×18.2、10 頁 ・旧高井伴六家文書 2 綴 26.3×18.3、8 頁 ・古文書 市橋村弥兵衛訴状控 西脇村長右衛門死亡通知状 2 綴、 36.2×26.0、3 枚、2 枚・訳 25.8×36.4、1 枚				221	73
318	美濃加茂市郷土誌料	—	手稿及び印刷	1	袋	—	—	・封筒にまとめて入っている。 【自筆のもの】 「歴史的に見た日本人のこころ」1 綴、26.1×18.2、16 頁 「去る九月二九日、美濃加茂市上 古井公民において行われた第三回「郷土歴史を考える学級」講演原稿 「五〇、一〇、九」 【そのほか】 ・美濃加茂市史料目録 (近世) 1 綴、25.7×17.8、28 頁 ・歌謡 25.8×36.4、6 枚 ・は たご池の由来 31.8×59.7、1 枚 ・文化財小冊子の原稿 1 綴、26.6×18.6、64 頁 ・文 化財目録、資料 1 綴、26.4×18.4、62 頁、全国寺院名鑑の複写あり ・蘭叔と酒茶論 (複写) 25.8×18.3、1 枚・名誉市民津田左右吉先生の略年譜 1 綴、26.0×18.4、12 頁 ・旧太田 宿脇本陣 林家文書について 25.7×36.4、1 枚 ・第4回市史編集会議 資料 25.9×36.4、1 枚・ 太田代官歴代表 25.8×18.2、1 枚・池大雅略年譜 13.0×18.2、1 枚・美濃国伊深村惣百姓 訴状(写し) 25.7×36.4、2 枚 ・古文書読解講習会 訳:1 綴、26.0×18.4、8 頁 古文書:2 綴、 25.8×36.4、3 枚、26.2×36.4、3 枚資料:1 綴、26.2×36.2、2 枚 ・天和二年伊深義民関 係文書 1 綴、26.4×18.2、24 頁 ・小田島和彦家所蔵文書目録 1 綴、25.6×18.4、4 頁 ・ 美濃加茂周辺交通年表 1 綴、26.2×36.4、2 枚 ・古文書 各 36.3×26.2、2 枚、2 枚、2 枚、1 枚、 2 枚 ・古文書読解講習会受講者名簿 26.2×36.2、1 枚				221	74
319	美濃加茂市郷土誌料	—	手稿及び印刷	1	袋	—	—	【自筆のもの】 ・歴史メモ 25.8×36.2 9 枚 (うち佐野の筆跡と思われる 1 枚あり ひとまとめにしてある。) ・鹿の絵 18.2×25.7、2 枚 (佐野か) 【そのほか】 ・はたの宿 佐藤秀昭、昭和 51 年 3 月吉日、25.1×18.6、18 頁 ・加藤市左衛門関係文書 25.4×18.1、10 頁 ・血達磨の由来 増田五郎、36.0×26.6、5 枚 ・ 太寧寺鐘銘並引(写し) 25.6×36.3、1 枚 ・民俗をかたりあう会 美濃加茂市教育委員会、 26.2×18.2、10 頁 ・蜂屋兵庫頭頼隆- 織田家仕官以前の謎 渡辺雄二、25.8×36.2、2 枚 ・ 美濃加茂市文化財関係書類 26.1×35.7、3 枚・ひょうたんの絵 56.8×21.0 1 枚 ・古 文書 (複写) 伊深村惣百姓あて 36.2×26.0、10 枚・測量図 1 枚 18.2×25.7				221	74

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
320	美濃加茂市郷土史資料 その一	—	原稿及び印刷	1	袋	—	—	封筒にまとめて入っている。 【自筆のもの】 ・(写し)「龍安寺観音堂并鉤鐘畧記」 1 綴、18.2×12.8、56 頁文末「昭和廿六年夏八月於伊深中切追洞寫え」・寄稿「天和の伊深義民」「濃飛史艸」(創刊号)の複写と手稿(附け足しの文)を綴じたもの 3 綴、25.8×18.2、6 頁 複写のみ 1 枚 2 項・「伊深村史の資料 古文書及金石文」印刷 1 綴、26.0×18.2、10 頁、はがき 1 枚あり・正眼寺所蔵宝物目録 印刷 1 綴、26.2×18.3、4 頁 【そのほか】 ・「正眼 第三号」1 冊、21.6×15.6、14 頁 ・小田島和彦家所蔵文書目録 1 綴、25.6×18.2、4 頁 ・「太田川助郷船役について」 1 綴、25.6×18.2、12 頁 ・神田家所蔵文書 1 綴、26.2×18.2、12 項 ・史料 中山道太田宿 1 綴、26.2×18.2、40 頁 ・中山道太田宿脇本陣 1 綴、26.2×18.2、8 頁 ・加茂野村永代年号記録 2 綴、24.6×17.4、40 頁 地図 1 枚、お断り 2 枚有り ・西田家覚書 1 綴、26.0×18.2、6 頁 ・太田町史草稿 2 綴、26.4×18.4、14 頁 ・端林寺文書目録 1 綴、26.2×18.1、8 頁 ・近世の史料と史実 1 綴、25.7×18.4、4 頁 ・古文書複写 1 綴、25.5×35.6、5 枚 ・楽しい郷土史 1 綴、25.7×17.8、24 頁・岐阜日日新聞資料 -I- 1 綴、26.2×18.0、24 頁 ・岐阜日日新聞資料 -2- 1 綴、26.4×18.2、28 頁 ・市史編纂関係 計画表 25.7×36.4、1 枚 状況一覧 25.6×18.4、1 枚 大綱 1 綴、25.9×18.4、4 頁 ・市史編さん史料調査状況 1 綴、26.2×18.2、8 頁 ・調査票(白紙) 26.0×18.2、4 枚 ・原稿用紙(白紙) 26.2×18.0、10 枚 ・第 3 回市史編さん委員会 1 綴、26.2×18.2、6 頁 ・上古井村庄座馬家文書 1 綴、26.2×18.2、8 頁 ・村方法度 25.7×36.3、1 枚 ・美濃国加茂郡伊瀬村五人組法度 1 綴、26.0×18.2、10 頁 ・美濃国加茂郡今泉村五人組御改帳 1 綴、26.2×18.3、26 頁		221	72		

分類 2、著作原稿[地域] 2、美濃加茂市 2、美濃加茂市史 民俗

321	清水の湧き出るところ	—	手稿	1	綴	昭和53年	1978年	26.2 × 18.4	14	表紙「下峰屋の字志水の天神社から始めてカミサマノジョリヌギバ考に終る」文末「昭和五十三年二月二十六日」	—	222	65
322	美濃加茂市民俗 聞書覚 その一	美濃加茂市民俗 聞書覚 その一	手稿	1	綴	—	—	26.4 × 18.6	76	「目次 加茂野村(今泉 鷹ノ巣、市橋、稲邊、加茂野、木野) 三和村(川浦、甘屋) …」	—	222	58
323	美濃加茂市民俗 聞書覚 その二	美濃加茂市民俗 聞書覚 その二	手稿	1	綴	—	—	26.4 × 18.2	94	「目次 上古井(上古井 守山 川合) 下古井 蜂屋(上蜂屋 下蜂屋 中蜂屋 伊瀬) …」	—	222	59
324	美濃加茂市民俗 聞書覚 その参	美濃加茂市民俗 聞書覚その三・ 美濃加茂市民俗 聞書覚 その三	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.1	80	「目次 下米田(つづき) 郷社諏訪神社祭礼 市橋 古井 古井神社祭礼…」	—	222	60
325	寺院の祭礼	—	手稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.4	14	文頭「美濃加茂市における主なる寺院を挙げる…」	—	222	64
326	民俗関係 (市史民俗編 年中行事調査資料)	—	手稿及び印刷	14	部	—	—	→	→	封筒にまとめて入っている。 【自筆のもの】 ・年中行事などの各原稿 各25.8×36.4 ・太田町6頁 ・市橋3頁 ・蜂屋6頁 ・加茂野4頁 ・下古井6頁 ・三和(川浦、甘屋)6頁 ・上古井6頁 ・下米田牧野6頁 ・山ノ上村6頁 ・下米田村(續)5頁 ・蜂屋(加瀬田)6頁 ・山之上村上古井1頁 年中行事ほか6頁	【そのほか】 「蜂屋のお正月 蜂屋小 \$51. 12.15」発行 25.8×17.8 3頁 活字印刷	222	69
327	通史編 民俗編 原稿	—	手稿及び印刷	1	袋	—	—	→	→	・原稿用紙市史原稿「古代・中世」26.0×17.7、296 枚(佐野の筆跡でない部分あり) ・「市内小祠・小堂宇一覧」1 綴 25.8×18.0、23 頁(佐野の筆跡でない部分あり) ・「子どもの遊び」1 綴 25.8×18.0、15 頁 ・神社境内の見取図のメモ 1 綴 25.8×18.0、15 頁 ・「産育の習俗」「婚姻の習俗」「葬送の習俗」各綴りを 1 つにとじ合わせている。25.8×18.0、40 頁(10、14、16) ・「居住習俗」綴り 25.8×18.0、30 頁 ・「伊深の世語り」1 綴 25.8×18.0、14 頁 ・「傳説(資料)」1 綴 25.8×18.0、14 頁 ・「村制 族制」1 綴 25.8×18.0、34 頁 ・「食制食事の習俗」1 綴 25.8×18.0、16 頁 ・「民具(居住ノ内)」1 綴 25.8×18.0、14 頁	—	222	76
328	(民俗編) さしえ	—	手稿	1	袋	—	—	→	→	・絵を描いた用紙が貼ってある原稿用紙 26.0×17.7、12 枚 ・絵 12 枚 「胸当て とんぼとふね こて こんももひき 地つきのやぐら こばし いえのまどり 手こう 風の神送りの人形 やね かわら かざりのひも よてん たてぢん 石出し わたくり はたご つも かせくり くだ ちきりつけ かざりいと あぜ竹(横の絵) ちきりとはたくさ あぜたけ(斜め上からの絵) へだい」	—	222	77

分類 2、著作原稿[地域] 2、美濃加茂市 3、美濃加茂市史 歴史

329	美濃加茂市々古代篇 草稿	昭和五十三年秋 美濃加茂市々 古代篇 草稿	手稿	1	綴	昭和54年 春以前	1979年 以前	26.2 × 18.8	226	序「この草稿に基きて成せる原稿は、市史の編輯にあたりて…参考とせる資料を京都の資料館その他に求めたるを附記せり 昭和五十四年春」メモ 26.0×36.4 4 枚	関係資料、 論文(複写)とともに 綴じてある。	223	57
-----	-----------------	-----------------------------	----	---	---	--------------	-------------	-------------------	-----	--	-------------------------------	-----	----

分類 2、著作原稿〔地域〕 2、美濃加茂市 9、市史以外

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
330	美濃加茂市全図3 一万分の一地形図 字名入り地図 (和紙)、佐野邸 新築図面	—	手 稿 及 び 印 刷	1	地図 各1枚、 図面 2部	—	—	→	→	地形図 77.4×58.6、(名字入り地図) 78.7×55.5 図面 42.2×59.4、2 部	字名入り地図は、 地形図の裏に張り 付けてある。	229	67

分類 2、著作原稿〔地域〕 3、岐阜県・その他 1、全般

331	加治田 光宗寺 沿革史	—	手 稿 及 び 印 刷	1	袋	昭和32年～ 33年	1957年～ 1958年	→	→	「稿本慈雲山光宗寺誌 一、世代畧記 一、寺宝目録」 25.8×18.6 30 頁、「光宗寺史草稿 巻頭「昭和三十三年師走」1 綴 26.2×18.8 16 頁、「加治田村光宗寺の事」 1 綴 26.0×18.0 14 頁、「光宗寺誌 昭和三十三年三月三十日発行」1 綴 17.0×10.6 14 頁・取材メモ 3 枚 25.1×35.6 ・年表 1 枚 25.7×36.2	「光宗寺誌」は、 活字印刷。古文 の活用の原稿 (26.0×18.0 8頁) あり	231	68
332	抄録 美濃国民俗誌稿	美濃国民俗誌稿 抄録	手 稿	1	綴	昭和33年 8月17日	1958年	25.4 × 18.4	126	序「これは稲葉郡成清の森義一氏所蔵の寫本である。 昭和三十三年八月十七日抄録し了り、同じく二十日この序を 叙べる」目次「上 索引 一、厚見郡之内 鏡島村上松万 造報告 二、同 伊泉村朝日純一報告」ほか	上下二冊を1冊に まとめている。 岐阜市内地図1枚	231	42
333	美濃国民俗語彙手控	美濃国民俗語彙手 控	手 稿	1	綴	昭和33年 夏～秋	1958年	26.2 × 18.2	120	目次「美濃国民俗学書誌」「美濃国関係民俗語彙」「伊深 村民俗語彙」「日本民俗学大系(平凡社)」および「日本 民俗語彙(平凡社)」の美濃の項を執筆するにあたり、調査・ 作成したもの。各々に序あり(昭和三十三年夏～秋)」	—	231 ・ 後半 一部 211	43
334	美濃国民俗概説草稿	美濃ノ国民俗概説 草稿	手 稿	1	綴	昭和33年 7月31日	1958年	25.6 × 18.4	42	序「六月に依頼を受けて締切日を延ばしてもらひ七月の 末にともかく脱稿した。…日本民俗学大系(平凡社)の 第十一巻の地名別調査研究のうちに載るはずであるが… 昭和三十三年秋」文末「昭和三十三年七月廿一日稿」	—	231	44
335	美濃国民俗覚書 その一	美濃国民俗覚書 その一	手 稿	1	綴	昭和33年 以前	1958年	26.2 × 18.6	108	序「昭和三十三年の夏、平凡社の日本民俗学大系のため、 美濃国民俗概説を書くにあたり、文献を探り、また村々 の郷土史家を訪ねて書きとめた事がらの集録 昭和卅五 年春」	—	231	46
336	美濃国民俗覚書 その二	美濃国民俗覚書 その二	手 稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.6	114	目次「加茂郡 黒川村誌附探訪覚書 東白川村誌」ほか 黒川村誌文系「以上、昭和二十六年九月、中之平にて採 集」	—	231	47
337	美濃国民俗覚書 その三	美濃国民俗覚書 その三	手 稿	1	綴	—	—	26.0 × 18.6	96	「目次 その三 本巣郡 本巣郡誌(郡教育會) 揖斐郡 揖斐郡誌」ほか	「追記 昭和四十九年」	231	48
338	平井甚兵衛日記	—	手 稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.8	46	—	「加治田文之字屋一〇世 平井甚兵衛 公寿日記(寛政一一年)」中島勝国著、 1冊、平成一六(2004)年五月吉日、 21.0×14.8、90頁	231	479
339	県内歴史資料 スクラップほか	—	印刷 及び 手稿	16	点	—	—	→	→	【自筆のもの】 ・小学校六年生父兄への手紙(佐野一 彦署名、筆跡は違うか。)、25.0×35.9、 1 枚 ・メモ、26.0×36.2、4 枚	【そのほか】 ・太田宿より下麻生まで、26.1×18.1、 10 頁、1 綴 ・斎藤道三の二度出家説、26.2×18.1、 8 頁、1 綴 ・慶安御触書写、26.0×36.1、8 頁、1 綴 ・古文書(複写)、24.8×36.4、2 枚 ・時刻、方位、月齢表、26.0×36.0、1 枚 ・美濃民俗 複写、26.1×36.1、1 枚 ・赤色紙、25.0×35.0、6 枚 ・秋季大運動会ご案内、13.0×36.1、1 枚 ・ドイツ語の紙、8.3×15.0、1 枚 ・伝記目録、25.7×18.2、14 頁、1 綴 ・歴史(全県史)、25.7×18.2、10 頁、1 綴 ・伊深長寿番付、36.2×25.8、1 枚 ・昭和 57 年度 岐阜県歴史資料保存会 通常総会資料、25.7×17.8、14 頁、1 綴 ・美文会報、26.2×18.1、4 頁、1 綴 ・事務所だより(挟んである) 25.3×17.6、 1 枚、会計報告 25.4×36.2 1 枚 (自 筆メモに挟んである)	231	279
340	京都地図	—	手 稿	1	枚	—	—	79.0 × 109.5	—	—	—	231	209
341	京都の地図	—	手 稿	1	枚	—	—	93.4 × 73.4	—	—	京都中心部寺社 が書き込んであ る。彩色あり	231	89
342	京都の地図	—	手 稿	1	枚	—	—	77.9 × 93.4	—	—	深草山、深草郷 あたり、彩色あり	231	90

分類 3、著作原稿〔家族〕 1、自伝

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
343	つゆくさのやの 語らひ草	つゆく左能や かたらひくさ	手稿	1	冊	昭和13年	1938年	20.4 × 16.0	68	「はしがき おなじころのともどち よりあひて つきにひとよひ かたりあかす つどひをつくりぬ。なづけて つゆくさのや乃つどひといふ、…せうわととせまりみとせ つきごよみのふづきのはつか つゆくさのやのあるじさのかつひこ」「もくろく 一、日本の民屋のはなし(かつひこ) 二、おりものゝはなし(たけし) 三、日本文法のはなし(かつひこ) 四、そのつゞき(かつひこ) 五、友禅ぞめのはなし(たけし) 六、おぼけのはなし(かつひこ) 七、こどものあそび(かつひこ、えんね、たけし)」・お香に関するメモ 21.2×18.4 1枚・廿六年一月十一日造営資金御奉納領取書 12.5×17.7 1枚	—	310	356
344	徒由久佐のや家集 巻一	徒由久左能や家集	手稿	1	綴	昭和25年 8月	1950年	25.5 × 18.0	60	巻末目次「春の哥夏の哥秋の哥…」 「以上昭和廿五年八月撰 美濃加茂郡伊深村 佐野かつひこ 春枝あやめ」	—	310	141
345	徒ゆ久さのや家集 巻ノ貳	徒ゆ久さのや家集 巻ノ貳	手稿	1	綴	昭和26年	1951年	27.8 × 18.8	90	裏表紙裏「以上 昭和廿六年八月撰 美濃加茂郡伊深村」	自身の句を書いた和紙でくるんでいる。	310	428
346	美乎都久志 巻壹	美乎都久志 巻壹	手稿	1	綴	昭和54年 暮れ～ 56年春 (1巻～9巻)	1979年～ 1981年	26.0 × 18.2	162	「これは昭和の五拾四年の暮れより書きはじめて、巻の九まで、昭和の五拾六年の春に至りて手書き了へぬ。」自叙伝。	—	310	285
347	美乎都久志 巻貳	美乎都久志 巻貳	手稿	1	綴	—	—	25.8 × 18.3	114	—	—	310	286
348	美乎都久志 巻参	みおつくし 巻三	手稿	1	綴	—	—	26.1 × 18.2	128	—	—	310	287
349	美乎都久志 巻四	美乎都久志 巻四	手稿	1	綴	—	—	25.9 × 18.2	108	—	—	310	288
350	美乎都久志 巻五	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.2	110	「これには神戸大の講義や論文のことが簡単に述べられています。原稿論文を整理するときに役に立ちそう。春枝 二〇一〇.九.二〇」	—	310	289
351	美乎都久志 巻六	美乎都久志 巻六	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.4	112	—	—	310	290
352	美乎都久志 巻七	美乎都久志 巻七	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.2	140	—	—	310	291
353	美乎都久志 巻八	美乎都久志 巻八 美乎都久志 巻八	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.0	136	—	—	310	292
354	美乎都久志 巻九	—	手稿	1	綴	昭和54年 暮れ～ 56年正月 (1巻～9巻)	1979年～ 1981年	26.2 × 18.2	140	巻末「昭和五十四年の暮れより書きはじめ、昭和の五十五年のひととせに涉ってかつかつ書きすめ、五十六年の正月、その第九巻をもって、ここにひとまず完結した。昭和の五十六年の二月」	—	310	293
355	美乎都久志 巻拾	—	手稿	1	綴	昭和56年 春	1981年	26.2 × 17.5	102	「さらに書くべきことありてその巻ノ拾をここに追ひ次ぎの巻としてとして物するな里 昭和五拾六年春」	—	310	250

分類 3、著作原稿〔家族〕 2、親族

356	稿本 鹿蹄草庵聞書	—	手稿	1	綴	昭和24年 秋頃	1949年	25.3 × 18.0	178	巻頭「父上は號を岳南ととなへ給へど、大正の末別荘を軽井澤にかまへ給へけるをり、鹿蹄草と名づけ給ひぬ、されバ、この伝記をいま、かりに、鹿蹄草庵聞書といふ」「あとがき 昭和二十四といふとしのあき」目次あり。「千駄谷の家」見取図1枚。	—	320	304
357	鹿蹄草庵聞書 続篇	—	手稿	1	綴	—	—	25.8 × 17.8	20	—	—	320	305
358	浄光院殿傳記資料 巻一	浄光院殿傳記資料 巻一	手稿及び印刷	1	綴	昭和46年 冬以前	1971年 以前	25.9 × 18.0	136	文頭「いま 浄光院殿の伝記を編纂するにあたり、まづその資料を集む。ここに、もろもろの資料を見得るままに書きとどむ。昭和四十六年冬」目次あり。	—	320	219
359	浄光院殿傳記資料 巻二	浄光院殿傳記資料 巻二	手稿及び印刷	1	綴	—	—	25.6 × 18.0	64	巻頭「おもに東京商科大学(一橋)、如水会に閑居したる資料および歿後の葬儀、法要などの資料をあつむ。」目次あり。様々な関係資料が綴じてある。大学葬のしおり(1冊 28頁)。	—	320	220
360	浄光院殿傳記資料 巻参	浄光院殿傳記資料 巻三	手稿	1	綴	昭和50年 正月	1975年	26.2 × 18.0	124	「凡例 昭和十五年三月末より昭和十七年末までに涉れり 昭和五十年正月末」	—	320	221
361	浄光院殿傳記資料 巻ノ四	浄光院殿傳記資料 巻四 浄光院殿傳記資料 巻ノ四	手稿	1	綴	昭和50年 如月	1975年	26.2 × 17.8	122	巻頭「一彦の日記の昭和十八年正月より二十年の暮れに至る記事より、浄光院殿にかかはる事項を抄録したり。…昭和五十年の正月のなかばより二月にはじめに渡りて、風邪にわづらひて引き籠れる間、巻ノ三と巻ノ四とは編纂したりしなり。昭和五十年春如月」	—	320	222

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
362	浄光院殿傳記資料 巻ノ五	浄光院殿傳記資料 巻ノ五	手稿	1	綴	昭和50年 2月～3月	1975年	25.6 × 18.0	78	巻頭「一彦の日記の昭和二十一年のはじめより二十八年九月六日までの記事より浄光院殿にかかはる記事を抄録したり。そのうち昭和二十七年五月一日浄光院殿は身まから給ひしな里。この巻は昭和五十年二月より三月に渡りて書き綴りぬ。」	—	320	223
363	浄光院殿傳記資料 巻ノ六	浄光院殿傳記資料 巻ノ六	手稿	1	綴	—	—	26.3 × 18.2	78	目次「一彦日記抄録（昭和十二年三月より昭和十五年五月まで） さわらび集六二抜き書 三十三年七回忌に参列したる人々 父上手帖抄」	—	320	224
364	浄光院殿傳記資料 巻ノ七	浄光院殿傳記資料 巻ノ七	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 18.2	68	目次あり。原稿用紙（18.2×12.8 15枚）に書いた原稿あり。	—	320	225
365	佐野善作傳稿	—	手稿	1	点	—	—	26.2 × 18.0	176	佐野善作関連資料 親族の写真複写 24.8×18.2 12枚 千駄谷の家の見取り図 25.6×36.2 1枚	—	320	303
366	善作伝 資料	—	手稿	1	点	—	—	26.4 × 18.0	26	メモ書きの原稿	—	320	306

分類 4、著作原稿〔その他〕私的なものを含む 1、随想

367	随筆集 パイデウマ 上の巻	パイデウマ 上の巻	手稿及び印刷	1	綴	昭和12年 ～14年	1937年 ～1939年	26.3 × 18.0	102	巻頭「このうち「見物席」と「おともらひ」とは掲載紙のゲラ刷りあるいは掲載の新聞紙の残ってゐたのをそのまま用ゐて筆寫に代へた。昭和五十七年春四月」目次「パイデウマ（昭和十二年十二月） うつそみ（昭和十二年十月廿二日） 見物席（昭和十三年五月十六日） みづで（昭和十三年七月卅一日） おともらひ（昭和十三年九月四日） 民藝（昭和十三年十月十九日） 濱名紀行（昭和十四年六月一日）」 うつそみ文頭「万葉精神論と題してせる講演のおぼえがきの一部なり」みずで文末「昭和十三年七月三十日作」 おともらひ切抜文末「（昭和十三年九月四日作）昭和十五年五月廿五日神戸商大新聞所載」民藝文末「日記によれば昭和十三年十月十九日その稿成り、その年の「まるめら」十一月号に載りたり」濱名紀行「（昭和一四、五、三一） 一橋新聞、昭和十四年六月一日号所載」	—	410	384
368	濱名紀行 その他	—	手稿	1	冊	昭和10年 4月1日 ～23年 9月29日	1935年～ 1948年	23.4 × 16.7	106	目次「続かつひこ歌集 濱名紀行 おともらひ 一銭蒸瀝 形見の櫛 もしほぐさ かつひこ歌集拾遺」 続かつひこ歌集文末「みぎは「さのかつひこ歌集」（まるめら、昭和一一年二月）よりのちのうたで、「まるめら」にだしたもののうちよりえりあつめたもの… 昭和二十一年 伊深にて」 濱名紀行文末「（昭和一四、五、三一）（一橋新聞、昭和十四年六月一日號所載）」 おともらひ文末「（昭和一三、九、四）（神戸商大新聞掲載）」 一銭蒸瀝文末「（昭和一三、四、一四）」 形見の櫛「（昭和一六、五）」 もしほぐさ最後の句「二九、二九」 かつひこ歌集拾遺「つじぎり（まるめら一〇、四、一） あざけりうた（まるめら一〇、四、一）」ほか昭和 10 年代前半の歌・用紙 1 枚 包紙 1 枚	—	410 430	380
369	随筆集 パイデウマ 下の巻	パイデウマ 下	手稿及び印刷	1	綴	昭和13年 ～26年	1938年 ～1951年	26.2 × 18.2	120	目次「塩なめ地蔵（昭和十六年七月三日） 子どもの遊び（筒台文藝昭和十三年） 父の思ひ出（春秋 昭和二十六年五月） 御影随筆その一（神戸商大新聞） 附 御影町住吉村地図」 塩なめ地蔵文末「（昭和十六年七月三日） 凌霜 第百号記念昭和十六年十月号所載」 子どもの遊び（抜刷が貼ってある） 文末「昭和十三年十二月」 父の思ひ出文末「昭和二十六年五月「春秋」所載」	—	410	385
370	文合戦 原稿ほか	—	手稿及び印刷	6	部	昭和12年 師走、～ 昭和13年 9月4日	1937年 1938年	→	→	冬のイデュルル 33.4×24.4（9 頁） みづで 31.4×22.5（3 頁 七月三十日） ひとりごと 26.0×17.8（13 頁 十三、八、三〇） パイデウマ 25.1×17.8（20 頁 昭和十二年しはす） おともらひ 25.6×17.4（29 頁 十三九、四） 文合戦 26.0×17.6（11 頁）	「みづで」のみ印刷	410	234
371	随草原稿	—	手稿	1	袋	昭和14年 正月 ～14年秋	1939年	25.2 × 17.8	—	封筒に原稿の題名あり 御影雑筆（第一稿）（18 頁、昭和 14 年正月稿） Dermond（20 頁 昭和 14 年旧 9 月十三夜）言葉について（46 頁、昭和 14 年節分）しごと（26 頁 昭和 14 年 2 月 18 日）パイデウマ（第一稿）（14 頁） たなばた（14 頁昭和 14 年秋作）日本物語集のあとがき 日本文原稿（26 頁） 子どもの遊び（39 頁、昭和十三年十二月） 新聞切抜寄稿「文化と批判 火曜特輯 随筆書き」 何かの途中原稿 1 枚	—	410	230
372	随筆集 きぬ乃にほひ	—	手稿	1	綴	昭和16年 4月8日、 昭和24年 6月11日、 昭和25年 2月	1941年、 1944年、 1950年	25.7 × 18.2	102	目次「きぬのにほひ（十六年四月八日作）、花ふだ（二十四年六月十一日作）、若紫（二十五年二月作）」	—	410	307
373	塩なめ地蔵	—	手稿	1	部	昭和16年 7月3日	1941年	26.6 × 19.2	10	文頭「「凌霜」原稿」 文末「（昭和十六年七月三日）」	—	410	281
374	随筆集 想ひのまゝ	随筆集 想ひのまゝ	手稿	1	綴	昭和21年 8月10日～ 昭和24年 10月3日	1946年～ 1949年	25.7 × 18.0	94	目次「想ひのまま（昭和二十一年八月十日、神戸経済大学新聞所載）、たうもろこし（昭和二十二年八月十八日）、死にゆく人に（二十二年九月六日）、物うらやみ（二十四年六月二日）、唱歌（昭和二十四年九月九日）、ゲエテの誕生（昭和二十四年十月三日）	はしがき「昭和三十六年春」	410	308

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
375	中部経済新聞社説	—	手稿及び印刷	3	点	封筒 「昭和22年？」	1947年？	→	→	新聞切り抜き 27.8×10.0 20枚 原稿「文化は生活の中に」25.5×35.4 9頁 原稿「教育基本法と教育の原理」文頭「三月十六日(日曜)号-社説」20.8×14.8 57頁	封筒 「高島佐一郎のため執筆」	110	246
376	随筆集 ふるしんぶん	随筆集 ふるしんぶん	手稿	1	綴	昭和23年 12月2日～ 昭和26年 4月20	1948年～ 1951年	25.1 × 18.0	120	目次「ふるしんぶん(二十三年十二月二日作) 日の丸(二十六年一月十三日作) 住名紀行(二十六年四月二十日作)、風(二十六年二月十五日作)」	—	410	310
377	毎月随筆	毎月随筆	手稿	1	綴	昭和26年 5月～ 30年6月	1951年～ 1955年	25.3 × 18.6	82	目次あり。「和歌評釋は…月刊「新天地」に昭和の二十六年の五月より…二十七年の正月まで九回」、「精神史講座は…月刊「新天地」に昭和の二十七年の四月より…二十八年正月にて中止す」「はなごよみ「新天地」に昭和の二十八年の二月より連載したるものな里…二十九年の正月にいたりて完結す」「年中行事 これもおなじ雑誌にいだしたり 昭和の二十九年の三月より三十年の三月におよぶ。」「四季の便り これも「新天地」に…昭和の三十年三月より翌くる六月まで連載したるものな里。」各連載の切り抜きが貼り付けてある。京ほり人形第七回作品展覧会の目録1枚あり。		410	263
378	随筆集 白拍子	随筆集 白拍子	手稿	1	綴	昭和26年 6月15日～ 昭和30年 6月24日 昭和33年 2月24日	1951年～ 1955年	25.2 × 18.4	120	(目次)「古代紫(昭和廿六年六月十五日作)、山奥(昭和廿七年十月二十八日作)、白拍子(昭和三十年六月二十四日作)」巻末「実名を用ゐたがすべて虚構」	白拍子の文末「昭和三十三年二月二十四日」作の日付あり。	410	311
379	寒菊	寒菊	手稿	1	綴	昭和26年 6月30日 ～11月	1951年	25.4 × 18.2	188	巻頭「名古屋の「春秋」といふ小雑誌に載せたものである。昭和四十三年秋」 目次「寒菊」(二十六年六月三十日作)、しばゐ(二十六年月日作)、二の替り(二十六年十一月作)」後記あり	—	410	309
380	楽しくありがたい 夏休み	—	手稿	1	部	昭和26年 7月	1951年	26.9 × 38.4	4	文末「昭和二十六年七月かく」	—	410	243
381	春秋 第40号	—	印刷	4	冊	昭和26年 11月	1951年	21.3 × 15.3	20	表紙「昭和二十七年四月一日発行(第四十號)」「二の替り」寄稿、文末「昭和廿六年十一月作)」	—	410	467
382	随筆集 露草	随筆集 露草	手稿	1	綴	昭和27年 7月5日～ 昭和30年 6月	1952年～ 1955年	25.2 × 18.8	130	目次「つゆくさ(随筆)(二十七年七月五日作)、杜若(物語)(三十年六月作)」追記「昭和三十四年秋」	—	410	314
383	秋萩繪卷殘簡 上	秋萩繪卷殘簡	手稿	1	綴	昭和27年 9月～ 昭和32年 9月18日	1952年～ 1957年	26.0 × 18.6	184	巻頭「これを随筆にしてゐたのは作者の生き暮らしに即して偽りをまじへぬとともに、生活そのものをかふいう心構へで貫かうとする心組みからであった。」目次「一、秋萩(二十七年九月作)、二、残月(三十二年九月十八日作)、三、粉雪(年月不詳)四、麦の匂ひ(二十八年五月二十六日作)」	上巻に下巻の目次あり。	410	312
384	題知らず 上ノ一	題しらず 上	手稿	1	綴	昭和27年～ 30年頃	1952年～ 1955年	25.2 × 18.0	128	「昭和の二十七年の六月に書きはじめたるを、のちに書き足して長編となしたるものなれど、それも完結せずして終わりぬ。その終わりの部分は、昭和の三十年のあとさきに成りしと覚ゆ。「題知らず 上」とあれど、中も下も、もとより無きな里。昭和五十六年春」	—	410	386
385	題知らず 上ノ二	題しらず 上ノ二	手稿	1	綴	—	—	25.2 × 18.0	136	巻末「未完のまま」	—	410	387
386	秋萩繪卷殘簡 下	秋萩繪卷殘簡 下	手稿	1	綴	昭和28年 6月11日～ 昭和28年 11月26	1953年	25.2 × 18.5	212	各文末 矢車菊「(昭和二十八年六月、十一月作)、紫苑「(昭和廿八年九月後●作)、機織り女「(昭和二十八年十月十三日作)」、菊「(昭和二十八年十一月五日作)」もみぢ「(昭和二十八年十一月二十六日作)」「枯れ尾花」は年月不詳。	—	410	313
387	き梨怒起	—	手稿及び印刷	1	綴	昭和31年 3月以前	1956 以前	26.0 × 18.6	32	「はしがき 昭和三十一年といふとの三月」	雑誌寄稿「四季の便り」「年中行事」「和歌評釈」貼り付けてある。	410	273
388	謠曲隨想 大阪能学会館報(他メモ)	謠曲隨想	手稿及び印刷	1	綴	昭和32年 4月1日～ 33年 1月1日	1957年～ 1958年	28.5 × 19.8	40	巻頭「大阪能楽会館報に初號この方連載したものである。」目次「その一 東北(昭和三十二年四月一日、陽春版) その二 杜若(三十二年六月一日、薰風版) その三 蟬丸(三十二年八月二十五日、新秋版) その四 清経(三十三年一月一日、新年版) 掲載の切抜き4枚、メモあり	—	410	332
389	妄執	随筆集 妄執	手稿	1	綴	昭和35年 3月22日～ 昭和37年 立秋	1960年～ 1962年	26.0 × 18.8	214	巻頭「昭和三十一年初秋」目次あり。各文末妄執「昭和三十六年六月末」、反逆「[附記]未完なり。…昭和三十六年か。」、神の思ひ「昭和三十五年三月二十二日」、乞食「昭和三十七年立秋」[附記]昭和ノ三十六年の秋、書きいだして、ひさしくとだえたるを、翌くる年の夏、書きつぎたるなり。」、薬火「[附記]この物語は未完まま捨ててある。」	—	410	315
390	随筆集 還暦	随筆集 還暦	手稿	1	綴	昭和38年 3月～ 昭和39年 2月	1963年～ 1964年	25.8 × 18.4	158	巻頭「昭和三十一年初秋」各文末 初元結「(昭和三十八年三月稿)」、恩師「(昭和三十八年九月七日作)」、絵画き「(昭和三十八年七月十五日作)」、還暦(昭和三十一年一月、二月稿)	—	410	316

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
391	かりそめ 稿本 巻一	かりそめ 稿本 巻一	手稿	1	綴	昭和46年秋	1971年	21.0 × 15.0	94	「おもひだすまゝに、ひとのいったこと、ちらりとみきゝしたこと、われながらはずかしかったこと、うれしかったこと たゞそのぼそのぼ そのとききを あとさきのつなかりなく、きれぎれにかきとめて おかふとおもふ。昭和ノ四十六年 あき」	—	410	345
392	かりそめ 稿本 二	かりそめ 稿本 巻ノ二	手稿	1	綴	—	—	21.2 × 14.8	54	・家の見取図 1 枚 36.0×25.0	—	410	346
393	かりそめ 稿本 三	可りそめ 三	手稿	1	綴	—	—	21.2 × 14.8	94	—	—	410	347
394	かりそめ 稿本 四	可りそめ 四	手稿	1	綴	—	—	21.0 × 15.0	94	—	—	410	348
395	か梨そめ 稿本 五	か梨そめ 稿本 五	手稿	1	綴	昭和55年正月以降か	1980年以降か	21.0 × 14.9	160	「しばらくそのままにしておいた「かりそめ」をいまとりだしてよんでみると、これはいつのまにか おもひでばなしのあれやこれやをかきとめたものになってみて、…昭和の五十五年といふ としの正月」	—	410	349
396	かりそめ 稿本 巻六	—	手稿	1	綴	—	—	21.2 × 14.8	102	・和紙ためし書き押さえ紙 1 枚 ・高島暦昭和六十二年 1 冊 ・つゆくさの日記 巻廿一 に関するメモ 1 枚 25.8×36.0 ・古川弘文館書籍案内のしおり 1 枚	—	410	350
397	かりそめ 稿本 七 目次	—	手稿	1	綴	—	—	21.2 × 15.0	100	巻一～巻六(途中)までの索引	—	410	351
398	民藝 田中俊雄に 寄せるふみ	—	手稿	1	部	—	—	26.7 × 19.3	16	—	—	410	280
399	思ひ出	—	手稿	1	綴	—	—	26.5 × 18.3	14	—	—	410	213

分類 4、著作原稿〔その他〕私的なものを含む 2、小説

340	おひめさと子ども	おひめさと こども	手稿	1	綴	昭和12年 12月～ 16年12月	1937年～ 1941年	18.1 × 12.6	64	巻末「もくろくおひめさと子ども(昭和十六年十二月作) ユキヒメノハナシ(昭和十二年十二月作) 七夕(昭和十四年秋作) アリトチヨガミ(昭和十四年作) かづひこつくるはるえ糸がく」	—	420	475
341	小説集 怪異談	小説集 怪異談	手稿	1	綴	昭和13年 4月14日～ 16年5月	1938年～ 1941年	26.3 × 18.5	94	巻頭「浄書してここに収めた。昭和三十六年春」各文末「一 銭蒸瀝(昭和十三年四月十四日作)、形見の櫛(昭和十六年五月作)、怪異談(昭和十三年十一月	—	420	296
342	かぢのはのもん 春枝のよみもの 巻ノ二	春枝のよみもの 二ノ巻 かぢのはのもん かづひこつくる はるえ糸がく	手稿	1	綴	昭和17年 3月	1942年	18.2 × 12.5	54	かぢのはのもん「昭和十七年三月四日つくる」ハツ春「昭和十七年三月五日夜 ツクル」	—	420	476
343	フカダノイケ	フカダノイケ	手稿	1	綴	昭和20年 以降	1945年	14.4 × 10.3	56	文頭「フカダノイケトイフノハミカゲニアリマス。アヤメガ国民学校」ニカヨウトキ、イツモソノワキヨトホリマシタ。	—	420	478
344	森の花嫁	—	手稿	1	綴	昭和22年 1月	1947年	18.0 × 13.2	126	表紙「(かつひこ作綾目糸)「森の花嫁」「髪長彦(昭和二十二年一月二十一日さく)「豆っこ(昭和二十二年一月末作)」	「春枝綾目」 蔵書印	420	477
345	小さな子の 大きくなる話し	小さな子の 大きくなる話し	手稿	1	綴	昭和23年 7月2日	1948年	25.6 × 18.0	62	文頭「綾目のまる十一歳になったお誕生日の前の宵、加治田の光宗寺の幻燈會でお話ししたお話しを書きとめたもの 昭和二十三年七月二日」文末「(昭和二十三年七月一日、加治田村光宗寺にて)」	「春枝綾目」 蔵書印	420	397
346	雷と狐と石と夢 (全)	—	手稿	1	綴	昭和24年 夏	1949年	21.0 × 14.9	40	巻末「昭和の二十四年の夏、七月のふつかに、綾目の生れ日の祝ひに書いてやる。」	—	420	480
347	稿本 色好み 上ノ上	色好美上	手稿	1	綴	昭和25年 以前	1950年 以前	25.6 × 18.4	154	はしがき「ふと物語りを作らうという心が萌して書きはじめたのが、…所は美濃の山里においてであるが、どことは明かしていない。…昭和の二十五年といふ年の冬」目次あり。押し葉(もみじ)有り。	—	420	200
348	稿本 いろこ能三 上ノ下	いろこの美 上ノ下	手稿	1	綴	—	—	25.5 × 18.1	152	—	—	420	201
349	稿本 いろ古能美 中	いろ古能美 中	手稿	1	綴	—	—	25.4 × 18.1	232	—	—	420	202
350	稿本 いろこ能み 下の上	いろごのみ 下ノ上	手稿	1	綴	—	—	25.6 × 18.1	190	—	—	420	203
351	稿本 いろ古能美 下の下	いろごのみ 下ノ下	手稿	1	綴	—	—	25.3 × 18.0	188	—	—	420	204

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
352	小説 れふこいえ	小説れふこいえ	手稿	1	綴	上文末 「昭和26年 5月18日 作」	1951年	26.2 × 18.3	166	「目次 レフコイエ 上 レフコイエ 中」上は未完、中は短編にて完結、下は存在せず。中巻頭「登場人物は、女優シュトルベルグのほかは、実名の名をもってしたり。みな作者の滞独中の知人なり。昭和三十六年 はる。」	—	420	294
353	小説 まんさくの花	小説まんさくの花	手稿	1	綴	昭和40年 3月14日～ 46年3月	1965年～ 1971年	26.2 × 18.3	116	各文末「まんさくの花（昭和四十六年三月稿、昭和四十七年三月補筆）、大安寺（昭和四十五年十二月十二日）、紀元節（昭和四十年三月十四日）角川文庫しおり 1 枚あり、1997 年案内状 1 枚あり	—	420	295

分類 4、著作原稿[その他]私的なものを含む 3、和歌・詩歌 ※各々巻数が多いため、巻数順や名称・内容のまとまりを優先して並べ、かつその中で作成年月日順に並べた。

354	新撰 可徒ひ古歌集 徒本乃以志ふ美	新撰 かづひこ歌集 徒保 ^レ 能いし 婦 ^レ 美 全	手稿	1	綴	昭和6年～ 14年	1931年～ 1939年	25.7 × 18.4	126	はしがき「昭和の六年から十四年にいたるまるめらぶりのうたをえらんでひとまきにあんだ。…昭和二十五年冬至」148 首「作者みづからの注釋」	—	430	297
355	まるめら 第六巻第二号・ 第五号・第十号・ 第十二号・第七巻 第一号・第三号・ 第四号・第五号	—	印刷	6巻 2号の み2 ほか 各1	冊	昭和7年 2月～ 8年5月	1932年～ 1933年	各 39.4 × 27.0	各4	（毎月一日発行）昭和七年二月一日～昭和八年五月一日 六巻二号：短歌「またしゃくやくも」、六巻五号：寄稿なし、 六巻十号：寄稿「てまえみそ」和歌「つきがほしも」、六巻 十二号：批評文「宮田あき子の作品」「そへでかみ」、七巻 一号：寄稿「やまところ」「さのかづひこの作品」と題 して記事が組まれている、七巻三号：寄稿「うたのすがた」、 七巻四号：和歌「このくに」ほか「MEMO」に批評文、七巻五号： 寄稿「てがみふたつ」和歌「(ウウランド「かへし」)」	—	430	454
356	まるめら 第八巻第一号	—	印刷	1	冊	昭和9年	1934年	26.5 × 19.8	32	表紙「昭和九年一月一日発行」寄稿「ふたゝびやまとごゝろについて」「あだあらをのゑ」「かみふうせん 十二月号の作品批評」 ・「まるめら通信」(昭和十九年一月)が挟んである。	—	430	455
357	まるめら 第九巻第四号・ 第五号・第六号・ 第七号・第八号・ 第九号・第十号・ 第十一号・第十二号	—	印刷	各1	冊	昭和10年	1935年	各 27.2 × 20.0	各4	（毎月一日発行）昭和十年四月一日～十二月一日四号：寄稿「長歌論」、和歌「つじぎり」・五号：寄稿なし・六号：寄稿「紀記の歌謡のしらべについて」・七号：寄稿なし・八号：寄稿「紀記の歌謡のしらべについて（つづき）」・九号：附録「うたごゑ」（第七巻第一号附録昭和八年一月一日発行が挟んである）に批評文・十号：寄稿なし・十一号：寄稿「まと」・十二号：和歌「あざけりうた」	—	430	456
358	まるめら 第九巻第一号・ 第十巻第一号・ 第二号・第三号・ 第四号・第五号・ 第六号・第七号・ 第八号・第九号・ 第十号・第十一号・ 第十二号	—	印刷	各1	冊	昭和10年 1月1日、 昭和11年 1月1日～ 12月1日	1935年 1936年	→	→	（毎月一日発行）九巻一号：昭和十年一月一日十巻一号～十二号：昭和十一年一月一日～十二月一日各 26.6×19.8 九 - 一、十 - 七：4 頁 十 - 一～六、九～十二：8 頁 十 - 八：12 頁 九巻一号：寄稿「あたらしきとしのことば」、和歌、寄稿「前田夕暮論(その四)」・十巻一号：寄稿「あらたまのあらことば」、批評文・十巻二号：寄稿「あれやこれ(→)」・十巻三号：寄稿「やよひ」「あれやこれ(二)」・十巻四号：寄稿「ゆきどけ、信行にたよりす」・十巻五号：寄稿「むめざはひでしの」「にほんじんのかほ」「あれやこれ(三)」・十巻六号：寄稿「はし」「用語問答」、和歌「やぶかのなきごと」「しんぶん」・十巻七号：和歌「まよなか」・十巻八号：寄稿「語原考」「現代といふもの」「あれやこれ(四)」・十巻九号：和歌、寄稿「田中俊雄にこたへる文」・十巻十号：寄稿「現代といふもの(つづき)」・「日記抄」・十巻十一号：寄稿「漢字と「です」」・十巻十二号：寄稿「オストラキヌモス」「ことばのきよめ」について」「あげつらひ」	第九巻第一号の表紙には1936年とある。発行日は、昭和10年1月1日発行。和暦は年度での記載か。	430	457
359	まるめら 第十一巻第二号・ 第三号・第四号・ 第五号・第六号・ 第七号・第八号・ 第九号・第十号・ 第十一号・第十二号	—	印刷	各1	冊	昭和11年 2月1日～ 12年 12月1日	1936年 ～ 1937年	→	→	（毎月一日発行）昭和十一年二月一日～昭和十二年十二月一日 各 27.0×19.7 二～五、七～八、十、十二：20 頁 六：16 頁 九：24 頁 十一：28 頁 十一巻二号：「さのかづひこ歌集」 そのほかは各同人歌集特集	2号と3号の表紙に1937年とあるが、発行年は昭和11年（1936）と記載。4月1日の4号からは昭和12年となる。和暦は年度での記載と思われる。	430	458
360	まるめら 第十一巻 第一号～八号	—	印刷	各1	冊	昭和12年 1月1日～ 8月1日	1937年	→	→	大きさ 各 26.2×36.2 いずれも複写一：19 頁 二～六、八：20 頁 七：16 頁（毎月一日発行）昭和十二年一月一日～八月一日十一巻二号「さのかづひこ歌集」1号、3号～8号は各同人歌集特集	—	430	453
361	まるめら 第十二巻第一号・ 第二号・第四号・ 第五号・第七号・ 第八号・第九号・ 第十号	—	印刷	各・ 14号 のみ 3	冊	昭和13年 1月1日～ 8月1日	1938年	→	→	（毎月一日発行）昭和十三年一月一日～十月一日各 26.6×19.7 一～二、五、七～九：12 頁 四：32 頁 4号のみ3冊あり。十二巻一号：「和歌」と「詩」・二号：「バイデウマ」、和歌・四号：「国学と日本文化」・五号：和歌・七号：「國語國字問題」・八号：「みづで」・九号：「うつそみ」、和歌・十号：「でなほすこと」	—	430	459
362	もしほぐさ 上	毛志保久 ^レ 左 上	手稿	1	綴	昭和16年 5月～ 25年10月	1941年～ 1950年	25.4 × 17.9	184	序「こはよきもあしきもあるかぎりのうたをかきあつめつるなり」 巻末「右 昭和十六年五月より昭和二十五年十月まで」	—	430	134
363	歌集 もしほぐさ 中	もしほぐさ 中	手稿	1	綴	昭和25年 10月～ 26年8月	1950～ 1951年	25.4 × 17.9	100	巻頭「耐ふべきにゝ又〇印を附けたり昭和三十四年といふ年」 巻末「昭和廿五年十月より昭和二十六年八月まで」	—	430	135
364	もしほぐさ 下	も志保久左 下	手稿	1	綴	昭和26年 10月～ 昭和28年 9月	1951年～ 1953年	25.5 × 17.9	138	巻頭「みるにたふべきにゝ又〇しる志をつけたり昭和三十四年」 巻末「右 自昭和二十六年十月至昭和二十八年九月」	—	430	136

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(cm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
365	續 毛志ほぐ左 上	續 毛志ほ久”左 上	手稿	1	綴	昭和28年 9月～ 昭和30年 12月	1953年～ 1955年	25.2 × 18.2	150	巻頭「みるにたふべきにゝまた○志るしをつけたり昭和 三十四年」巻末「昭和二十八年九月より昭和三十年十二 月まで」	—	430	137
366	續 も志ほ久”左 中	續 もしほ久”左 中	手稿	1	綴	昭和31年 1月～ 昭和33年 12月	1956年～ 1958年	25.9 × 18.2	94	巻末「昭和三十一年一月より昭和三十三年十二月まで」	—	430	138
367	續 もしほ久”左 下	續 もしほぐさ 巻下 續 もしほぐさ 下	手稿	1	綴	昭和35～ 36年、 42年	1960年～ 1961年、 1967年	26.0 × 18.3	50	内題「昭和三十五年 三十六年 四十二年」	—	430	139
368	續々 もしほ久”左 上	續々 も志ほ久”左 上	手稿	1	綴	昭和42年・ 46年～ 48年	1967年・ 1971年～ 1973年	26.5 × 18.6	84	表紙「自四十二年十二月四十六年至四十八年」最初の句「一 二、一六」最後の句「八、二〇」	—	430	430
369	かつひこ句集 一	かつひこ句集 一	手稿	1	綴	昭和16年 ～22年	1941年～ 1947年	12.3 × 17.6	56	巻頭「昭和二十年秋十月美濃伊深正眼寺にて自ら撰しなほ 次ぎ次ぎに書き加ふ」「附 春枝綾目句集 一」1993（平 成 5 年）6 月 26 日付岐阜新聞 自身の俳句作品展の記事 の複写入り。句の上に作成年の書き入れ（昭和 16 年）～昭 和 22 年）句の上に作成年の書き入れ（昭和 22 年～24 年）	—	430	388
370	かつひこ句集 二	かつひこ句集 二	手稿	1	綴	昭和22年 ～24年	1947年～ 1949年	12.3 × 17.7	44	「附 春枝綾目句集 二」	—	430	389
371	香草吟社 句會記	—	手稿	2	綴	昭和20年 秋～23年	1945年～ 1948年	25.4 × 18.1	76	巻頭「昭和の廿年といふ年の秋九月…月ごとの句会の記か きしるす…」「九月二十一日 京都草野方句會」「十月十二 日（土）午后三時より八時まで 伏見三浪方句會」「十一月 十日大阪天下茶屋翠篁方句會」「十二月 京都魚眼洞方句會 」「昭和二十二年正月二十二日 天下茶屋翠篁方句會」「昭 和二十三年月日 京都上加茂包有魚猪野多毛師追悼句會」	そのほか、何か の原稿1枚、大学 の授業関係日取 プリント1枚	430	242
372	詩歌集 譯詩篇 巻壹	詩歌集 訳詩篇	手稿	1	冊	—	—	21.0 × 15.0	142	—	—	430	358
373	詩歌集 譯詩篇 ゲエテ 巻貳	—	手稿	1	冊	—	—	21.0 × 14.9	118	目次あり、和紙のきれはし、瞳ノートのしおり	—	430	359
374	詩歌集 巻四	—	手稿	1	冊	昭和25年～ 昭和32年 6月26日	1950年～ 1957年	21.0 × 14.9	160	目次あり。16 頁の「二五」を昭和 25 年とした。「ぼら のはなと三二、六、二六 三二、五、十四」とあり、32 年までを作成年とする。	—	430	360
375	詩歌集 巻五	—	手稿	1	冊	昭和32年 ～33年 7月16日	1957年～ 1958年	21.0 × 15.0	118	最初の詩「三二」最後の詩「三三、七、十六」とあり、 作成年はその期間とする。	—	430	361
376	詩歌集 巻六	—	手稿	1	冊	昭和33年 9月9日 ～ 12月20日	1958年	21.1 × 15.0	118	最初の詩「三三、九、九」最後の詩「三三、一二、二〇」	—	430	362
377	詩歌集 巻七	—	手稿	1	冊	昭和33年 12月28日～ 昭和35年 3月22日	1958年～ 1960年	21.0 × 15.0	142	最初の詩「三三、一二、二八」最後の詩「三五、三、二二」	—	430	363
378	詩歌集 巻ノ七	—	手稿	1	冊	昭和33年 12月28日 ～35年 3月22日	1958年～ 1960年	21.0 × 15.1	102	目次あり 最初の詩「三三、十二、二八」最後の詩「三五、 三、二二」和紙一枚。	受入番号363の 草稿か。	430	394
379	詩歌集 巻八	—	手稿	1	冊	昭和35年 9月16日～ 昭和45年 11月27日	1960年～ 1970年	20.9 × 15.0	138	最初から 2 つ目の詩「へんろ 三五、九、一六」最後の 詩「四五、一一、二七」	—	430	364
380	詩歌集 巻九	—	手稿	1	冊	昭和33年 10月25日～ 昭和40年 7月19日	1958年～ 1965年	21.2 × 15.0	140	最初の詩「三三、一〇、二五」最後の詩「四〇、七、一 九」	—	430	365
381	歌集 希ふ能本曾怒 野 上	歌集 希ふ能本曾 怒野 上	手稿	1	綴	昭和21年～ 25年	1946年～ 1950年	25.4 × 18.0	78	目次に年あり「二十一年…二十五年」巻末解題あり	—	430	432
382	希ふ能本曾怒野 下	希ふ能本曾怒乃 下	手稿	1	綴	昭和25年 ～30年	1950年～ 1955年	26.1 × 18.1	114	目次に年あり「二十五年 三十年」	—	430	431
383	續 希ふ能本曾怒濃	續 希ふ能本曾 怒濃	手稿	1	綴	昭和30年 ～32年	1955年～ 1957年	26.2 × 18.6	132	目次に年あり「三十年…三十二年」	—	430	434
384	續 希ふ能本曾怒濃	續々 希ふ能本 曾怒乃	手稿	1	綴	昭和32年 ～33年	1957年～ 1958年	26.2 × 17.9	88	目次に年あり「三十二年 三十三年」	—	430	429
385	喜寿祝賀能楽大会 番組 星丘先生金婚祝賀 会のしおり	—	印刷	各 1	点	昭和50年 昭和55年	1975年 1980年	→	→	喜寿祝賀：19.4×26.4 20 頁 表紙「昭和五十五年三月 三十日」 金婚祝賀会：18.0×25.6 24 頁 裏表紙裏「昭和 50 年 1 月」 いずれも佐野が、賀歌を寄せている。	—	430	450

番号	文 書 名	内 題 等	区分	員数	形態	作成年(和暦)	西暦	大きさ(mm) 縦×横	頁数	注 記	備 考	分類 番号	受入 番号
386	古体和歌山居五十首 正續二篇	—	手稿	1	綴	—	—	25.7 × 18.5	20	—	—	430	298
387	俳諧歌雑記帖	—	手稿	1	冊	—	—	15.0 × 21.0	62	「昭和二十一年九月十日旧八月十五夜月見俳句会」 「昭和二十二年五月三十二日正眼寺」 「七月十日夜運歌 御影にて」	昭和10年代後半 ～20年代後半だ と思われる。	430	381
388	ドイツ詩章	—	手稿	1	冊	—	—	20.9 × 15.0	84	手紙 4 通入り（うちエアメール 1、はがき 1 封書 2） ななくさ会案内 1 枚 ドイツ語メモ 3 点か 「ひとりごと」紙片 1	—	430	393
389	歌会撰歌の資料	—	手稿及び印刷	3	点	—	—	26.0 × 36.2	54	「歌会撰歌」第 1 回から 24 回（21 回なし）までの歌会の資料、うち第十二回は自筆 2 枚。七月集（3 枚）、八月集（5 枚）、長唄 1 枚 原稿 12 頁	—	430	216

分類 4、著作原稿〔その他〕私的なものを含む 9、その他

340	今は昔 （日記抄）	—	手稿	1	部	昭和10年 3月7日～ 昭和16年 7月26日	1935年～ 1941年	17.6 × 24.7 18.1 × 12.7	53 頁 34 頁	昭和 10 年 3 月 7 日～昭和 16 年 7 月 26 日の日記	途中で用紙の大きさ変わる	490	227
341	不明断片	—	手稿	1	綴	—	—	26.2 × 19.1	10	—	—	410	275
342	不明断片	—	手稿など印刷	3	点	—	—	→	→	いろいろな原稿 25.6×36.2、19 枚	・美濃加茂市全 国、39.0×25.5、 1 枚、手描き 5 枚 ・関市 金幣社春日神 社のあらまし、1 部	229 231 490	276
343	手帖	—	手稿	1	冊	—	—	14.8 × 10.3	68	—	—	490	390
344	時局日記	—	手稿及び印刷	2	部	—	—	→	→	原稿 25.8×18.4 38 枚 印刷 26.0×14.7 6 頁	—	410	241
345	茶箱點法全傳	—	手稿	1	綴	—	—	25.7 × 18.2	34	—	—	490	236

分類 8、他の資料

346	佐野一彦履歴	—	手稿及び印刷	1	袋	—	—	→	→	【履歴関係】 ・功績調書 3 枚 25.7×36.0 活字印刷 ・履歴書（活字） 1 部 25.6×36.2 5 頁 ・履歴書（手書き） 1 部 29.7×21.0 6 頁	【そのほか】 ・愛知県立芸術大学 職員録 1996 年 1 冊 14.8×20.9 72頁 ・檀家別過去帖2部 17.5×22.6 3枚 21.0×29.5 3枚、封 筒（23.5×11.9）入 り・功績調書手続	800	402
-----	--------	---	--------	---	---	---	---	---	---	---	---	-----	-----

渡辺和郎の地方文芸活動について

桜田 幸世

はじめに

平成二七年二月に開催された「地方」文化のつくり人―詩人・長尾和男と若葉文芸―展（三月二日・美濃加茂市民ミュージアム）では詩人長尾和男の軌跡をたどりながら当時の古井町の文芸運動について展示が行われた。そこでは『若葉文芸』は当初は無名の若者たちによって創刊され、長尾和男の登場によって『詩稿』『SATYA』へと活動を移していったことなどが紹介された^{〔注1〕}。当時の人物について「関係人物略歴」として部分的にまとめたところである^{〔注2〕}が、戦前戦後を通して数々の文芸誌発行に関わり、多くの影響を与えた古井町森山在住の新聞記者・渡辺和郎について注目すべき人物として位置づけていた。ここでは、最近の調査を踏まえ、若くしてこの世を去った渡辺の交流関係を中心に文芸・文化活動の足跡をもう少し詳しく追ってみたい。

岐阜中学と加茂農林時代

渡辺は大正九年（一九一八）、古井町に生まれた。古井小学校を卒業後岐阜中学校に進学、禁止されているにもかかわらず『わらぢ』という同人誌を二年の時（昭和八年頃）に発行した。岐阜の家田謄写版社で印刷された『わらぢ』は五号で終わった。その後、昭和一〇年頃、『聖』を加茂農林学校、岐阜中学校の生徒で発行する。そのころ渡辺は岐阜中学の英語教師で詩人の殿岡辰雄^{〔注3〕}と親しく行き来する間柄になっていた。殿岡から加茂農林学校に長尾和男という詩人がいると聞き、渡辺は長尾の存在を知ることになる。渡辺は休日古井小の同級生大畑（前田）威^{〔注4〕}と岐

阜へ出かけ、よく本屋や食事に行き、学生生活や文芸活動に充実した生活を送っていた。渡辺と大畑は昭和一三年にそれぞれ岐阜中学校と加茂農林学校を卒業した^{〔注5〕}。

『栖』の発行と名古屋時代

卒業後、渡辺は二年ほど田舎の電燈会社の事務員として働き、その後名古屋の兄の弁当屋の手伝いをしていた。昭和一四年、渡辺が編集して発行した『栖』第一年第三輯^{〔注6〕}によると当時の渡辺の住所は名古屋八尾傳であった。弁当屋の手伝いの一年間を渡辺は「一生涯のうちの最下級の生活体験」であったと言っている^{〔注7〕}が、希望にあふれる時でもあったようだ。その『栖』（昭和一四年）に掲載した詩「明るい朝」^{〔注8〕}で、渡辺は毎日繰り返される新しい一日の始まりを詠っている。整った構成と光が差し込むように静かに語りかける独特の表現はこの頃すでに完成されていたのではないかと感じる。また、渡辺は「僕たちは中堅でも、もとより大家でもなく、新進であり新鋭である。そう云はれることが、何も恥ではない。僕達は日本の若者である。僕達自身を高めることによって、名古屋文化を高めなければならぬし、ひいては隅々の人々をも高めなければならぬのである。」（前掲『栖』編集後記）と述べている。中央からもたらされる「文化」だけに満足せず、地方から生まれる新しい文化への期待を抱きはじめた時期でもあった。

この頃、佐織（現愛知県愛西市）出身の詩人で中央詩壇でも活躍していた梶原正之^{〔注9〕}が発行していた昭和一三年の『季刊 詩文学研究』第二輯（昭和一三年）に渡辺は詩作品「法城」を投稿し、長谷雄京二^{〔注10〕}らとともに「詩文学研究会」の会友となり梶浦宅で開催された詩文学研究会に何度も参加している^{〔注11〕}。そのほか梶浦正之序文・長尾和男跋文による『洗車雨』という渡辺の詩集発行の広告が出ている。残念ながらこの詩集

が実際に発行されたのかは確認できない。しかし、当時中央でも活躍していた梶浦が、会友になって間もない渡辺の詩集の刊行を計画していたということは彼を高く評価していたためと考えられる。

『季刊 詩文学研究』第四輯（昭和一四年）の消息欄によると、八月に渡辺は梶浦らとともに中京詩人会主催の詩話会へ参加したことが伝えられ、同欄には『栖』創刊についても紹介されている。同年発行の渡辺が編集した『栖』第一年第三輯の奥付には、発行者が「中京詩人会事務局」（住所は同人の長谷雄京二）となっており、『栖』も『詩文学研究』と同様、「中京詩人会」の機関誌であつたと思われる。

『季刊 詩文学研究』第三輯（昭和一四年）には「移民地にて」「旅順詩帖」の二作品がある^{〔注12〕}。『栖』第一輯第三号（昭和一四年）の渡辺の編集後記には「満州で買った高梁ペン」というくだりがあり、『思想と文学』第六巻第一号（昭和一五年）掲載の創作「北上列車」では満州を題材にしている^{〔注13〕}。ことなどから、昭和二三、一四年ころに満州へ渡つたと考えられる。作品中にあるように視察の団員として訪れた可能性もある。

東洋大学から中日新聞の頃

昭和一六年、渡辺は上京し東洋大学に入学した。東京では中村地平の近くに住んで交流を持ち、一緒に旅行に出かけるなど親しくしていたようである^{〔注14〕}。また勝承夫との交流や新しく文学青年グループなどにも加わっていたことを殿岡辰雄に伝えている。東京での渡辺の生活は東洋大学に在籍した一年半くらいであり、大学中退後は再び名古屋の兄のもとに身を寄せたものと思われる^{〔注15〕}。

この頃、渡辺は評論活動も行っていた。『思想と文学』第六巻第二号（昭和一五年）には評論「国民文学論議と新人について（文藝時評）」が掲載され、そこでは中村地平や太宰治のことも取り上げながら豊富な読書量を生かし

て論じている。昭和一六年には『蠅人形』に「名古屋詩壇の近状」を発表している^{〔注16〕}。ここから当時名古屋には集团的な運動がなく梶浦正之の活動や、自らが編集していた『栖』も芽吹かず無風状態であり^{〔注17〕}、目立つた動きもなかったことが窺える。

昭和一六年頃、殿岡辰雄、近藤幸雄らと『詩風俗』を発行^{〔注18〕}し、ここで渡辺は詩を発表していた。渡辺は東京在住のころも帰省のたびに殿岡を訪れていた。殿岡辰雄の詩集『黒い帽子』は詩風俗社から昭和一六年七月に発行されており、著者小歴に「冊子『詩風俗』ヲ発行ス」と掲載している。『詩風俗』は当局からの要請で三号も出さないうちに廃刊となった。この頃殿岡は渡辺と共に上京。品川の岩佐東一郎、新潮社の檜崎勤、共沢町の中村地平、杉並の中川一政を訪ねた。中川氏とは会えなかったが楽しい旅行だったと殿岡は語っている^{〔注19〕}。

昭和一七年頃、渡辺は中部日本新聞社に入社したようである。殿岡辰雄や吉田暁一郎の記述^{〔注20〕}などから社会部に属し活躍していたと思われる^{〔注21〕}が、入社の際経緯など詳細はわからない。

戦時色が濃くなる昭和一八、一九年については作品等著述が見つからないので渡辺の足取りはわからない。昭和一八年秋に渡辺は美津子夫人と結婚。二〇年の六月には長男賢治が誕生している。「日曜文学・私の二十代」^{〔注22〕}によると、「戦争中に応召を受けたが五日で解除の命令を受けた」とのことである。だから自分は「奇形児」であつて「二十代の人間が自分の姿をどう振り返っているのが分からない」とも述べている。しかし戦争のあった事実を踏まえつつ「私の二十代の虚無感が、どこかにあったものだといふ事を、しきりに思い出させてゐる。」と言い、それは「私たちより一〇年くらゐ前の世代の間では自信のなさがといふことが、その頃の青年を批評する言葉として言はれた。つまり無気力なのであり、信念がないのだ。」という、その人たちの持っていたものと同じだという。しかし、

「何かを模索しなければならぬ、何かを探求しなければならぬ。」そして自分の周囲を振り返ると「何ものか光のようなものを感じている。」「私はいま、明るいもの、美しいもの、清らかなもの、虚しいものに対して、はげしい意欲をもってゐる」と自分の決意と未来への期待を述べている。岡山によるとこの頃の渡辺は、本腰を入れて小説を書こうとしていたようである^(注23)。

『養座』と『若葉文芸』

『養座』創刊号^(注24)によると、渡辺は昭和二〇年ころ妻の実家で病氣療養中であつた。にもかかわらず、渡辺は岐阜県文化聯盟の旗揚げに尽力し、前述の『養座』を創刊している^(注25)。同時に森山では養座よりやや遅れて昭和二十一年一月、渡辺が顧問格として参加していた『若葉文芸』が創刊されている^(注26)。「SATYA」の堀滋美^(注27)によると彼が訪れた『若葉文芸』の事務所があつた森山の長谷川史郎^(注28)宅、昭月には『若葉文芸』『養座』両方の看板があつたという。これは両者に渡辺が関係していたからに他ならない。その年三月に長尾和男が台湾より帰還し、五月には若葉文芸の支部会に渡辺とともに顔を出している。そして同年八月には長尾が編集長となり「中濃芸能聯盟」として多治見から『芸文座』を発行^(注29)し、そこに渡辺は「七月の盗人」という創作作品を寄せている。更に『詩稿』が創刊される。

病の身の上ながら渡辺は行く先々で文芸雑誌の発行に関わっている。ともに『養座』を刊行した殿岡は、渡辺の死後「彼の存るところ必ず文学の花が咲き」と言っている^(注30)。

渡辺と岡本一平

さて、この頃加茂郡白川町（当時西白川村）に疎開してきていた岡本一

平を、昭和二〇年三月頃に渡辺は新聞記者として取材に訪れている^(注31)。昭和二十一年六月ごろに中部日本新聞から濃飛新聞に転出し文化欄を担当していたが、一平と知り合つたのはそれ以前のことと思われる^(注32)。その頃一平は「第三の外遊」と称し疎開先である加茂地域での生活を楽しんでいた^(注33)。一平が提唱した漫俳について、渡辺は一平への礼状という形で「きさらぎや水晶佛の加護に生く」と作品を残している（『濃飛新聞』（昭和二十一年二月日不明）。また、吉田珍斗は渡辺の一句「天才の漫俳見えず春遠し」（『漫俳回想』『漫俳のふるさと』（昭和六二年、白川町文化協会）を紹介している。確認できる作品はこの二点のみである。

昭和二十一年十二月に渡辺の病状が悪化した折には一平は、牛乳を携えてわざわざ見舞いに訪れ、その時の思いを一平は漫俳日記で「この人を失うようだったら、この県は差当り小説家との縁が薄くはなりはしまいか。」と心配している^(注34)。当時の渡辺の小説作品には『若葉文芸』四月号に掲載の「花の間」^(注35)、『養座』創刊号掲載の「茗荷の子」^(注36)などがあげられる。つい引き込まれてしまう自然な構成、静かに語りかけてくるリズムカルな文体が特徴的である。

また一平は、渡辺が新聞に掲載した記事の中で一平について「逞しい生活力」と書いたことが「わたしとしては見逃すべからざる文辞であつた」そして、その「生活力」なるものを…芸術していくつもりである。」^(注37)と述べており、渡辺の言葉によつて一平がずっと言葉にできなかったものがはつきりしたようである。一平と渡辺は頻繁に会い^(注38)、互いに尊敬しあう関係にあつた。『若葉文芸』別冊に収められた長谷川史郎宛ての岡本一平の手紙には、「渡辺和郎君などとも談合いたし…」とわざわざ渡辺の名が書かれ、価値のあるこの地の重要人物ととらえていた^(注39)。

渡辺は、突然見舞いに訪れた一平のことを「愛の深さに打たれ、涙を持って感謝した。」（『濃飛新聞』昭和二十一年二月（日不明））と述べ、一平に

対する深い尊敬の念がうかがえる。それは単に名士の訪問を喜んだというだけではないだろう。一平の「第三の外遊」の機会を得て可能になった地方文化の革新活動^(注40)という考えに渡辺たちは「なにものか光のようなもの」を感じたのではないだろうか。

しかし残念ながら岡本一平は新しい地方文化の創造を見ることなく昭和二三年一〇月一日に亡くなってしまふ。この頃渡辺は体調が思わしくなく、創作活動も思うようにいかなかったようであるが、そんな中、戦後の文化活動のあつけない衰退ぶりを嘆きつつ、一平が情熱をもって臨んだ地方文化の創造を呼びかける。『濃飛新聞』（昭和二四年七月二六日付け）の文化欄「地方文化の問題」では渡辺は次のように述べている。「濃飛地方を日本一の地方文化圏としたい。これが一平師の情熱でもあった。私たちはこうした意図を理想としてうけついでゆかねばならない。それにはいったいどうしたらいいか。やはりそれが空念仏に終わろうと文化文化と騒ぐことであろう。つぎに読書である。読書階級の数が増してこなければ文化のレベルは決して向上してこないのである。……」

渡辺は昭和二五年に『作家』同人として二つの短編小説を投稿している。その一つ「春窮」は静かな語りと整然とした構成の作品である。殿岡によれば、それは旧作を夫人が代筆したものだという。昭和二五年には中日新聞竹鼻通信部に在籍。その社屋で渡辺和郎は昭和二六年二月一日、享年三三歳の短い生涯を閉じた。長尾和男は『詩稿』復刊九号の告知で渡辺和郎の死を知らせ「彼の人物の出来は実に見上げたものだった。彼の気迫はいつもうたれた」と書いている。

今年一月の初めに森山の花豎の墓地へ行ってみた。大畑威の墓碑はすぐに見つかったが、渡辺和郎、長谷川史郎の墓碑はない。若くして病没した彼らは、親族についても情報が得られないため、SATYA 同人らの回顧談と美濃加茂市中央図書館の長尾文庫の詩誌などに残るわずかな資料に

よってしかその存在を知ることができない。昭和のはじめから古井・森山に住み地方文化を模索し続けていた彼らの足取りの調査を今後も続けていきたい。

（さくらだゆきよ 美濃加茂市民ミュージアム学芸係）

【注記】

(注1) 和歌由花ほか『地方』文化のつくりびと―詩人・長尾和男と若葉文藝展図録』美濃加茂市民ミュージアム、二〇一五年。（以下『図録』という。）

(注2) 桜田幸世『図録』「関係人物略歴」三四頁

(注3) 前掲『図録』、和歌「地方」文化のつくりびと―一〇頁（注28）参照。岐阜市を拠点として活躍した詩人（一九〇四―一九七七年）。関西学院の英文科在学中に『詩聖』に詩の投稿を始める。大正一四年に岐阜中学校（現岐阜高等学校）の英語教師として赴任。昭和一六年、渡辺和郎と詩誌『詩風俗』を出版。戦後は渡辺和郎と『蓑座』を発刊した。殿岡は「同人渡辺和郎君の追憶」『作家』三三号（昭和二六年）で、渡辺について詳しく述べている。

(注4) 前掲桜田「関係人物略歴」三四頁

(注5) 渡辺、大畑、殿岡のこの頃の動向、交流については、前掲、和歌「地方」文化のつくりびと―一〇―一四頁を参照。

(注6) 編集・渡辺和郎、発行・栖發行所。「中京詩人会」事務局・長谷雄京二。

(注7) 渡辺和郎「昔の人々」『地方文化』昭和二二年七月号

(注8) 「生水に白い塩を入れて障子窓をみると／しゃがんでいた日の色が薨の上へ伸びて／美しい一日の芽吹きが霧の晴れた圓屋根（ドーム）に耀ひはじめた。」

(注9) 明治三六年・愛知県佐織村勝幡生まれ。川路柳虹の「現代詩歌」によって詩作に精進する。のち詩文学研究会を主宰し、機関誌『詩文学研究』を発行していた。詩集に『鳶色の月』『三種の神器』などがある。昭和四一年没。（二〇一一年度特別展図録・叡智と情熱の詩人梶浦正之）八開郷土資料室、二〇一一年 及び、久野治「続々・中部日本の詩人たち」中日出版社、二〇一一年 などを参照

(注10) 長谷雄京二は松阪市出身（実家は寺院）。大正大学。名古屋新聞整理部。中京詩人会事務局。佐藤一英に師事。「詩文学研究会」会友、「聯」同人。渡辺らと『栖』を発行。昭

和一九年東京へ転勤、応召を受け出征。戦病死。昭和一八年「聯詩集 家」（聯詩社）。（久野治『続・中部日本の詩人たち』中日出版社、二〇〇四年）

〔注11〕「詩文学研究会」の会合以外でも梶浦宅を訪れていたことが『詩文学研究』第三輯と第四輯の消息欄からわかる。大畑威の写真資料にも梶原宅で庭の楠を背景に撮った写真が残っている。同時期に訪問した人物としては、名古屋の八木國夫、長谷雄京二、奈良進、渡辺の同級生の近藤幸雄、大畑威ら、昭和一四年発行の『栖』同人の氏名が複数ある。「詩文学研究会」の機関誌『詩文学研究』は昭和一二年から昭和一八年まで発行され、会員数二百名余りという詩誌であった（愛西市八開郷土資料室収蔵）

〔注12〕「移民地にて」では故郷を思う開拓民の想いを胸に「土の匂ひのする稗飯」を食べ「薄い溜りの汁にランプの灯が映り、何もいふまいと心に言ひきかせて嘔みくだきつすゝった。」と書いている。渡辺と彼らの視線の先には故郷日本の空がある。

「移民地にて」（全文）

訓練所の土壁に凭れていると、

星が松花港の岬で鋭く青味を帯びてまたたいていた。

晝間見た大きな犬が北辰にむかつて吠え、

泥の街の断ち截たれたところで幽かに灯りが点つた。

あれは日本の空だ。

赤痢で殖れた拓士たちも彌榮病院の窓からちっとみつめてゐることだらう。

土の匂ひのする稗飯を喰った。

薄い溜りの汁にランプの灯が映り、

何もいふまいと心に言ひきかせて嘔みくだきつすゝった。

高梁であまれたアンペラの上からペチカに向かつてゐると、

二重窓の外では北疆の夜がひしひしと冷えてゐる。

明日の準備にころごろと濁った水を沸す。

すると清らかな民族に流れてゐるちのように、

新しい響きが部屋中をふるはせた。

〔注13〕ソ連方面の軍隊慰問と移民地とを視察に行く団員として満州に行った主人公の目を通して現地の人々の様子が描かれており、編集後記には「新しき土、我らの満州「北上列車」はルポルタージュ文学として本誌に一層の光をます。」と評されている。当時の情勢を踏まえながら事実を書き綴ったものと考えられる。

〔注14〕前掲殿岡「同人渡辺渡辺君の追憶」による。殿岡によると渡辺から大学へ入学したと連絡があり、中村地平との交流の事、新しくできた文学青年グループの話を聞いたという。渡辺は『地方文化』一一号（昭和二年八月）の「新宿の易者」の中で自分の東京

での学生生活や中村地平との交流について語っており、その記述から、『詩文学研究』から名前が見られなくなった昭和一五年以降東洋大学に進学したと思われる。中村地平はこの頃台湾旅行より帰国、その後昭和一六年の二月に陸軍報道班員としてマレーに派遣された。その間の交流かと思われる。「新宿の易者」の中で後に中村地平氏の骨折りで小説が売れたことが書かれており、昭和二九年の濃飛新聞で「時には九州にまで出かけ」とあることから中村氏が宮崎に帰郷した後もその交流は続いていたようである。

〔注15〕前掲渡辺「新宿の易者」及び前掲殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」による。

〔注16〕「蠅人形」昭和一六年一月号、西条八十発行。（愛西市八開郷土資料室収蔵）

〔注17〕前掲久野「続・中部日本の詩人たち」によると、『栖』同人名古屋新聞の長谷雄京二は戦死し、平光善久「歴史的に見た岐阜詩壇の展望」『中部日本詩集一九五二年版』一九五二年によると近藤幸雄も若くして亡くなったようである。

〔注18〕前掲和歌「地方」文化のつくりびと」一〇頁〔注28〕参照。前掲殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」による。『詩風俗』は昭和一六年頃殿岡辰雄を中心に渡辺和郎、近藤幸雄らと発行されたと思われる。前掲平光「歴史的に見た岐阜詩壇の展望」でも紹介されている。

〔注19〕前掲殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」

〔注20〕前掲久野「続・中部日本の詩人たち」

〔注21〕前掲久野「続・中部日本の詩人たち」によると、当時名古屋新聞には長谷雄京二、坂野草史らがおり犬山の吉田暁一郎も彼らを通じて渡辺に出会ったといっている。殿岡は吉田暁一郎のことを渡辺の文学における一番の友人だったのではなかったかと言っている。

〔注22〕『養座』昭和二年二月号

〔注23〕前掲殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」

〔注24〕昭和二〇年十一月一日発行

〔注25〕前掲殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」。「図録」一三頁及び〔注4〕

〔注26〕前掲和歌「地方」文化のつくりびと」一四頁及び同ページ〔注5〕。なお、紙の入手だけでも大変だった当時、『若葉文芸』の印刷用紙はかなり良質のものであった。

〔注27〕前掲桜田「関係人物略歴」三五頁、堀滋美「長尾和男との出会いの頃」『SATYA』六九号、一九八七年

〔注28〕前掲桜田「関係人物略歴」三五頁

〔注29〕『芸文座』は現存品なし。『図録』一七頁〔注29〕。久野治氏によれば、服部印刷所は現在も多治見市にあるとのことである。

〔注30〕前掲殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」

(注31) 岡本一平に関しては二〇一三年三月に美濃加茂市民ミュージアムで企画展「岡本一平展―世態人情を描く―」を開催している。図録『岡本一平展―世態人情を描く―』美濃加茂市民ミュージアム、二〇一三年 参照。「漫俳日記」(「漫俳のふるさと」昭和六十二年、白川町文化協会)の二二年二月某日によると、一平が渡辺と知り合ったのは、渡辺が新聞記者として疎開先に訪ねてきたのが始まりと言っており、昭和二十二年の『若葉文芸』六月号の表紙絵は岡本一平の画であることから、昭和二〇年三月以降二十二年の五月頃の間のことと考えられる。

(注32) 「本號執筆者紹介」『地方文化』昭和二十二年七月号によると「中部日本新聞より最近濃飛新聞に転出、新進作家として活躍めざまし」とある。

(注33) 前掲図録『岡本一平展―世態人情を描く―』中、可児光生「第三の外遊」と「第三の青春」岐阜の「一平」一六頁〔注12〕

(注34) 前掲「漫俳日記」二二月某日、一〇九頁

(注35) 『若葉文芸』(昭和二十二年四月号) 所収。物語が完結しておらず、連載を予定していたようである。

(注36) 『養座』創刊号(昭和二〇年一月) 所収。若い女性の淡い恋心を描いた物語。主人公の勤務先が電燈会社であったり、思いを寄せる相手が長尾和男と殿岡辰雄を足したような人物である。

(注37) 前掲「漫俳日記」二二月某日、一一〇頁

(注38) 前掲和歌「地方」文化のつくりびと」一六頁〔注23〕参照。若葉文芸社が昭和に一平を迎え歓談したのはまだ一平が白川にいたところで、「濃飛新聞」(昭和二十二年二月「日不明」)「水晶の観音像」で「ある日先生の書斎に入ると」と渡辺が書いているところを見ると何度も一平を訪れているようである。

(注39) 『若葉文芸』別冊一に収められた長谷川史郎宛ての岡本一平の手紙は次のとおり。前掲可児「第三の外遊」と「第三の青春」岐阜の「一平」一五頁参照

「地方の文化及び文藝に就いては、これはなかなか興味ある大きな問題にて、地方は従来の如く、都会のそれに、追従憧憬すべきか、はたこの時代を機として独自の特色を創造すべきか、問題の要点はここに係り申し候。地方在住の文芸愛好家は誰しも後者を望まざるべし。しからばその具体実践や如何に。要は、世界の文芸の水準を、都会文壇を通じての二重屈折でなく、直接に取り入れ、いはゆる地方なるものの、価値と認識を新たにすべく、これは非常なる勉強を要し候。この価値を新たに認識せし、地力なるものを芸術によって表現せんに、自惚れや独りよがりでなき、確たる自信を持つべく候。これには十分なる客観的批判を要し候。」「日本の田園なるものの、土を数珠玉の如く大事にし、細工品の如く細かく手の行き届いた田畑は世界の美術品に御座候この見方からす

れば富士の如くは舊套にして日本人独りよがりの美の範疇なり。」「右のごとき、認識と、自信を持ち来るとき、もはや、地方は、都会対地方の如き狭き意味のものに非ず。地方は、日本の文化代表の特色の一つとも相成るべく、これに文藝的表現を加ば地方文藝は、日本文学の重心と相成るべし。」「他のものもそうなれど、殊に芸術では、その中の少数でも良けれど、超秀作家の超秀作品を是非必要と致し候。」「小生も微力ながら、渡辺和郎君などとも談合いたし、自分の勉強方々、応分の御手伝ひ致すつもりに御座候。」「

(注40) 前掲可児「第三の外遊」と「第三の青春」岐阜の「一平」一六頁

*本稿に関する調査は和歌田花(美濃加茂市民ミュージアム学芸員)と協力して行い、原稿作成に関しては可児光生(美濃加茂市民ミュージアム館長)が補佐した。

渡辺和郎 年譜

年	和暦	年齢	事 項	著述・作品	典拠	備考
1918	大正9		大正9年ごろ古井に生まれたとされる		「長尾先生とぼく6」『SATYA99』(1996) 大畑威、「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
1932	昭和7	14	3月古井小学校卒業。6年生卒業して岐阜中学へ行った 加茂郡小学校六年生400mリレー、アンカーで優勝		「長尾先生とぼく6」『SATYA99』(1996) 大畑威	
			4月岐阜中学 陸上部		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
			このころ、土曜日の夜、日曜日は大畑と行動を共にした。岐阜市に出かけた		「長尾先生とぼく6」『SATYA99』(1996) 大畑威	
1933ころ	昭和8	15	二年の時、「草鞋」という詩の同人誌を始めた 古井小の同級生、岐中の同級生10人ほど 岐阜の家田謄写版社で印刷。5号で終わった		「長尾先生とぼく6」『SATYA99』(1996) 大畑威	『図録』(注31.32)参照
1935	昭和10	17	岐阜中学4年、殿岡辰雄と出会う		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
1935～1936	昭和10～11		県下学生競技大会400mリレーのアンカー、優勝		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
			校友会雑誌へ投稿	「現代漫画論」	「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	現存品なし『図録』p10参照
1935～1937	昭和10～12		『聖』発行創刊号は6月、印刷は古井駅の西の井戸印刷所 加茂農林、岐中の生徒、同人10人ほどが参加		「長尾先生とぼく6」『SATYA99』(1996) 大畑威	渡辺は殿岡となじんで家に遊びに行ったりうどんを食べに行ったり。和郎に長尾から原稿をもらうように言われた大畑は、木彫部に入部『図録』p10参照
1938	昭和13	20	岐阜中学卒業			
			田舎の電灯会社の事務員を2年ほどしていた		「昔の人々」『地方文化』7月号(1946.7)	
			詩文学研究会、会友となる		「消息」『詩文学研究』第2輯(1938.5.20)	新加盟者、奈良進(会員)、長谷雄京二、渡辺和郎(会友)
				「法城」(詩)	「消息」『詩文学研究』第2輯(1938.5.20)	
			(このころ満州に行ったと思われる 13年末から14年春頃か)		「編集後記」『栖』第1年第3輯(1939.12.1)	「満州に行った折に買った高梁ペン」
1939ころ	昭和14	21	家族は名古屋に出て住吉町で八尾傳という仕出し屋をしていた 渡辺はその手伝いをしていた(1年ほど)		「昔の人々」『地方文化』7月号(1946)、「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	『図録』では大学卒業後八尾傳で働くとしているが、「昔の人々」では中学を出て2年後のことと書いている
1939	昭和14	21	梶浦正之宅訪問 詩文学研究会から詩集『洗車雨』を発刊する予定だった		『詩文学研究』第3輯(1939.6.1)	「消息」:詩集『洗車雨』近刊。広告掲載 渡辺和郎(岐阜)梶浦宅訪問他に『聖』についての記述あり
				「移民地にて」『旅順詩帖』(詩)	『詩文学研究』第3輯(1939.6.1)	
			『栖』創刊。名古屋八木國夫、長谷雄京二、奈良進、近藤幸雄、前田威ら。他に女性同人もあり		『栖』第1年第3輯12月号(1939.12.1)、『詩文学研究』第4輯(1939.10.10)	「消息」『詩文学研究』:渡辺和郎、八木、長谷雄、藤波、小林諸氏発起にて詩誌『栖』創刊。『図録』p11参照
				「霧」(詩)	『栖』第1年第3輯12月号(1939.12.1)	作品は現存品なし
			6月18日詩文学研究会に渡辺出席、中部地方会員主催、尾張梶浦宅にて開催される		「消息」『詩文学研究』第4輯(1939.10.10)	午前は詩の朗読午後は詩の理論を研究
			8月20日中京詩人会主催詩話会に出席、名古屋鶴舞公園前資生堂にて開催、他の出席者、梶浦正之、八木國夫、長谷雄京二等	「夕顔抄」「霽間」(詩)	「消息」『詩文学研究』第4輯(1939.10.10)	
			『栖』第一年第2輯発行	「日曜詩信」	『栖』第1年第3輯12月号(1939.12.1)	現存品なし
			12月、『栖』第一年第3輯発行	「明るい朝」(詩)「編集後記」	『栖』第1年第3輯12月号(1939.12.1)	編集人・渡辺和郎、名古屋市中区鉄砲町3八尾傳方。発行人・八木國夫(栖発行所)、中京詩人会事務所(美濃甚アバート、長谷雄)
1940	昭和15	22		「北上列車」(創作)	『思想と文学』第6巻第1号(1940.5.25)	編集後記に『北上列車』への評あり『聖』同人香木清「ふるさとの夜」も掲載されている
				「國民文學論議と新人について」(文藝時評)	『思想と文学』第6巻第2号(1940)	『聖』同人香木清「光ある構圖」も掲載されている
1941	昭和16	23	上京。東洋大学文科入学(入学時期不明) 中村地平氏の近くに住み、中村と一緒に温泉に出かけたこともあった 詩人勝承夫、文学青年グループとの交流 友人に小林達夫(その後中退)		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄。「新宿の易者」『地方文化』11号(1947.8)	
				「名古屋詩壇の近状」	『蜩人形』(1941.1.1)	蜩人形:西条八十主宰、蜩人形社発行(東京)。名古屋支部あり
			(昭和16年頃中日へ入社 亀山巖を殿岡に紹介)		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄。	

1941ころ	昭和16		殿岡、近藤幸雄(渡辺の岐阜中の同窓生)らと『詩風俗』発行(三号も出さず廃刊) 渡辺は詩を書いていた		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄、『養座』創刊号、「歴史的に見た岐阜詩壇の展望」『中部日本詩集1952版』平光善久、殿岡辰雄詩集『黒い帽子』詩風俗社(1941.7)著者小歴に「冊子詩風俗ヲ発行ス」とある	
1942ころ	昭和17	24	吉田暁一郎と出会う		『続・中部日本の詩人たち』久野治(2004)所収の吉田暁一郎の記述より	吉田の記述によると昭和17年頃のこと。「のちに中日新聞社会部の記者渡辺和郎をしった」
			殿岡の私用で上京し品川の岩佐東一郎、新潮社榎崎勤、共沢町の中村地平、杉並の中川一政を訪ねた(中川氏とは会えず)		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
1943～1945	昭和18～20	25	応召を受けたが5日で解除		「日曜文学：私の二十代」『養座』2月号(1946.2)	
1943	昭和18		秋、美津子と結婚、殿岡辰雄が仲人を務める		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
1944ころ	昭和19	26	吉田暁一郎とともに長谷雄京二宅を訪ねる		『続・中部日本の詩人たち』久野治(2004)	
1945	昭和20	27	昭和20年3月に白川町に疎開してきた岡本一平を取材訪問(3月から『若葉文芸』の表紙に一平の絵がある6月号発行以前の間か)		「漫俳日記」21.12月某日『漫俳のふるさと』(1987)所収	
			6月、男児出生 宮沢賢治より、「賢治」と名付ける		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄、「日曜文学」『養座』創刊号(1945.11)	
			殿岡の疎開先訪問 岐阜県文化聯盟の旗揚げを要請		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
			11月『養座』創刊(1000部印刷)3号で廃刊となる 古井町森山在住 中部日本新聞岐阜支局勤務 長編を執筆中であった		『作家』35殿岡辰雄、『養座』創刊号(1945.11s20.11)	『図録』p13(注4)参照
			妻の実家に滞在(古井町森山)		「日曜文学」『養座』創刊号(1945.11)	
				「茗荷の子(創作)」 「日曜文学」	『養座』創刊号(1945.11)	
			(この頃本腰を入れて小説を書き始めていた。滝井孝作に作品を見てもらった。友人吉田暁一郎らと文学論をかわしたこともあった)		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)殿岡辰雄	
1946	昭和21	28	『若葉文芸』創刊 創刊号では岐阜文化聯盟の作家渡辺和郎と紹介されている 渡辺は 総顧問格として参加していた(当時は中部日本新聞記者)		『若葉文芸』創刊号(1946.1.1)、「ざっぴつ」『SATYA』37号(1967)長尾和男、「SATYA50周年を記念するにあたり」『SATYA』120号(2002)、「長尾和男との出会いのころ」『SATYA』69号(1987)、「SATYA100号を迎えて」『SATYA』101号(1997)以上堀滋美	
				「能動的懷疑」 「日曜文学：私の二十代」	『養座』2月号(1946.2)	
				「花の間」(創作)	『若葉文芸』4月号	
			『若葉文芸』支部長会議あり 5月19日、長尾和男と共に出席		『若葉文芸』5号	
			中部日本新聞社より濃飛新聞社に転出		「本誌執筆者紹介」『地方文化』7月号(1946)	
				「昔の人々」	『地方文化』7月号(1946)	中学を出てからの生活と兄信一の弁当屋で出会った人々について
			多治見『芸文座』(中濃芸能聯盟)創刊8.15	「七月の盗人」(創作)	『若葉文芸』9月号、『地方文化』(1946.11.1)第6号	藝文座については『図録』p17(注29)参照 現存品なし
			岡本一平「長谷川史郎への手紙」10月5日付		『若葉文芸』別冊1(1946.10.25)	『岡本一平展 世態人情を描く』p15参照
			『詩稿』創刊 『詩稿』の誌名は渡辺の発案であった		『詩稿』創刊号(1946.10.25)、「告知」 『詩稿』復刊9(1951.7.1) 長尾和男	
			加茂農林学校で第3回文藝講座の講師の予定だった(病気により中止)		『農芸春秋』(1946.11.20)	第12回の文芸講座は長尾和男、岡本一平が講師を務めた
			岡本一平が牛乳を携え病気見舞いに訪れる		「水晶の観音像」『濃飛新聞』(1946.12) 岡本一平「漫俳日記」12月某日『漫俳のふるさと』(1987)所収 丹羽紫峰 漫俳雑誌「漫風」(1949.11.5) P10	
			「きさらぎや水晶佛の加護に生く」(一平の見舞い礼状にしたためた一句)	「水晶の観音像」	「水晶の観音像」『濃飛新聞』(1946.12)	
			中村地平氏の骨折りで原稿が売れ初稿料を得る		「新宿の易者」『地方文化』11号(1947.6月)	作品不明「短編を3.4篇活字にすることができた」

				「草灯洞雑記」	『詩稿』第2号(1946.12.1)	
1947	昭和22	29	ちょっとした外出も難しい病状		「新宿の易者」『地方文化』11号 『地方文化』11号(1947.8)	
				「新宿の易者」	『地方文化』11号(1947.8月)	おもに昭和16年頃の東京時代の回想が書かれている
				「近代の再出発」	『詩稿』第4号(1947.2.1)	
					『詩稿』8((1948.3)	長谷川史郎死去(1947.9.21) 『図録』p19参照
1948	昭和23	30	岡本一平10月11日死去 岡本一平追悼文「いのち問答」を濃飛新聞に掲載	「いのち問答」	『濃飛新聞』(1948.12.25)	
1949	昭和24	31	(この頃濃飛新聞文化欄を担当していた)	「地方文化の問題」	『濃飛新聞』(1949.7.26)	
				「文藝時評」	『濃飛新聞』(1949.8.17)	
1950	昭和25	32	(この頃『作家』同人であった)		殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)	
				「逃げた女」(創作)	4月発行の『作家』に掲載、殿岡「同現存品なし渡辺和郎君の追憶」 『作家』35号(1951)	
				「春窮」(創作)	『作家』31号(1950.7.10)、殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951)	
			秋ごろ中日新聞社竹鼻支局に勤務		「文化ノート」『生活と文化』45号(1951.3.1) 小木曾旭晃	
1951	昭和26	33	2月1日死去、享年33歳。中部日本新聞社竹鼻通信部		「同人 渡辺和郎君の追憶」『作家』35号(1951) 殿岡辰雄、『生活と文化』45号(1951.3.1) 小木曾旭晃、『詩稿』復刊9号(1951.7.1) 長尾和男	
			「同人 渡辺和郎君の追憶」私の病床へ、渡辺和郎夫人美津子さんから一葉ハガキが届けられた。「…びっくりなさるかと思いましたが…今日 1 日午前十時ごろたうたう亡くなりました」…彼の在る所必ず文学の花が咲き、彼の語るとき必ず情熱の爆風の起る渡辺君、文学の鬼とも言ふべき渡辺君、今彼を失って痛恨やる方ないのは、常に彼から若い拍車を受けてきた私一人ではなからう。」(殿岡辰雄)		殿岡「同人渡辺和郎君の追憶」 『作家』35号(1951)	
			「文化ノート」「渡辺和郎君が死んだ。ここ2,3年来健康すぐれず…短編だが数種の創作もあり前途を嘱望されていた。」(小木曾旭晃)		『生活と文化』s26.3.145号「文化ノート」(小木曾旭晃)	
			「告知」「渡辺和郎が二月一日午前九時三十分、中部日本新聞社竹が鼻通信部の社屋で病死した…『詩稿』は彼の発案であった」(長尾和男)		『詩稿』復刊9号(1951.7.1)	
1954	昭和29		「県下 物故文芸家(戦後)を偲ぶ」「戦後文藝の草分け 渡辺和郎氏 鬼才的な存在」「共鳴した詩人や作家を訪れ度々上京し、時には九州まで出かけ…。文芸誌「若草」などにも大きく扱われ「若葉文芸」を創刊した」		岐阜タイムス(1954.8.15)	



勝幡(現愛西市)梶浦正之宅にて(昭和13から14年頃か)



渡辺和郎(裏面に「拓殖科 渡辺和郎」とある)



渡辺と大畑威(旧県庁前か)



旧青柳橋下で



『聖』の仲間らと



旧古井小学校校舎前

美濃加茂市民ミュージアム 紀 要

第 15 集

2016 年（平成 28）3 月発行

編集・発行

美濃加茂市民ミュージアム

岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋 3299-1（〒 505-0004）

TEL 0574-28-1110 / FAX 0574-28-1104

<http://www.forest.monokamo.gifu.jp/>

印 刷 有限会社 永田印刷

美濃加茂市民ミュージアム紀要 第15集(2016)

佐野一彦資料目録（著作原稿の部）

渡辺 祐子
可児 光生

渡辺和郎の地方文芸活動について

桜田 幸世